原案・イラスト
△○□×
Miwashiba
著
高良万由
Mayu Takara
1bit Heart
角川書店

1bit Heart

1bit Heart
[ワンビットハート]

contents

contents

1bit Heart

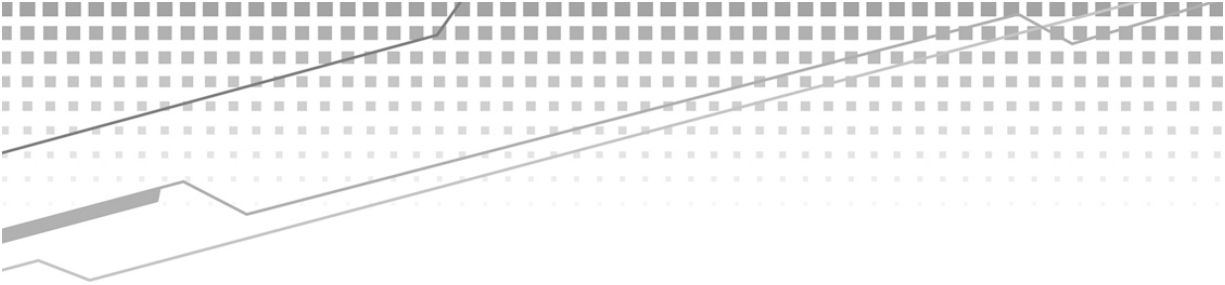
原案・イラスト

Miwashiba

著

高良万由

Mayu Takara

角川書店

プロローグ

――お願い、待って。

白い光の中に、遠ざかっていく背中。

手を伸ばしても届かない。あの人はいつだってあまりに遠い。それでも諦めきれずに追いかける。

走って、走って、走って。呼吸が上がって、息が苦しくて、目尻に涙が滲む。

見失ってしまう。会えなくなってしまう。前で揺れていた細い背中が光に飲み込まれて消えていく。

――だめ。行かせない。

どうやって？

――私の全てを賭けても。

それができるの？

――あの人がいなければ、今の私はいない。

助けてもらった。救ってもらった。まだきちんとお礼も言っていない。

大切なことを何一つ、伝えていない。

――助けたい。今度は、私が。

そして伝えるのだ。喜び、嬉しさ、恥ずかしさや、胸の痛くなる寂しさを。

あの人と一緒にいて何を感じ、何を思ったか。全て伝えなくてはいけないから。
「……待って！」
叫んだ声はかすれて、ほとんど音にならなかった。
肌が焼け付くように痛む。持ち上げる足がひどく重い。これ以上進んでは危険だと頭の片隅で警鐘が鳴る。けれど。
「お願い、待って！」
悲鳴のような音が喉から飛びだすのと同時に、足下の地面がなくなった。
身体がバランスを失い、真っ白な虚空の中を凄まじい勢いで落下していく。
ぐにゃり、と目の前が歪んだ。どこからか現れた音や映像、あらゆる記憶が恐ろしい速度で数を増やし、白い空間を食い尽くす。
ふと違和感を覚えて見つめた指先は、忍び寄った情報たちに食いつかれ、半ばまで消えかけていた。慌てて目を閉じ、自分の形を強く意識する。強く、強く。
――大丈夫。私は消えない。
目を開くと、指先は元通りの形を取り戻していた。ほっとしたのも束の間、周囲を旋回する情報の波は今も襲いかかる隙を狙っている。
ここへ取り込まれ、存在を消されてしまえばもう二度と元には戻れない。
そうだ。わかっていて飛び込んだのだ。どれだけ危険か、理解はしていた。それでも。
――私は絶対に、あの人を助ける。
自分の身を抱き締め、強く願う。
願いはひとつ。あの人のいる場所へ辿り着くこと。

無慈悲な嵐の吹き荒れる異空間を身一つで漂い、流されながら、永遠とも思えるほどの時間が経った頃。

行く手に一点の光が灯った。

息も絶え絶えになりながら、最後に残った力で光へと手を伸ばす。

──届いて。

どうか、この先が。あの人の世界へ続いていますように。

第1章　キオクソウシツ ノ オンナノコ

ふかふかの布団。そう、ふわふわで優しい手触りだ。ちゃんと洗濯されているらしく、カバーからは爽やかな洗濯洗剤の香りがする。

深く息を吸うと、胸いっぱいに知らない匂いが広がった。普段使っている洗剤とは違うようだ。ついでに見知らぬ誰かの匂いがして、少しだけ胸に不審が湧いた。

――そう言えば、どうして自分はこの布団の上にいるのだったか。

あまりに居心地がよくて、目を開けるのが億劫だ。しかし目が覚めてしまったからにはずっとごろごろしているわけにもいかない。

（もう少し寝たい……けど……）

ミサネは二枚貝のようにくっついた重い目蓋を、努力の末にようやくこじ開けた。

まばたきを一つ。二つ。そして違和感。

「…………」

おかしい。視界いっぱいに――それこそ鼻と鼻が触れ合いそうなほど先に、まんまるく目を見開いた少年の顔がある。

「…………ん？」

これは、夢かな。

もう一度目を瞬いてみたものの、少年の顔は消えなかった。

猫のように白くてふわふわした頭。長い前髪の隙間から覗く大きな瞳は零れ落ちそうな驚きに満ちていて、唇だって半開きだ。

耳元から突きだしたウサ耳型ヘッドフォンが可愛らしい。白いパーカーに包まれた細い首や肩はとても華奢な作りをしていて、不健康の判子を押される一歩手前といったところ。

見れば見るほど——初めて見る顔だ。

「……誰ですか、貴方？」

思わず零れた質問に対し、少年がもう我慢の限界だとでも言うようにのけぞった。

「こっちのセリフだよ！　コレ、俺の布団なんだけど⁉」

「え？」

「俺の！　布団！」

「ああ、なるほど」

道理で知らない匂いがすると思った。そうか、ここは自分の部屋ではないのだ。

「失礼しました。今降ります」

ミサネはのたと身を起こすと、少年のベッドから脱出した。

少し乱れた髪を撫でつけ、おさげの三つ編みがそこにあるのを確認する。上着にもスカートにもほとんど皺は無し。ブーツを履いたままベッドに転がっていたことは、少しばかり申し訳なく感じる。

これでも一応、十四歳の女子だ。同じ年頃の少年を前にしたら、身だしなみを気にしなくては。

　他人の寝床で寝顔をさらしていたことは棚に上げて、ミサネは改めて少年に向き直った。

　室内にはベッドの他に、机と椅子とパソコンだけ。このベッドが彼のものであるなら、この殺風景な部屋は彼の私室ということになる。

　さて、どうしよう。どこからどう見ても、今の立場は不法侵入の現行犯なわけだが。

「きみ、どこから入ったの？　今日はお客さんも来てないし……ここ、マンションの七階なんだけど」

　少年は少しだけ落ち着きを取り戻したらしい。というよりも、先程の動揺が嘘のように現状を受け入れてしまっているように見える。普通ならば、自分の部屋に見知らぬ人間が入り込んでいたら逃げるか助けを呼ぶかするだろうに。

　おっといけない、観察よりも返答が先だ。まずはこの窮地を切り抜けなければ。

　ミサネは少しだけ目を伏せると、できるだけ細く不安そうな声を作った。

「……わかりません」

「え、自分でもわからないの？」

「はい……」

「どこから来たか覚えてない？」

「はい……」

「えーと……それじゃ、名前は？」

　いい感じに同情を引けている気がする。ただし誤魔化すばかりではダメだ。情報には真実を混ぜる必要あり。

　ミサネはうろうろと視線をさまよわせた後、少年を見て呟いた。

「私の名前は……ミサネ……ミサネです。……それ以外のことは、覚えてません」
さあどうだ。普通はここでツッコミが――。
「ミサネさんかぁ。うん！　いい名前だね。他に何も覚えてないなら、俺の布団で寝てても仕方ないよね！」
信じた――！
あまりの素直さに胸倉を掴んで締め上げたくなってしまう。いや待て待て、説明なしに本気で信じてくれたなら、釈然としないが喜ぶべきだ。
しかし驚いた。ヘタに嘘を吐くより記憶喪失だと言い切ってしまった方がやりやすいと思ったのだが、まさかここまで簡単に受け入れてくれるとは。
「はい。どうして貴方の布団で寝ていたのかは覚えていないのですが、ご迷惑をおかけしてすみません」
「別にいいよ！　ちょっとびっくりしたけど事情はわかったし」
ニコニコと笑う表情からは、こちらの言い訳を何一つ疑っていないことがわかる。わかった、じゃあもうそういうことで。不安や戸惑いを投げ捨てて、ミサネは何とか気分を切り替えた。
「俺はナナセ・ヨシ。みんなにはゴミ、クズ、ウジ虫、モヤシ、ホコリ、プランクトン、カス、その他諸々と呼ばれてるから、どうぞお好きな名称で呼んでよ！　ちなみに将来の夢は世界平和だよ！」
うん、あだ名が一つも本名にかすっていない
少しだけ眉をひそめつつ、ミサネはじっと少年を見つめた。
「ん？　なになに？」
「いえ……もう少し、まともな呼び名はありませんか」
「え？　ダメ？　そうだなあ……じゃあナナシとか」
「ナナシ……さんですね。ナナシ……はい」

呼ばれたのが嬉しいのか、ナナシと名乗った少年はこれまでで一番の笑顔を見せた。
ああ。そんなに嬉しそうに笑われると、ちょっと困ってしまう。
「よし、じゃあ何しようか！　テレビゲーム？」
「いえ。外へ行きましょう」
「うん、外だね！　……えっ、外!?」
それまで上機嫌だったナナシが、唐突に血相を変えて慌て出す。
「何か問題でも？」
「いやあ、俺この街に引っ越して来てから一度も外に出たことなくてさ。引きこもり歴で言うなら四ヶ月なんだよね。もう外に出るのが苦手っていうか、億劫っていうか……ここまで来ると引きこもりの誇りみたいなのがあって」
「私はナナシさんと外へ行きたいです」
「え、えええ？　うーん……ミサネさんは俺と外へ出たいのか……」
「はい。とても。外を歩けば、何か思い出すことがあるかもしれないと思いまして」
もうひと押しかと身構えた時、ナナシはにこっと笑ってベッドを飛び降りた。
「そっか！　じゃあ一緒に行くよ」
いいのか。ミサネは少々気を削がれた思いで小首を傾げる少年を見つめる。
「引きこもりの誇りはいいんですか」
「頼まれごとがあるならどうでもいいよ！　誰かに一緒に出ろって言われたら出るし、焼きそばパンを買ってこいって言われたら買いに行くよ？　それで誰かが喜んでくれるなら、俺も嬉しいからね！」
「……私についてきてくれるのは嬉しいのですが、貴方はそれで構わないのですか？」
「別にいいよ、用事があるわけじゃないしね。他の人の役に立てて喜んでもらえるなら、俺は何でもするよ！」

「だったら」
　考えるよりも早く、ナイフのような言葉が口をついた。
「貴方は他人に死ねと言われたら、死ぬのですか？」
　怒らせてもいい。冗談を言うなと笑ってくれるのでもいい。
　こんな問いかけ、普通の人間は否定する。出会って数分の人間に投げかけられることではない。けれど、このナナシという少年は。
「誰かの命が救われたり、喜んでくれたりするなら、俺の命ぐらいいつでも差し出すつもりだよ！」
　——ああ、ダメだ。これではダメなのだ。
　胸の前で手を握り締めたミサネに気付かず、ナナシは相も変わらず楽しげに笑いながら言葉を続ける。
「でも命はひとつだけだから、さすがに命を使う選択は慎重に行うつもりだけど」
　——どうしてそんなふうに、笑いながら私を突き放すのだ。
　胸の中に悲しみと怒りが吹き荒れる。けれど表に出すわけにはいかない。自分は記憶喪失で、彼と出逢ったばかりの十四歳の女の子で。演技などしなくたって、本当に嫌になるくらい無力だけれど。
　彼を助けるために、ここへ来たのだから。
「……なるほど。なんとなく、ナナシさんのことがわかりました」
　ミサネは冷静さを保って頷くと、ベッドから立ち上がった。
「ひとつお願いがあるのですが。私のことはミサネちゃんとお呼び下さい」
「え？　でも会ったばかりの同年代の女の子を、ちゃん付けで呼ぶのはちょっと……」
「ど　う　ぞ　ミサネちゃんとお呼び下さい」
「わあ、結構積極的だなあ！　わかったよ、ミサネちゃん！」

「それでは行きましょう。案内よろしくお願いします」
　ミサネは手招きをするナナシの後を追いかける。
　そう言えば、誰かと同居しているのではないか。もし家族と遭遇してしまったら、何と言って誤魔化そう――。
「おや。可愛い子を連れてるね、ナナシ」
　言い訳を考える時間など与えられなかった。玄関へ向かう途中のリビングに人影がひとつ。コーヒーカップを手にした長身の青年が、にっこりと穏やかな笑みを浮かべている。
「ミカドお兄さん！」
　ナナシが笑顔で応じる。お兄さんというからには兄弟なのだろうか。
　小柄なミサネは精いっぱい首を反らして青年を見上げた。年齢は二十代前半ぐらいで、手も足もひょろりと長い。長い前髪が顔の右半分を覆っているので表情はわかりにくいものの、にじみ出る柔和な雰囲気は確かにナナシとよく似ていた。
　気になる点と言えば、露出した肌に書き込まれた無数の数字。顔以外を覆う赤いペンの走り書きは、決してファッションなどではないと思うのだが。
　頭の中で必死に弁解を考えるミサネに代わり、隣でナナシが口を開いた。
「この子はミサネちゃんって言って、記憶がないんだって。ミカドお兄さん、記憶を戻す方法って知らない？」
「記憶がないとは大変だね。残念ながらそう言う分野は僕の専門外なんだけど……そうだなぁ。急に思い出すこともあるって言うし、普通に生活をしていればそのうち戻るんじゃないかな？」
　緩い。緩すぎる。
　記憶喪失だという話を全く疑わず、それを前提条件として対応策まで講じてくれている。ナナシと同じく、頭のネジを数本飛ばしてなくしたタイプだ。

脱力しかける足を支えて、ミサネは記憶喪失者として懸命に振る舞った。
「あの、すみません。普通に生活と言っても……私、家も住んでいる場所も思い出せなくて」
「なら思い出すまでここにいればいいよ。僕はあまり家にいることもないし、よかったらこの部屋を使ってもらっても構わないから」
「えっ……あ、ありがとうございます」
あまりにうまくことが運びすぎる。ミサネが慌てて頭を下げると、ミカドはくすくすと小さな笑い声をこぼした。
「それじゃ俺は出かけてくるよ。あんまり遅くなるとお偉いさんに叱られちゃうからね。ミサネ……さんも、家の中でわからないことがあったらナナシに聞いて。それじゃ」
「いってらっしゃい、ミカドお兄さん！」
煙草でも買いに行くかのような手ぶらの姿で、ミカドはリビングを出ていく。存在感の薄さと軽さは、ナナシといい勝負だ。
「……似ていますね」
ミサネが隣を見つめて呟くと、ナナシは驚いたように目を見開いた。
「えっ⁉　義務教育を放棄して引きこもり一日中ゲームとテレビで時間を浪費するゴミクズみたいな俺と、従兄弟とは思えないほど天才のミカドお兄さんを一緒にしたらダメだよ！」
「あ、従兄弟なんですね」
「うん。人として最低な俺を嫌がりもしないで一緒に住んでくれる、とっても優しい従兄弟のお兄さんだよ」
行きすぎた卑下に、ミサネはようやく僅かに眉をひそめた。
「……ナナシさんのその、自分をゴミとか最低だとか何だとか言うの、もっとこう……何とかなりませんか？」
「ダメだったかな？　でもみんながそう言うからにはそうだと思うんだよね。学校だって、お前もうここに来るなって言われたから行くのをやめて引きこもりになったし。あ、別にみんなが悪

いわけじゃないよ！　俺はクラスメイトも学校も大好きだったけど、みんなが俺を気持ち悪いって言うなら行かない方がいいと思ったんだ」

　きっとクラスメイトたちは、異物とも呼べる存在に対して本能的な恐怖を覚えたのだろう。理解できないものを人は恐れる。防衛策がゴミやクズ呼ばわりではあまりに稚拙でみっともないが、ミサネは彼らの気持ちもわかってしまう。

　けれど、自分が取るべき手段は排除でなく。

「ナナシさん。私の目標が決まりました」

「ホント？　何だろう！」

「私の記憶を取り戻すのは保留にして、ナナシさんの友達を作ります」

　彼を、人々の輪の中へ引き入れることだ。

「えっ。え？　何で？　俺は別に友達がいなくても……」

　慌てるナナシに、ミサネは容赦なく追い打ちを掛ける。

「友達、いないんですよね」

「前はいたけど今はいないよ！　フレンドリストはミカドお兄さんだけだし」

「じゃあ、増やしましょう」

　友人たちに遠ざけられながらも憎悪を抱かず、ひたすら他者に尽くそうとする彼を救う手段は、これしか考えられなかった。

　孤独の淵から、こちらへ連れ戻すのだ。多少強引でも構うものか。後悔するよりずっとマシだ。

「うーん。でも友達ってどうやって作るんだろう？」

「私がアドバイスしますから、一緒に頑張りましょう」

　ナナシの目をじっと覗き込む。その気迫をどう感じたのかはわからないが、少年はふっと笑って頷いてくれた。

「わかった。よろしくね、ミサネちゃん」

──後にミサネは思い知る。この友達作りの旅が、如何（いか）に困難で長い道のりとなるかを。

「ここに来たら、まずはみんな３０７タワーを見に行くかな」

ナナシの住む街・ブルーサンストリートは活気に溢（あふ）れた都会だった。ハイセンスな店の立ち並ぶ通りをオシャレな人々が行（ゆ）き交（か）い、そこかしこのディスプレイがありとあらゆる商品の広告を映し出す。

ナナシとはぐれないよう気を付けつつも、ミサネはあちこちへ目を配るのに忙（いそが）しかった。

（都会だなぁ……）

情報の溢れる通りをしばらく行くと、やがて巨大（きょだい）なタワーの下に辿（たど）り着（つ）く。人の流れが吸（す）い込（こ）まれては吐（は）き出（だ）される様子を見る限り、３０７タワーは観光スポットとしても栄（さか）えているらしい。

「こっちだよ、ミサネちゃん」

「っと、すみません」

「人が多いしもしはぐれたら困るから、連絡（れんらく）先交換（こうかん）しておこうか。あ、それよりフレンドリストに登録してもいい？　まずミサネちゃんが友達になってよ」

タワーを見上げてぽかんと口を開けていたミサネは、ハッとしてナナシへ視線を向けた。

「私と友達……ああ、そうですね。確かにその手がありました」

「ダメ？」

「いいですよ。どうすればいいんでしょう」

「ビットフォンはつけてるんだよね。うん、知らないメーカーのだけど大丈夫（だいじょうぶ）そう」

ミサネは自分の耳元へ手を持っていく。そこには確かに、黒い猫耳型の情報端末（たんまつ）装置がついていた。

「これのことですね。どう使うのでしょう」

「難しい操作は必要ないよ。使用者の脳波とリンクしてるから考えただけで色んな情報を引き出せるし、通話や車の運転もできるんだ。昔はあれこれ問題も多かったけど、今は技術が確立して充分に安全になったんだって。全人類が装着を義務付けられてるから、個性を出すために色んな形のビットフォンが売られてるんだよね」

「装着義務のある情報端末装置ということは、一台ごとにＩＤが割り振られていたり？」

「うん、そうだね。生まれた時にＩＤが生成されて、市民籍と一緒に与えられるよ。インターネットで利用する名前は変えられたりするけど、ＩＤだけは一生変わらないままだね」

「しかしＩＤが一人につき一つということは、他人にＩＤを知られてしまった場合、色々と面倒なことになるのでは」

「それについては管理プログラムっていうものがあってね。この３０７タワーのてっぺんに管理室があるらしいんだけど」

　ナナシにつられて、ミサネも改めて巨大タワーを見上げる。ただの観光スポットと見せかけて、この建築物は非常に重要な役割を担っているわけか。

「ここの管理プログラムが全人類のＩＤを厳重に管理してるんだ。完璧な防壁を形成してて、外部からのハッキングはほぼ不可能らしいよ。今じゃ99・9％安全だとも言われてる」

「随分と高い信用性ですね」

「前に人の手で管理してた時より、ずっと防護性が高くなったんだって。自分のＩＤがプログラムに管理されるって発表された時はみんな不安そうだったけど、四ヶ月も経ったらすっかり慣れちゃったみたいだね」

「稼働からまだ四ヶ月しか経ってないんですか」

「そうそう。でも今のところトラブルは何も起きてないよ。人件費も削減できたし動作は安定してるし、いいことずくめだって聞くけど」

「でも、管理プログラム自体を管理する人は必要ですよね。そこは自動化できないと思うのですが」

「それは俺の従兄弟のミカドお兄さんがやってるよ。今の管理プログラムを一人で作ったんだ、すごいよね！」

全人類のＩＤを管理し、ほぼ完全に防御(ぼうぎょ)できるほど高度なプログラムを一人で作ったミカドは確実に天才なのだろう。先程の様子を見るに、ナナシよりも大量に頭のネジが飛んでいる可能性も高い。

（ミカドさん……ミカド……覚えがない……）

間違(まちが)いなく有名人であろう彼の名を、ミサネは聞いたことがない。その事実は警戒(けいかい)を呼び起こすに充分だったが、胸の片隅(かたすみ)に留(とど)めておくだけにする。

「すみません、話が逸(そ)れてしまいました。フレンド登録、でしたか」

「あ、そうそう。『フレンドリスト』って思(おも)い浮(う)かべてみてくれる？　それで指をこう動かすと……ほら、ウィンドウが出てきたでしょ。このままデータ送信をするとフレンド登録ができるんだ」

「なるほど……っと、エラーが出てしまいました」

「あれれ？『存在しないＩＤです』……？　おかしいなぁ、こんなことあまりないんだけど」

ミサネはさりげない仕草でウィンドウを消去すると、気分を切り替えるように顔を上げた。

「エラーなら仕方ありません。私との登録は後にしましょう」

「あ、それなら〝ポツリ〟にしよう！　こっちならＩＤもいらないしユーザー名とパスワードを登録するだけで大丈夫なはずだから」

ナナシが作ったという双方向(そうほうこう)コミュニケーションアプリ〝ポツリ〟の画面を見つつ、情報を登録する。どうやらこれは双方で登録した相手にのみ発言が閲覧(えつらん)できる仕様らしい。

「便利ですね。これだけのものを作れる技術は、充分に特技と言っていいと思いますが」

「そう？　結構簡単に作れるよ。作り方を見て数字に置(お)き換(か)えて、順番に組(く)み込(こ)んでいくだけで……あ、でもみんなは世界が数値では見えないのか。ゲームのステータス画面みたいな感じになるんだけど」

　改めて、このナナシという少年は規格外の能力を持っている。ミサネは密(ひそ)かに嘆息(たんそく)した。

〝ポツリ〟の登録を終えると、準備は万端(ばんたん)だ。ようやく二人はタワーの入り口をくぐり、内部へと足を踏(ふ)み入(い)れた。

「そういえばさ。友達作りってどういう状態になれば友達って言えるのかな？」

「そうですね……定義は難しいところですが、現状ならまずフレンドコードの交換を目標にするのはどうでしょう」

「うん、わかった。頑張ってみるね！」

　ナナシはにこっと笑うと、インフォメーションセンターへとまっすぐに突(つ)き進(すす)んでいく。

　受付で何か聞くことでもあるのだろうか。ひたひたと後をついていったミサネの耳に、朗(ほが)らかな第一声が飛(と)び込(こ)んでくる。

「こんにちは！　あのー。俺と友達になってもらえませんか？」

　まさか。

　目を見開いたミサネの前で、ナナシが話しかけている相手は――予想通り、インフォメーションのお姉さんだった。ボブカットに大きな黒いリボン。右目を覆う大きな眼帯はファッションだろうか。とても綺麗(きれい)な顔をしているが、人形のように表情が動かない。

「残念ですが現在、そのご要望にはお応(こた)えできません」

「そっか、仕事中ですもんね。じゃあ名前を教えてほしいです！」

　何という鋼(はがね)の心臓。ミサネがハラハラと見守る中、インフォメーションのお姉さんは全く変わらぬ表情で答えた。

「私、こちらの３０７タワーで案内人を務めております、セキユでございます。他に何か聞きたいことはございますか？」

「えーと、友達の作り方を教えてほしいんですが」

「大変申し訳ございません。私の勤務内容は３０７タワーの案内でございますので、人生指南は対応外でございます。しかしあえて申し上げるなら、そう言われているうちは欲するものを手にいれることは大変難しいかと存じます。私的に申し上げるなら、おととい来やがれでございます」

　勤務中に声をかけたナナシもナナシだが、対応する相手もなかなかどっこい口が悪い。周囲の客がじろじろと視線を注ぎ始めたので、ミサネはとうとう禁を破ってナナシの腕を掴んだ。

「行きますよ、ナナシさん」

「え？　でもまだ話の途中で」

「お仕事の邪魔になっていますから。別の友達候補を探してみましょう」

「うん、わかったよ！　セキユさん、またね！」

「二度目があるかはあなた次第ですが、これで失礼いたします」

　ナナシを引っ張ってインフォメーションセンターを離れ、通路の隅へ寄る。この時点でミサネはすでに、前途多難の予感をひしひしと味わっていた。

「ナナシさん。お仕事中の方はできれば避けた方が」

「そうだね、忙しいとフレンド登録もできないもんね。あのお姉さんがお休みの時にまた声をかけてみようかな」

「……はい。それがいいかと」

「仕事中じゃない人ってなると……あ、あの人とかどうかな！」

　指さす先はエレベーター。ではなく、その脇に倒れたボロ雑巾の固まりだ。それが人間だとミサネはようやく気付く。

誰もが視界に入れつつも関わり合いを避けて迂回しながら通り過ぎるため、その空間だけはぽっかりと人口密度が低い。
「……あれは？」
「寝てるんじゃない？　ちょっと起きてるかどうか見てくるよ！」
　本当に四ヶ月引きこもっていたのかと思うほどの行動力で、ナナシはボロ雑巾に近付いていく。
「お兄さん、こんなところで寝ていたら風邪引きますよ！」
「……」
「具合が悪いのかな？　大丈夫？」
　廊下に這いつくばっている人物を揺さぶるナナシの手。行き交う人々はもう絶対に視線を合わせてはならないという暗黙の了解の下、完全に無視を決め込んで足早にその場を逃げ惑う。あまりに緊迫した空気に、ミサネも思わず帰りたくなった。
　いや、帰ってはダメだ。そもそも帰る場所などない。ここでナナシの行く末を見届けなければ
――
「あれ？　お兄さんてもしかして、『羅刹門』とか『禮姫』とかを書いた……一冊出せばミリオンセラーと称される……ええと、芥森鷗内、先生？」
　転がるゴミ袋のようだった青年がぴくりと動いた。顎を持ち上げ、微かに震える眼差しでナナシを見る。
「……そっちはペンネーム。本名は、アクタ。カモメ……アクタ。呼ぶなら、本名で呼んでくれ」
　どうやら小説家らしい。ミサネもその名はうっすらと聞いたことがあったが、まさか作者がこんなにも若くて病的な青年だとは思わなかった。エレベーターホールの隅でボロ雑巾のように転がっている姿は、高名な小説家のイメージからあまりにかけ離れている。
「どうしてこんなところに転がってるんですか？」

「放っておいてくれ。金も同情もいらない……ただ、愛が欲しい……あ、なんだかイメージが湧いてきた。しばらく集中するから話しかけないでくれ……失礼」

アクタはナナシに背を向ける形で転がると、そのまま動きを止めてしまった。どうやら脳内では言語野がフル活動を行っているらしい。

しばらくその場で動向を見守っていたナナシが、しょんぼりとこちらへ戻ってくる。

「友達になってもらえなかったよ～」

「そうですね。やはり、仕事中の人に声をかけるのは難しそうです」

ボロ雑巾ごっこをしているかと思ったアクタも、どうやらあれはあれで仕事をしている最中のようだ。

「じゃあ観光に来てる人の方がいいのかな？」

「もっと暇な人の方が話を聞いてもらえそうな気がしますが……やはり同世代の学生などが狙い目ではないでしょうか」

「そうしたらこの辺りじゃなくて、夕日坂はどうかな。そっちは駄菓子屋さんとか神社とかあって、下町みたいな雰囲気らしいよ」

「なるほど。ではそちらへ行ってみましょう」

ブルーサンストリートは人口こそ多いものの、学生が遊ぶ街ではないとミサネもすでに感じていた。お金のない学生たちは、もっと気楽に集まってダベる場所に溜まるだろう。

夕日坂までは電車で一駅程度の距離らしい。社会人の行き交う人混みを抜けて、ナナシとミサネは駅へと向かった。

夕日坂はその名の通り、東西に長く緩い坂道が続く街だった。

ブルーサンストリートと全く違う、ほのぼのとした穏やかな空気。主婦や老婦人が買い物袋片手に個人商店を覗き込み、その後ろで子どもたちが歓声を上げながら道を走り回っている。

「向こうと随分雰囲気が違うんですね」

小学生の群れ集(つど)う駄菓子屋を眺(なが)めながら、ミサネは呟いた。ここは大人よりも子どもの姿がずっと多い。しかも子どもというものは大抵(たいてい)が有り余る暇を持て余しているものだ。中にはナナシの友達となってくれる学生が、一人や二人いるかもしれない。

「この辺りの子は、みんなここらで遊んでるらしいよ。駄菓子屋さんで当たりが出るまでクジを引いたり、縁日(えんにち)で金魚のオスメスを当てたり」

「暇ですね」

「学生の放課後なんてみんなそういうものなんじゃない？」

　坂道の一番上。神社の前は場所柄(がら)のせいか静まり返り、人気(ひとけ)が全くない。おかげでそこに佇(たたず)む少年の姿がひどく目立った。

　運動でもしているのか、服の上からでも引き締(ひし)まった身体(からだ)つきがよくわかる。無言でうつむく表情はアンニュイで気難(きむずか)しそうで、その上なぜか青い髪(かみ)の毛先から足下(あしもと)の靴(くつ)までびしょ濡(ぬ)れだ。しかし『暇そう』で『同年代の少年』という条件を満たす対象は貴重である。

「ナナシさん、あそこに同じ年頃の人がいますよ。男の子だし、話しやすいのでは」

「本当だ！　行ってみるよ。何かあったらミサネちゃんも助けてね！」

「ピンチになった時だけですよ。まずはナナシさんが精一杯頑張って下さい」

「さっきの俺の惨劇(さんげき)を見て、まだ頑張れと！　オーケイ、わかった！　当たって砕(くだ)けてくるね！」

　満面の笑みを浮かべてナナシは少年へ走り寄る。案の定、近付いて来たナナシを見ただけで少年の眉がぴくりと不満げに持ち上がった。

「こんにちは！　初めまして、俺はナナシです！」

「……ああ？」

「君の名前は？」

「……ナツカゲ。で、何か用？」

少し離れた場所から、ミサネはハラハラと二人の危なっかしいやりとりを見守る。いいぞ、いい感じだ。まだ逃げられないなら脈有りだ。

「良かったらお茶しなーい⁉」

「はぁ？　何言ってんだお前」

「じゃあ友達！　友達になるのってどう？」

「ヤだよ。なんで見ず知らずのヤツと友達になるんだ。他当たれ、じゃあな」

残念。ナツカゲと名乗った少年は全力の不快感を隠そうともせず、その場を立ち去ってしまった。

まぁ、当然の対応だろう。幾ら同年代とはいえ、突然お茶に誘われたら普通は誰だって警戒する。

「ダメだった！」

「努力は認めますが、仕方ありませんね。別の人を探しましょう」

「待って、ミサネちゃん。俺、あの人と友達になるよ！」

歩き出そうとしていたミサネは、思わず足を止めて笑顔の少年を振り返る。

「……しかし、難しそうな人でしたよ」

「一度決めたことは曲げないって両親にも言われてるから頑張ってみる！　でもどうやって友達になろうかなぁ」

あれだけきっぱりとフラれたにもかかわらず、ナナシにめげた様子はない。真剣に悩んでいる表情を見ていたミサネも、つい助け船を出す。

「……共通の話題を作ってみたらどうですか。話のネタというやつです」

「共通の話題……うーん……そういえばあの人、右手にアイス棒を持ってたよね。好きなアイスについて語れば食いついてくるかな？」

「アイスならさっきの駄菓子屋で売ってましたね。何か情報を得られるかもしれません。試しに行ってみましょうか」

来た道を少し戻り、相変わらず小学生が群れている駄菓子屋へ突撃(とつげき)する。狭(せま)い店内には懐(なつ)かしの駄菓子や玩具(がんぐ)が所狭しと並んでいたが、思ったよりも混んではいなかった。どうやら小学生どもはすでに買い物を終え、外でダべっていただけらしい。

「こんにちは、おばあちゃん！」

ナナシが明るく声をかけると、店頭で置物のようになっていた老婆(ろうば)がぴくりと動いた。しわくちゃの顔が動いてますます皺(しわ)が深くなる。どうやら笑ったらしい。

「はい、こんにちは。おばあちゃんはね、ヤスネって言うんだよぉ」

「じゃあヤスネさん、このガムとチョコ下さい！　それと俺と同じくらいの年で、アイスを食べる青い髪の少年、知ってませんか？」

「あー、ナツカゲ君かぃな。知ってるよぉ。あの子、アイスが好きでよく買っていくからねぇ。はい、二つで四十円」

「ありがとう！　ナツカゲ君のこと、他に何か知りませんか？」

小銭(こぜに)を受け取ったヤスネは、膝(ひざ)の上に乗せた三毛猫を撫でながら首を傾げる。

「えぇと、スーシー？　スポーツの……ナントカをやってるってね。カッコイイのよぉ、速すぎておばあちゃん見えないんだけどねぇ」

「スーシー？」

聞いたことのないスポーツだ。蛍光(けいこう)ピンクのゼリー飲料を眺めるミサネの横で、ナナシは粉ジュースを物色しながら説明を付け加える。

「スカイ・シー・ランのことじゃないかな。サーフィンと似たスポーツで、専用のボードに乗って水上を走るんだ。名前の由来は空を飛んでるように見えるから、とか」

「なるほど。他にナツカゲさんが好きなものなどはあるでしょうか」

蛍光緑のメロン餅(もち)と猫形マシュマロをヤスネに差し出しながら、ミサネの視線は三毛猫に釘付(くぎづ)けだ。可愛い。ふかふかしたい。口に入れたい。そんな思いを必死にかき消す。

「スーシーは本当に好きみたいだねぇ、いつも練習してるもの。あと、アイス棒はチョコバナナ味をよく買ってるかねぇ。はい、二つで五十円。また来てねぇ」
　会計を終えたミサネとナナシは、ヤスネに礼を言って店を出る。
「なかなか有意義な時間でしたね」
「ね！　猫可愛かったね！」
「はい。猫可愛かったです。ではなくて、ナツカゲさんに対する情報が得られました。この辺りでスカイ・シー・ランが練習できる施設はありますか？」
「さっき行った307タワーに、専用の競技場や教室があるよ。この辺りだとあそこだけじゃないかな」
「ではそこへ……行くのは明日ですかね。だいぶ暗くなってきました」
　夕日坂はその名の通り、次第に西日に飲み込まれつつある。日没まではまだ時間がありそうだが、今から307タワーへ行くとなると少々遅くなってしまうだろう。
「じゃあ帰ろっか。今日はいっぱい人と話したから疲れちゃったよ！」
「そうですね。帰ってゆっくり休んで、明日に備えましょう」
「明日も友達作り、付き合ってくれるんだ？」
「もちろんです。ナナシさんに友達が増えるまで続けます」
　夕暮れの中を二人で並んで歩く。今朝方ベッドで遭遇した時点と比べて、距離が少し縮まったような気がする。
　楽しいかと言われると悩むところだが、悪くはない。猫について力説しながら隣を行く少年を盗み見て、ミサネはそっと息を吐いた。
　こうしていると何だか、友達と一緒に歩いているような気分だ。

「……どうして目覚ましをかけていなかったんですか」

「引きこもりが決まった時間に起きる必要性を一切感じないよね！」
「確かに全く目覚めなかった私にも問題はありますが、それにしても起きたら昼過ぎだなんて」
　昼下がりのブルーサンストリートを、ナナシとミサネは足早に進む。起床後一時間経過。速攻で胃へ詰め込んだ牛乳がけシリアルのブランチは、食事と言うには少々貧相すぎたが仕方ない。
　ナナシは四ヶ月ぶりの外出のせいで。ミサネは初めて訪れる場所を歩き回ったせいで、昨日は二人揃って随分と疲労を溜め込んでしまったらしい。
　あてがわれた空き部屋で布団へ入った途端に意識が吹っ飛び、夢も見ずに爆睡して、目覚めた時には日は高く。恐る恐る眺めた時計は十二時を指していた。ミサネが借り物の布団から跳ね起きた直後、ナナシもようやく自室から出て来たわけで。
　早い話が、ただの寝坊である。
「ナツカゲさんがまだ競技場にいるといいんですが」
「午前中だけで練習は終わらないと思うよ。でも今だと、昼休憩が終わったばっかりかもね」
　昨日出会ったナツカゲという少年と友達になる計画は、寝る前にじっくり練っていた。まずは再会を目指す必要がある。半分ぐらいストーカー行為に近い気もするが、やましい気分はないから問題あるまい。多分。
　３０７タワーへ辿り着いた二人は、インフォメーションセンターを素通りしてエレベーターへ飛び込み、そのまま目的地の五階を目指す。
　音もなく開いたエレベーターから一歩を踏み出すと、途端に消毒薬の臭いが鼻を突いた。学生の頃に誰もが嗅いだことのある、懐かしいプールの香りだ。
　プールの入り口前にはナツカゲと同じ年頃の少年が一人。脱ぎ着のしやすそうなオレンジ色のパーカーを羽織っているところからして、このフロアの利用者だろうか。

「こんにちは～！」
昨日と全く同じ調子でナナシが突撃していく。見ず知らずの人間から挨拶されるだけでも多少緊張すると思うのだが、少年はフレンドリーな性格らしい。突然声をかけてきたナナシを前にして、好奇心に顔が輝いた。
「おっ。新入りか？」
「あ、違います。俺、ナナシって言います！　キミは？」
「オレっち？　ユキナガ！　宇宙人！」
「わぁ～～！　宇宙人、初めて会ったよ！　本当に地球人の姿をしていて地球の言葉を喋るんですね！　ちなみにどこの星出身なんですか!?」
「オット星～！」
　これはダメだ。状況を見守っていたミサネは二人の間に割り込んで口を挟んだ。
「すみません。ナツカゲさんはここにいますか？」
「ああ！　シャッチーならさっき来て練習中だぜ」
「シャッチー」
「スーシー界の暴れん坊、水上のシャチことシャッチーだ！　シャッチーに何か用事？」
「はい。よろしければ、ちょっと話をさせてもらえないかと」
「あー、どーだろなぁ。シャッチー、練習の邪魔するとすっげー怒るから、話したいならまた後で来た方がいいかもな。最近特にイライラしてるみたいだし」
　確かに昨日会ったナツカゲの雰囲気は鋭かった。シャチと呼ばれるほどなら、スカイ・シー・ランとやらのプレイ中は更に獰猛なプレイが目立つのかもしれない。
「最近と言うからには、前はもう少し落ち着いていたんですか？」
「ん～。前もプレイは荒々しかったけど、最近ちょっとおかしいんだよな。スランプってヤツかも？　休めって言っても全然休もうとしないし」

「そういうことでしたら仕方ありませんね。……休憩に入るまで時間を潰してきましょうか。今は会ってもらえないでしょうし」

「そうだね。ユキナガさん、また後で来ます！」

「おうよ～。じゃあな！」

　ユキナガに見送られ、ナナシとミサネはエレベーターホールへ戻る。やってきたエレベーターへ乗り込むと、一階まではあっという間だった。

「様子がおかしいだなんて、一体何があったんでしょう」

「んー、話を聞いてみないとわからないけどね。もしスランプでもきちんと話をすれば友達になってくれる気がする！」

　時間を潰すとは言っても、あまり遠くまでは行けない。お金をかけずに座れる場所でも探すべきだろうか。

　行く当てを考えつつ３０７タワーを出たミサネの視線は、人混みの中の一点へ吸い寄せられた。そこにあるのは透き通るような白い肌に光を弾くプラチナブロンド。夢を見るように伏せられた睫毛の隙間からは、色素の薄い水色の瞳が覗いている。

　一言で言えば、非常に人目を引きつける外国人の美少女だった。すごい。レースとフリルのたっぷりついた甘めワンピースも、彼女にかかれば普段着と同じ感覚で着こなせてしまうようだ。

「ナナシさん。あそこにいる女の子も、私たちと同じくらいの年ですね」

「あ、そうだね。友達になってくれるか聞いてみようか……でも女の子だね⁉」

「女の子でも大丈夫ですよ」

「ミサネちゃんがそう言うなら大丈夫だね！」

　一体どんな根拠があってそこまで他人を信じられるのか。自信に満ち溢れた足取りで、ナナシは神々しい雰囲気を放つ少女に近付いていく。

「えーっと、ハロー、ハウアーユー？」

美少女は驚いたように目を見開いてから、どんな人間をも魅了する微笑を浮かべた。
「ハロハロウ！　ややっ！　私、日本語大丈夫ですのん！　なので、普通にお喋り下さいましまし！」
口を開いたらすごいテンションだった。声は鈴を転がすように可愛らしいのだが、飛び出してくる日本語がなんだか派手だ。とは言え一応、善良な人格であることはよくわかる。
「日本語上手ですね！　今の時代、自動翻訳機能が高性能だからみんな第二言語の習得までしないのに」
「お褒めいただき光栄！　私は機械音声ではなく、自分の声で皆々様とお喋りしたいですので頑張っておりまするん！」
「すごいなー！　あ、俺、ナナシって言います。こっちはミサネちゃん！」
「ミヅキ・ミクレアーノ・ミウミですます！　よろしくですの！」
「よろしく！　ミウミさん、友達にならない？」
その勢いで友達申請を行って、通るはずが——。
「いいとも〜！」
「いいの!?」「いいんですか!?」
ナナシとミサネの声がハモった。ミウミの目が驚きにまん丸く見開かれ、ふと何かを思い出したように両手で口元を押さえた。
「ああっ、すみません！　いいと言ってしまいましたが、会ってすぐの人とフレンドになるのはいけないって……しゃーくんに言われていたのでした」
「しゃーくんとは誰ですか？」
目を合わせたミウミがにっこりと優しく笑う。その綺麗さに、ミサネは思わず見とれてしまった。どうやらこの少女は外見だけでなく、中身も天使のように美しいらしい。
「しゃーくんは私のフレンドです。今はスカイ・シー・ランの習い事の最中なのですが」

スカイ・シー・ランのしゃーくん。シャチくん。なるほど、閃いた。
「……もしかして、ナツカゲさんのことですか?」
「ですの！　最近はあんまりちょっとお話できてませぬが！　前は練習もよく見せてくれたのですが、この頃は来ちゃダメって言われちゃいます」
「この頃というと、具体的にいつ頃から」
「二週間くらいでしょうか。聞いたところによると、人にぶつかったりしそうなプレイもあってですね、他の人に目を付けられているとか……。私、怪我をしてないか心配なのです。しゃーくん、本当は優しい人なので」
　スカイ・シー・ランは非常に速度の出るスポーツで、他のプレイヤーとの接触は重大な反則となるらしい。もしぶつかった場合は怪我を免れない事故となるので規則が厳しいのだという。それをわかっていながら、ルール違反ギリギリの行為を犯しているとは――。
　どうも情報を集めるほど、ナツカゲという少年は手強そうな気がしてくる。ミウミのように穏やかな人物ならともかく、本当にナナシが友達になれるのだろうか。
「ミウミさんが優しい人だって言うなら、ナツカゲ君の様子がおかしいのも何か事情があるのかもしれないね！　俺たちこれからナツカゲ君に会うから何かわかったら教えるよ」
「本当ですの？　助かります。どうぞよろしくお願いしますん！」
　話し込んでいる間に、時間が大分過ぎていた。一旦競技場へ戻ってもいい頃合いだ。
「ナツカゲさんのところへ行ってみましょう、ナナシさん」
「そうだね。今度は会ってもらえるといいなぁ！」
「昨日の友達作成大作戦会議の内容、忘れないで下さいね。話題選びを間違えないこと。話題を振るタイミングを気に掛ける。あとは……」
「笑顔だよね。そこは大丈夫！　よーし、頑張るぞー！」

ミサネはどうにも不安を拭いきれないのだが、ナナシは全くお構いなしだ。来た道を戻り、エレベーターを使って五階へ着くと、どこか遠くからチャイムの音が聞こえてきた。
「もう休憩時間みたいですね」
奥がざわざわと騒がしい。人の出入りも増えたのでこっそり入り込めるかと様子を窺っていると、目標が向こうから近付いてきた。
「……ゲッ。お前ら、なんでこんなところに」
上半身が露出したユニフォーム姿のナツカゲは、ナナシとミサネを見た途端あからさまに嫌そうな顔をした。シャッチーの名に相応しく、即座に華麗なUターンが決まる。
しかしナナシも負けていない。さっと進路へ飛び出して、浮かべるは満面の笑み。
「ナツカゲ君、今休憩時間だよね⁉　ちょっとお喋りしない⁉」
「ユキナガが言ってたのはお前らのことだったのか……お前らと話すことなんて何もないっての」
「あーっ待って、ちょっとだけ！　ねえ、ちょっとだけでいいから話して！」
「おいどこ引っ張ってる！　飛び跳ねるな、みんな見てるだろ恥ずかしい！　わかった、わかったから離せ。休憩時間の間だけだからな！」
見ているミサネもちょっとだけ恥ずかしい。食い下がるナナシのしつこさに、ナツカゲが根負けするのも当然だと思う。
「やったー！　ミサネちゃん、チャンスだよ！　友達になるチャンス！」
「はい、根性の勝利ですね。頑張りましょう。私は口出しをせず見守っていますので」
ナナシに友達ができるかどうかの瀬戸際だ。一対一での会話はハードルが高いため本当なら手助けをすべきだが、こればかりはナナシが自力で頑張らなければ意味がない。
ミサネは心を鬼にして、ナナシの背中に貼り付く。これでナツカゲもこちらの存在を忘れてくれるだろう。もし何かあれば、助け船を出すにもちょうどいい距離だ。

幸いにして、話は順調に弾み始めたらしい。
「ナツカゲ君て改めて見ても、筋肉の引き締まり方とか全然違うよね！　特に足とか、すごくいい筋肉だと思う！」
「……なんでズボン穿いてるのにわかるんだよ」
「何着てたってわかるよ！　俺にはすっぽんぽん同然だからね、無意味だよ！」
　ああ、大層ギリギリの会話だ。案の定、ナツカゲの顔が引きつっている。逃げ出さないだけマシだと思うべきだろう。
「てか、結局お前の目的は何なんだよ？　こんな話してて楽しいか？」
「楽しいよ！　俺、ナツカゲ君と友達になりたいだけなんだ。今日は昨日よりも話聞いてくれてるし、これって脈ありじゃない？　押せば友達になってくれるんじゃない？」
「あー……まあ、趣味とか好みが合うんだったら、友達申請ぐらいはいいけど」
　根負けなのかお人好しなのか。押しに押された挙句、とうとうナツカゲは頷いた。あの話術で頷けるなんて、正直すごい。ミウミの『優しい人なんです』という証言は正しかったのかと、ミサネは心の中で感心した。
「趣味はスカイ・シー・ランだよね。好みって言うと何だろう、好きな食べ物とか？」
「食べ物なら、そうだな……肉とか柑橘系とか、あとはアイスかな」
（ナナシさん！　今です、今！）
　ミサネの電波が通じたのだろうか。ナナシは小首を傾げた後、思い出したようにぱあっと笑った。
「あっ、アイスなら夕日坂の駄菓子屋に売ってたよね！　すごく種類があったけど、俺はチョコバナナ味とか気になったなぁ！」
「お前、食べたことないのか？」
「ないよ！　俺、この街に来てからずっと家にいたからさ。ああいうお店があってあんなに色んな駄菓子を売ってるなんて知らなかったんだ」

「そっか。……ま、一度ぐらい食っておいても損はねーと思うぞ。チョコバナナはあの中じゃ一番美味い。しかもあのアイス、当たりが出たらもう一本もらえるしな」
「当たったらもう一本⁉　そんなにサービスしてお店の経営は大丈夫なのかな⁉」
　多少ぎこちないながらも、会話は盛り上がっているようだ。趣味や名前のことについて何とか取りこぼさずにキャッチボールを続け、このまま行けばフレンド登録もなるかとミサネが期待を抱いた時。
　ナナシはふと、その話題を切り出した。
「ナツカゲ君がシャチって呼ばれてるのって、プレーの荒々しさからだっけ。最近は特にすごいって聞いたけど」
「……あれはあっちが！」
　唐突な怒声にナナシとミサネだけでなく、周囲の視線がナツカゲへと降り注ぐ。
ナツカゲも我に返ったのか、気まずそうに目を逸らす。どんな心変わりがあったのかはわからない。しかし彼はもう背を向けてしまった。
「休憩時間は終わりだ。じゃあな」
　少し硬くなった空気の中、チームメイトたちもぞろぞろとプールへ戻っていく。やがて遠くで練習開始を告げるブザーが鳴ると、辺りに残る人影はナナシとミサネだけになった。
「……何かまずいことしちゃったかな」
　笑顔ではあるが、ほんの少しナナシの眉尻が下がった。ネガティブな感情の表現と、相手の気持ちを測ろうとする態度。物言いはズレていても、ナナシは真面目にナツカゲと友達になる努力を続けてくれている。
　ミサネは微かな安堵を感じながら、それを表に出さないよう自分の口元へ手を当てる。
「まあ、いわゆる地雷というやつを踏んでしまったのでは。しかし『あっちが』と言った意味がわかりませんでしたね」

「競技場へ戻っちゃったからもう話は聞けなさそうだね」
「そうですね……ナナシさんもお疲れのようですから、今日は切り上げますか」
「あ、バレてた？　もう体力レッドゾーン！　こんなに歩き回ったり、人と話すの久しぶりだからね」
「貧弱ですね。もう少し鍛えましょう」
「ええー、今でも相当ハードなのに!?」
競技場からは笛の音と少年たちの喚声が響いてくる。
ナナシの話にあれだけ付き合ってくれるナツカゲは、心の素直な優しい少年なのだ。その彼が――恐らくは、何か悩みごとを抱えている。
ならば簡単だ。悩みを解決してやれば、きっとナナシの友人になってくれる。打算的な考えであることはわかっていたが、なりふり構ってなどいられるものか。
ミサネは、急がなければならないのだ。

両手にくるんだカップから、甘い香りがふわふわと漂う。
ホットココアに一口羊羹。ポテトチップスにマシュマロ。余り物の寄せ集めというコンセプトで揃えられた本日のおやつは、歩き回って疲れた身体によく染みる。
ナナシの部屋のベッドに揃って腰掛けた二人は、束の間の休息を味わっていた。
「ミカドお兄さん、疲れてるみたいだったね。しばらく忙しいんだろうな」
帰宅したナナシとミサネが見たものは、数字と記号の流れ続けるディスプレイを眺めるミカドの姿だった。いつになく真面目な仕事態度の理由を聞くと、どうやら彼が開発した全人類のＩＤ管理を行う――その名も管理プログラムの一部がハッキングを受けたらしい。
「管理プログラムがハッキングされたとなると大問題でしょうね」

「個人のビットフォンに対するハッキングだっていうからまだ規模は大きくないし、情報規制のおかげでニュースにもなってないみたい。なるべく早く問題を解決したいだろうけど、防壁精度を上げるには時間がかかるから犯人を捕まえる方が早いかもね」
　ミカドが言うには、ハッキングを受けた人物は一時的に意識を乗っ取られた状態になるらしい。しかも乗っ取られている間の記憶はなく、個人に対する干渉だったため発見が遅れて被害が広まってしまったようだ。
「被害者はこの街の住民に限られているため、ハッキング犯も近場にいるのではないかという話でしたね……」
「うん。……ミサネちゃん、大丈夫？　疲れちゃったかな。ちょっと顔色悪いね」
　ナナシに顔を覗き込まれて、ミサネは平静を装いながらココアのカップを傾ける。インスタントの甘ったるいココアは、大分温くなっていた。
「ナナシさんは、ミカドさんといつからのお知り合いなんですか？」
「え？　従兄弟だし、小さい時だと思うよ。気が付いたらそこにいた感じかな。休学中の俺を呼び寄せてくれたり、面倒見がよくて優しいんだ。でも何で急に？」
「いえ。ちょっと気になって」
　──まさか、自分の知るあの人ではあるまい。
　胸に刺さった微かなトゲを、ココアの甘みで押し潰す。今は少なくとも、ナナシの友達作りが最優先だ。
「あんまり無理しちゃだめだよ、ミサネちゃん。俺に付き合いすぎないで、自分のことを優先してね」
「⁉」
「ナナシさんは優しいですね。……そういうところ、好きですよ」
　ナナシがカップを取り落としかけて、ギリギリのところでキャッチする。一体何をそんなに動揺したのだろう。不思議に思いつつも、ミサネは続けた。

「でも、優しすぎるのはいけません。気を付けて下さいね」
「う、うん……あはは。わかった、ええと……そうだ、今夜はミサネちゃんの好きなもの食べよう！　何がいい⁉」
「お勧め(すす)はありますか？」
「マヨ増し増しカップ焼きそばなら家にたくさんあるよ！」
「野菜も摂(と)りましょう。時間も遅くなってしまいましたし、メニューを決めて買い出しに行きませんか」
「わかった！　でも俺、何も作れないけどいいかな？」
「料理は経験の積み重ねです。手伝って下さい」
　ココアを飲み干して、ミサネはベッドを降りる。出来合いのものを買ってきてもいいけれど、世話になっているのだ。料理と片付けぐらいはしなければ。
　それにしても、ナナシは何をあんなに驚いたのだろう。

「ナツカゲ君、どこ行っちゃったんだろうね」
　翌日。早起きミッションに成功したミサネとナナシは、無事に目的地へ辿りついた。
　夕日坂をてくてくと歩きながら、目的の人影を探す。午前の太陽が照らす通りは、駆け回る(かまわ)小学生の姿がやたらと多い。
「怪我をしているというなら、早く見つけたいところです」
「うん。まさか怪我した猫みたいにうずくまってるわけはないと思うんだけどさ！　昨日も少し様子が変だったし、心配だよね」
『ナツカゲが怪我をしたまま行方(ゆくえ)不明になった』と泣きながら抱きついてきたミウミと遭遇したのは先程のこと。ナツカゲは足を怪我していたが、理由を話さず逃げ出してしまったのだとい

う。
　青白い顔でおろおろとナツカゲを探し回るミウミに少し休むよう言いつけて、ミサネとナナシは夕日坂までやってきた。逃亡(とうぼう)先として選ぶなら、きっと馴染(なじ)みのこちらだろう。
「……どうも、スカイ・シー・ランのプレイの話を避けているようですね」
「そうだね。ミウミさんが危険なプレーを止(や)めてほしいって言ったら逃げ出しちゃったみたいだし、何か言いたくないことがあるのかな。おーい、ナツカゲくーん」
「猫じゃないんですから、呼んでも出てきませんよ。寧(むし)ろ逃げられます」
「そうかなぁ。出てきてくれるかもよ？」
　辺りに目を配りつつ坂の上まで来たナナシが、一点を見つめてぱあっと顔を輝かせる。
「ほら、いた！」
「えっ、どこに」
　驚きつつ、ミサネも気付いてげっそりした。
　神社の前で二つの人影が向かい合い、互(たが)いを威嚇(いかく)している。ああ、あれが猫なら可愛いだけで済むのに。
「……何だかガラの悪い人と一緒ですね」
「友達かな？　声をかけに行ってみよう！」
「いえ、あれはきっと……」
　不良だ。とはさすがのミサネも言えなかった。しかもどう見ても小競(こぜ)り合(あ)いの最中なのだが、ナナシは全く恐れず暴発寸前の火事場へ突(つ)っ込(こ)んでいく。
「だからそっちがぶつかってきたんだろ」
「お前がのろのろと歩いてたからだろうが」
「あん？　喧嘩(けんか)売ってんのかテメェ」

「失礼しまーす！　えーっと赤いお兄さん、ちょっと機嫌が悪くてさ。頭に血が上ってて正確な判断ができないんだ！」
　突然割って入った第三者に、睨み合っていた少年二人の視線が突き刺さる。
　片方はミサネたちが探していたナツカゲ。そしてもう片方は、派手な赤い髪に黒いマスクをした如何にも不良っぽい外見の少年だ。
「何言ってんだテメェ」
「えーっと、だから、俺が代わりに謝るから！　今回は見逃してくれないかな⁉」
　少年は凶暴な三白眼でナナシを睨み付けたが、すぐさま飛びかかってくるようなことはなかった。舌打ち一つの後、ひらひらと手が振られる。
「……何かシラけちまったし、どーでもいいわ。あばよ」
　いかつい肩が遠ざかると、緊迫していた空気も緩んだ。ミサネは大きく息を吐く。もしナナシが殴られでもしたらどうしようかと思ったが、杞憂に終わってよかった。
「何だよ……またお前かよ。何で俺に付きまとうんだ、さっさと消えろ‼」
「ダメだよ！　ミウミさんとも約束したんだ。ナツカゲ君を助けるって！」
　赤い少年よりも遥かに強い怒気を撒き散らしていたナツカゲが、ナナシの反論で虚を突かれたように黙り込む。
　剝き出しの足首には赤黒い打撲痕があり、見るからに痛そうだった。これではミウミに心配されても当然だ。
「ミウミが……あいつ、また外に出てたのか」
「ナツカゲ君のことを心配して探し回ってたんだ。その足の怪我、結構酷いみたいだね」
「これぐらい大したことない。練習中にちょっとミスっただけだ」
「大したことあるよ！　そんな無茶してたらスーシーができなくなっちゃうよ⁉」

ナナシの優しさはこういうところだ。相手の痛みを心配し、自分のことなど後回しにして全力で入れ込んでしまう。
「二人とも、落ち着いて下さい。……ナツカゲさん。あなたは一体、何を隠そうとしているのですか？」
ナナシの隣からじっとナツカゲを見上げると、少年の瞳が不安に揺れ動いた。強がっていようと、彼だってミサネと年は変わらないのだ。大人よりもずっと心が柔らかい。
「……俺だって何がどうなってんのかわかんねーんだよ！」
「私たちなら力になれるかもしれません。事情を話してもらえませんか」
「だめだ」
このまま食い下がっても無駄だろうか。ミサネが追求を諦めかけた時、ナナシがぽつりと呟いた。
「……最近、スイミングスクールの生徒の様子がおかしい？　機嫌が悪いのも、怪我をしたのもそのせい……かな」
「……!?」
心臓を撃ち抜かれたかのように、ナツカゲの顔に驚愕が広がる。警戒が強まったのだろう。さっと身をひるがえして逃げる動作は、あまりに素早かった。
「あっ、逃げた！」
追いかけようとしたナナシの二の腕を、ミサネはがっちりと掴む。
「ナナシさん、今のは……？」
「え？　このアプリを使って、心を読んでみたんだけど」
丸いボディに尻尾の生えた、一つ目お化けのようなモジュールを見せてナナシは微笑む。
「俺には色んなものが数値に見えるって言ったよね。俺が見た数値をこのアプリに通すと、言語に高速変換して出力してくれるんだ」

それが本当なら恐ろしい精度だ。ナツカゲの顔色の変わり方からして、恐らく本心を言い当てられたのだろう。あれほど頑なに隠す心の内ならば、間違ってもナツカゲの前で暴露すべきではなかったが。
「ナツカゲさんは駅の方へ向かいましたね。３０７タワーへ戻るつもりでしょうか」
「多分そうじゃないかな。仲間のことをすごく気にしてたよ。状況を確認したいって強く思ってたみたいだし」
「わかりました、後を追いましょう。怪我の手当てもしていない状態では心配です」
坂道を走り出すと、ナナシも慌ててついてくる。ナツカゲは足を負傷していた。急げば駅で追いつけるかもしれない。

その願望は当然のように叶わなかった。
ミウミの情報通り、ナツカゲの足は負傷していても本当に速かった。全力疾走しても追いつけず、体力が切れたナマコのごときナナシを引きずって何とか電車へ乗り込んだ頃にはとっくに姿を見失ってしまった。ナナシにはどうか、もう少し体力をつけてもらいたい。
「ごめんね、俺が体力ないばっかりに」
「今日から一緒に筋トレをしましょうか」
駅を降りればあとは３０７タワーまで一直線。ナナシの自宅を通り越し、タワーへ入ろうとしたその時だ。
「ミウミさん?」
声を上げたのはナナシの方が早かった。遅れてミサネも気付き、足を止める。
タワーの入り口のベンチに座り込んだ少女の顔色は、誰が見ても心配するほど青白かった。通行人もちらちらと視線を投げかける中、ナナシは飛ぶようにベンチへ向かう。
「ミウミさん、休まずにずっと外にいたの?」

「ええ……ごめんなさいですの。しゃーくんの姿を見かけたので、つい追いかけてきてしまって」

「ナツカゲさんは見失ってしまったのですか」

「はい。途中で気分が悪くて、追いかけられなくなりますて……さっきまで、親切な男の子のお世話になっていましたです」

　無茶をするものだと思うが、あのナツカゲの様子は確かに放っておけないだろう。昨日今日会ったばかりのミサネが心配になるぐらいなのだから、付き合いの長いミウミが身体の不調を押してまで追いかけたくなる気持ちもわかる。

「ミウミさん。体調が優れないところ申し訳ないのですが、ナツカゲさんのことを少し伺ってもよろしいですか」

「ええ。私がわかる範囲であるますれば」

　奇妙な言い回しをしながら、ミウミは微笑む。頬に少し朱が差した。ナツカゲの話が出来るだけで嬉しいらしい

「最近、ナツカゲさんの様子がおかしいと教えてくれましたよね。どんな部分をおかしいと思いましたか？」

「ええと……以前はあんなに乱暴なプレーはしませんですたの。練習以外では変わりないのでしたけど」

「人が変わったような感じにはなりませんでしたか」

「ううん……そこまでは？　でも危ないから止めてほしいと言ったら、その後は練習を見せてくれなくなりましたです」

　頭の片隅で閃くものがあった。ミウミの話だけでは確証は得られないが、以前と比べそれほどまでに態度が変わったと言うのなら。もしやミカドが言っていた、管理プログラムのハッキング被害に遭っているのではないか――？

　情報の断片を整理しつつ、ミサネはミウミに会釈する。

「ありがとうございました。どうしましょうか、家まで送りますか」
「いえ、私はしばらく休めば家まで戻れましまし。お気遣いなしに！　もしよかったら、しゃーくんを見つけたら教えてくだされば」
「はい、見つけたらミウミさんが探していたと伝えます。では、お大事に」
「ちゃんと休んでね、ミウミさん！」
　穏やかに手を振るミウミを気にしつつ、ミサネとナナシは３０７タワーへ足を踏み入れる。今日も観光客が行き交い、辺りはとても賑やかだ。
「ミサネちゃんは、ナツカゲ君がハッキング被害に遭ってると思ってる？」
やはり鋭い。いや、心を読まれた可能性もあるか。
　動揺を抑えつつ、ミサネは笑顔で歩くナナシをちらりと眺めた。
「ハッキングにはウィルスが用いられているのでしょうか」
「オリジナルのウィルスが用いられてる可能性は高いね。被害者のビットフォンにハッカーが直接干渉してウィルスを送り込んでるんだと思うよ」
「……ではたとえば、一人がウィルス攻撃を受けて乗っ取られたとします。その人からウィルスが拡散され、また別の人へ感染する可能性はあり得ますか」
「うん、当然あり得るね。でも二次感染被害を受けた人たちは、大元の人よりもウィルスが弱いから操られてる時間が短くなるかな。……考えはまとまった？」
　ナナシの問いかけにミサネは頷く。エレベーター待ちの行列はまだ動きそうにないため、心持ち声を潜めることにする。
「ナツカゲさんは最初にウィルス攻撃を受けた一次感染者ではないでしょうか。スイミングスクールの人たちは、拡散されたウィルスに感染している二次感染者なのかなと」
「うん。その可能性は俺も考えたんだけど、何か引っかかるんだよね。俺はナツカゲ君がハッキングを受けたわけじゃない気がする」

「……その推測の根拠は？」
「うーん、はっきり言えないんだけど……」
「ナツカゲさんは練習中だけ様子がおかしいとのこと。これは練習中のみ、注入されたウィルスでハッカーの外部操作を受けているからではないかと思ったのですが」
　ハッカーに操られている最中は記憶がないとか。ナツカゲの混乱ぶりは記憶をなくしたせいだとは考えられないだろうか。
「……でも、ナツカゲ君は足の怪我のことを覚えてたよね。『練習中にちょっとミスっただけだ』って。だったら練習中も操られてなくて、記憶が残ってるんじゃないかな」
「！　確かに……しかし、それでは何故（なぜ）ナツカゲさんは乱暴なプレーの理由を隠しているのでしょうか」
　エレベーターのドアが開いて、どっと人が降りてくる。話がまとまるまではとミサネが列を外れると、ナナシも後をついてきた。
「優しいから、じゃないかな。たとえばスイミングスクールの誰かがハッキング被害に遭ってたとして、仲間の様子が急変したらナツカゲ君も混乱すると思う。仲間のために、黙（だま）って隠し通そうとしてもおかしくないよ」
「それでは推測の域を出ないかと。何か確証はありませんか」
「そうだなぁ……あ、そういえばナツカゲ君の心を読んだ時、仲間のことをすごく心配してたよ。これじゃ証明にならない？」
「………」
　情報を再度整理して入念に構築した結果、ミサネは敗北を受け入れた。情（なさ）けない。自分の推理能力は、結局のところまだまだ未熟なのだ。
「……わかりました。まだ曖昧（あいまい）な部分も多いですが、ナナシさんの方が正しいかと思います。ナツカゲさんと話をしてみましょう」
「よかった！　ああ～緊張した。ミサネちゃんの威圧（いあつ）感すごいなぁ！」

「ああ……すみません。多分、職業病です」
「職業病？」
「いえ、何でもないです。それより、ナナシさんもやればできるじゃないですか」
ちょうどエレベーター待ちの行列が解消していた。客を吐き出して空になったエレベーターへ、ミサネは足を踏み入れる。続いてナナシと他の乗客も乗り込んで、満室になった箱は上昇を始めた。
「ナナシさんの推測が当たっているなら、ナツカゲさんはまだ感染していません。早めに声をかけないと危険ですね」
「うん……こうなってくると、予想が外れてくれてた方がいいなぁ」
ナナシがにこりと微笑む。それはミサネが一番馴染んだ、ナナシの表情だった。

——何かがおかしい。

エレベーターを降りた途端、ミサネは直感した。空気がピリピリと張り詰め、一歩を踏み出すのに随分と勇気が要った。
こんな状況でも、ナナシは何も感じていないかのように競技場へと進んでいく。おかげでミサネも何とか逃げずに続くことができた。
ここは危ない。頭の中で警鐘が鳴る。嵐の中へ飛び込むのに等しい、無謀な行為を冒しているような気がする。
ミサネは思わず前を行くナナシに手を伸ばす。しかし指先が袖を掴むより早く、ナナシの鋭い声が響いた。
「……ナツカゲ君！」
名を呼ばれた少年が息を呑んで振り返る。
開け放たれた競技場の扉の奥。彼はたった一人で悪意と対峙していた。

周囲を取り巻く少年たちの暗く澱んだ目。にたにたと笑う口元はぞっとするほど狡猾で、人間味というものを感じられない。

獲物を囲んで食ってやる。弄んで痛めつけて楽しんでやる。牙を剥いて押し寄せる分厚い悪意を、ナツカゲはたった一人で受け止めていた。

「……危ない！　早くこちらへ！」

ナナシの後ろから、ミサネも咄嗟に声を上げる。あんな悪意のまっただ中にいるなんて正気ではない。

「なんでだよ！　こいつらほっといていいワケねーだろ！」

「事情は後でお話ししますから！　早く！」

こちらの焦りが通じたのだろうか。ナツカゲは仲間たちを一瞥した後、駆け足で競技場の外へ出て来てくれた。

すぐさまナナシとミサネは扉を閉める。彼らが追って来る気配はない。とりあえずは一安心というところか。

「……何なんだよ、アレは」

「その前に、お仲間の様子についてお聞きしてよろしいですか」

「何でそんなことを」

「詳しい話を聞けば、あの方たちをどうにかできるかもしれません」

ぶつぶつと悪態を吐いてから、ナツカゲは歯切れの悪い口調で話し始めた。

「あいつらの様子がおかしくなったのは最近だ。練習中や試合の時はもっとひどい。コースから外れようとしたり、人とぶつかりそうになったり。でも大きな音を立てたりギリギリのとこ走ったり、驚かせると正気に戻るんだ」

「そっか、乱暴なプレーが増えていたのはそういうわけだったんだね」

ナナシの言葉に頷いてから、ミサネは先を続けた。

「実は今、ビットフォンを使って意識を乗っ取られるという事案が幾つか発生しております。この件もその疑いが大きいかと」
「乗っ取られるって……他人にか？　何のために？」
「理由はわかりませんが、かなりの手間をかけていることは確かです。面白半分ではなく、何かしらの目的はあるかと」
「目的なんてどうでもいい。どうやったらあいつらを元に戻せんだ？」
　ナツカゲの視線が競技場の扉へ向かう。磨りガラスの奥では人の動く気配があるが、先程感じた強烈な悪意はすでに鎮まっていた。あの状態を放置しておくわけにはいくまい。
「お仲間の方は驚かせるなどの刺激を与えれば元に戻るようですから、『感染者』だと考えられます。ハッキングされた人がばらまくウィルスに二次感染した状態かと。ですから、直接ハッキングされた人よりは症状が軽いようです」
「じゃあすぐ治せんのか？」
「はい。ただ大元の感染者がいる限りはまた感染してしまいます。……誰かお仲間の中に、強い刺激を与えても元に戻らなかった人はいらっしゃいますか？」
「数が多いし、一人一人のことなんて覚えてねーよ。全体の三分の二はあの調子だ」
「その全員と接触する機会がある人、っていうと限られてくるんじゃない？　先生とかはどうだろう」
　口を挟んできたナナシを見て、ナツカゲは少し考え込む素振りを見せた。
「コーチも曜日の交代制なんだ。毎日来ていて、大勢の仲間と接触してるって言うと……俺とユキナガだな」
　その名前は聞いたことがあった。オレンジのパーカーを着た元気な少年だ。確か、この競技場の前でも会っている。
「でも、様子がおかしくなったようには見えなかったんだよな。俺が怪我した時もあいつと一緒に走っててぶつかったんだけど、すげー心配してくれたし」

そう言ったナツカゲが、不意に動きを止める。視線はナナシとミサネを飛び越えてその後ろへ。
誰かが来たのかと振り返ったミサネは、こちらへ駆け寄ってくるミウミと——オレンジのパーカーを着た黒髪の少年を見つけた。
「しゃーくん！」
「何でここに来てんだよ……！　しかも……ユキナガと一緒に」
「あっれー？　オレっちお邪魔だった？　ミッチーがナッチーに会いたいって言うから連れてきたんだけど！」
現時点で、最も黒に近い人物が目の前にいる。しかしどうすればいいのだ。押し殺せなかった動揺に狼狽えていると、不意に右手が握られた。
「大丈夫だよ、ミサネちゃん。話をしてみよう。もしユキナガ君が操られてても、ハッカーが奪える情報には限りがある。質問攻めにしていれば尻尾を出すと思うんだ」
ぎゅ、と強く手を握ってから離れていくナナシを目で追いかける。温度をもらっただけで、心は不思議と落ち着きを取り戻していた。
そうだ。今はこの場をどうにかやり過ごさなければ。
「ねぇユキナガ君、俺とも話してもらっていい？」
「おっ、いいぜ！　練習始まるまでだけどな」
「ありがとう！　あのさ、さっきナツカゲ君のことナッチーって呼んでたけど。前は確かシャッチーって呼んでたよね？」
「あはは、何だそれ。他のあだ名で呼ぶことだってあるだろ！」
対峙したユキナガとナナシの間の空気が、僅かに緊張する。ミウミと話していたナツカゲも異変に気付いたのか、すいと視線を鋭くした。
「ユキナガは俺のことシャッチーとしか呼ばねーよ。ここに来た時からずっとその呼び名だ」

「はぁ？　何それ、意味わかんねーし」

ユキナガの声は相変わらず明るい。しかしミウミは敏感に空気の変化を感じ取ったのだろう。怯えたようにナツカゲの後ろに隠れている。

「そう言えばユキナガ君、足に怪我をしたって聞いたけど大丈夫？」

「怪我？　あー、これね」

ナナシの指摘を受けて、ユキナガは自分の足を上げてみせた。存在を主張する大きな白い絆創膏を指さして、けたけたと邪気のない笑い声が響く。

「隣を走ってたヨシダッチとぶつかっちまってさ。でもかすり傷だからへーキだぜっ！」

「……！」

ナツカゲとミサネは同時に息を呑む。その衝撃からいち早く立ち直ったナナシが、隙を逃さずまっすぐにユキナガへと斬りかかった。

「違うよ。ぶつかったのはナツカゲ君のはずだ。ヨシダッチ君じゃない」

「何だそりゃ。証拠でもあんのか？」

「俺の足だよ。しっかり見ろ。これはユキナガとぶつかってできた怪我だ」

「ナッチーと？　あーそっか、オレっちうっかりして……」

不意に、沈黙が訪れた。

少年の身体がぐらりと傾ぎ、糸の切れた人形のように地面へ崩れ落ちる。その有様を、誰もが固唾を呑んで見守ることしかできなかった。

「……っ、ユキナガ君……！」

「だめです、ナナシさん！　皆さん、ユキナガさんから離れて早くこちらへ!!」

ユキナガに近付こうとしたナナシの腕を掴んで、精一杯の力で引っ張る。ユキナガは、ほぼ確実に一次感染者だ。幾らナナシと言えど、接触すれば二次感染被害に晒されるだろう。

どうすればいい。どうすれば。必死に頭を巡らせるミサネの耳に、新たな足音が聞こえてきたのはその時だった。
「バカなガキならちょっとヘマしたってバレねェと思ったんだけどなァ……どいつもこいつもバカ面だったから間違えちまったよ！　ッハハ！」
　見たことのない長身の青年だ。ジャケットとズボンは黒ずくめ。額に巻いた赤いバンダナの下からは異様に鋭い三白眼が覗いている。口調からにじみ出る悪意、そして登場タイミング――よくよく考えずとも、彼の正体は一目瞭然だった。
「もしかして、ハッカーの……」
「ノミヤァ！！！　俺の名だ！！　覚えておけェ！！！！」
　空気を震わす大音声に、ミサネは思わず飛び跳ねる。大層驚いたが、おかげで少し頭が冷えたのはありがたい。
「ハッカーなのですね。貴方の目的は一体何なのですか」
「目的ィ？　んまァ別にどうだっていいだろ。俺は面白いから協力してやってるだけだからなァ！！！」
「協力……？」
「ｂｉｔ以下のテメーらがどこまで俺を楽しませてくれるかなァ！！！　まずは挨拶代わりだ、プレゼントを受け取れよ！！！」
　ノミヤの手が空中を叩く。まずい。皆に警告しようと口を開きかけた瞬間――全身にのしかかる凄まじい圧迫感に声を奪われた。
「……っ⁉　これ、は……！」
「いいかァ、今度はせめてギガ程度におもしれーモン見せてみろよなァ‼　次つまんねーモン見せたら、まとめて‼　圧縮してデリートしてやっかんなァ！！！」

ひらりと身をひるがえし、ノミヤは悠々と歩き去る。その後ろ姿を、ミサネは黙って見送るしかなかった。
身体が重い。重石を乗せられたかのように動かない。これは──。
（ウィルスをばらまかれた……！）
ミサネだけでなく、ミウミもナツカゲも頭を押さえて声もなくうずくまっている。
（このままじゃ……みんな、ウィルスに意識を乗っ取られてしまう……）
だが対抗策など思いつかない。用心が足りなかったことをミサネは心底悔いた。ハッカーは感染者の近くにいるという情報を掴んでいたのに、本人が現れた際の対応まで考えていなかったのだ。そのせいで自分だけでなく、多くの人を危険に晒してしまった。
（私は、何てことを……）
指の間から意識がすり抜ける寸前。幻のように重圧がかき消えた。
「……身体が……動く？」
目の前に、すいと白い手が差し出される。
「ウィルスの反応はもう感じられないね。よかったぁ、成功したんだ」
嬉しそうに笑うナナシの顔には、これまでで一番強い疲労の色が浮かんでいた。ミサネは一瞬、言葉を失う。
「もしかして、ナナシさんがウィルスを……？」
「うん。さっきユキナガ君を解析してた時、ウィルスの解析データも一緒に見つけたんだ。一か八かだったけど、上手く駆除ができてよかった」
「そうですか……しかし随分顔色が悪いようですが、大丈夫ですか」
「大丈夫だよ！　ちょっと疲れただけだから」
掴んだ手はひどく冷たく、小刻みに震えていた。『ちょっと疲れた』どころではないだろう。彼はいつもこうして、他人のために身を投げ出そうとする。

だがその行動を責めるわけにはいかない。ミサネたちは、ナナシに窮地を救われたのだから。

「ユキナガはまだ寝てるけど、寝言言ってるし大丈夫そうだ。あの変なのを逃がしたのは悔しいけど、お前に助けられた。ありがとな」

近付いて来たナツカゲの手が宙を叩く。何かを操作する動作の後、軽快な『ぴこん♪』という音が響き渡った。

「……うおっ⁉」

「これで俺とお前は友達。……これでいいんだろ？」

ナナシは目を大きく見開いて、宙に表示したフレンドリストを凝視する。そこには今、『フレンド申請があります』という一文が躍っていた。

「あっ、それなら私も！　ナナシさん、マイフレンド！　よろしくなのです♪」

ぴこん♪　音が鳴って、新たなフレンド申請がもう一件。

ナナシはしばらく感極まったようにその画面を見つめた後、慎重な仕草で――ぽちりと『許可』ボタンを押した。

すぐに画面が切り替わり、フレンドリストに新しい二行が加わる。ナツカゲとミウミ。ナナシが自力で獲得した、二人の友人の名前だ。

「お……おおお……！　ミサネちゃん……！　俺に……友達が……!!」

「やりましたね、ナナシさん」

「うん。フレンドリストにミカドお兄さん以外の名前があるなんて、本当に久々で、もう、感動して……うっ、涙出てきた……」
　人目もはばからず涙ぐむナナシを見ていると、ミサネの胸にも訳のわからない何かがこみ上げてくるようだった。
　とても苦労して、たくさん遠回りをしたけれど。これは小さな初めの一歩だ。

　自宅へ戻ったミサネとナナシは、今日も揃ってベッドに腰掛ける。
　おやつはチョコパフやポテトチップスなどの駄菓子一式。砂糖たっぷりのミルクコーヒーが疲れた身体に染み渡る。
「……何はともあれ、ナツカゲさんたちが無事でよかったですね」
「うん。でもミカドお兄さんも言ってたけど、ハッカー集団には気を付けないとだよね。この街で活動してるなら、またハッキングを行うかもしれないし」
　ミカドに状況を報告し、一連の事件は終わったかのように見える。だがノミヤと名乗ったハッカーは依然潜伏中で、新しい被害者が生まれる可能性は高い。
　その上こちらは相手の顔と名前まで知ってしまったのだ。何と面倒なことをしてくれたのだろう。
　けれど今は、先に果たすべき義理がある。ミサネはコーヒーカップを手にしたまま、隣に座るナナシを見上げた。
「ナナシさん。私、一つ謝らなければならないことがあります」
「うん？　何？」
「私はナナシさんに嘘を吐いていました。……本当は記憶喪失ではないのです。初めから自分の名前も出身も、全部わかっていました」
　軽蔑されるだろうか。家から放り出されるだろうか。いや、ミサネの知っているナナシならきっと——。

「よかったぁ！　じゃあミサネちゃんは記憶をなくしてることに悩んだり、悲しんだりしなくてもいいってことだよね！」
　怒らず、笑ってくれるのだ。
　予想の的中に嬉しさと悲しさが入り交じる。その複雑な感情を乗り越えて、ミサネは更に言葉を重ねる。
「……それと、もう一つ。黙っていたことがあります」
「うん、何だろう？」
「私は未来から来ました」
「へぇー、未来から来ましたんだ。すご……えっ！！？？」
「具体的には八年後です。二三三〇年の世界から、私はこちらへやってきました」
「ど、どうして⁇」
「……あることを調べに。それ以上は言えません」
そう。八年の時を越えて、自分は過去の世界を訪れたのだ。
ただひとつの願いのために。

「あ、帰って来た」
「お帰り～、ノミヤ君」
「あら、随分と楽しそうですね」
　乱雑な足音を立てて店内へ入ってきたノミヤは、四人掛けテーブルについた三名の顔を一瞥した。年も性別もバラバラだが、彼らがノミヤの『仲間』である。
「まァ、暇潰し程度にはなったな」
「もう、勝手に行ったら困るよ。ノミヤ君が勝手なことして、怒られるのはおじさんなんだから」

「謝るのは年上の役目だろ」
「いや、でもリーダーは一応ノミヤ君だし……」
「そうだァ!!　俺がリーダーだァ！！！　オッサン、コーヒー頼むぜ！！！」
「オッサン、クッキーなくなったよ」
「うふふ……あ、オッサン様。私も紅茶のおかわりをいただいてよろしいかしら」
「ねぇ、せめてもう少し隠れるとかさ……大体どうしておじさんの店で会議なの？」
　ぶつぶつと呟く『オッサン』を無視して、ノミヤはソファに身体を沈める。気のせいか、いつもより少し気分が弾んでいる感触があった。
　命令を無視してちょっかいを出しに行ったが、思ったよりは楽しめそうだ。
　相手なんて誰でもいい。気が狂いそうなほど暇な人生に、彩りを与えてくれるなら。

幕間1

☆フレンド大増殖作戦決行。
目標はフレンドリスト登録件数の増加。
フレンドの年齢・性別・職業は問わず。
可能な限り多くのフレンド登録を目指す。
以下に簡易作戦記録を残す。

☆狂牙 織
三十二歳男性。研究者。筋肉を愛している。
ハイテンションで明るく、いつも笑い声が絶えない。
薬の実験に付き合ッテアハ　アッハッハ　フレンド　イッパイ　つく　アハハハ
は———っはっはははは葉歯派波

覚えのない記述があったが、記録なのでそのままにしておく。
『マッチョＤＸ』という薬の実験に協力。様々な人に試飲してもらい、感想を聞く。
働きを認められ、助手認定。
製作したアンドロイドが家出してしまったらしい。見つけたら要連絡。

☆
蘇芳　咲

十七歳女性。ＣＤショップ店員。
すでにフレンド登録済みであるナツカゲの姉。
ナツカゲの紹介によりＣＤショップにて遭遇するも、姉弟仲はあまり良くない様子。
目の前で喧嘩をした後、ナツカゲは退店。
弟にプレゼントを探していると言うので、買い物に同行する。
同行中、二発の殴打。スナップの利いた平手打ちはなかなかの威力。
試行錯誤の末、ナツカゲへの手作りプレゼント（キーホルダー）を渡すことに成功。
殺伐とした雰囲気の中、フレンド登録を確認。
結論：二人とも素直じゃない。

☆
練餅　子

七十二歳女性。駄菓子屋のおばあちゃん。
　猫をたくさん飼っている。猫はいい。もふもふしたい。人類の宝だ。
猫（愛称：シズコ）が行方不明だと言うので、捜索に協力する。
聞き込み後、神社にて発見。怪我をした子猫を保護していた様子。
シズコと子猫を共に駄菓子屋へ連れていき、ヤスネに引き渡す。
子猫は元気だったが、シズコは老衰のため数日後に死去。
お礼としてフレンド登録をしてもらう。

以下、まとまらない感想。

おばあちゃんと色んなことを話す。シズコさんがヤスネさん思いだったこと。お迎えが来るのは当然だってこと。出会いも別れも大事にするべき。たくさん教わってお別れした。子猫の名前はミキコ。ふわふわでとても可愛い。シズコさんが最後に守った子猫。たくさん撫でさせてもらう。シズコさんとは違う手触り。もう会えないと思うと寂しい。

☆八雲黒
☆八雲白

八歳。クロクが兄、シロロが妹。双子の兄妹。
悪戯大好きな年頃。ハンパない体力。まともに付き合ったら死を覚悟するレベル。
フレンド登録を申し出たところ、言うことを聞けと強要される。
鬼ごっこ、じゃんけんの他、悪戯（ひっつけ虫を人にひっつける）を決行。
薬屋のシタラは姉。彼らにとっての急所であり弱点。
二人の宿題を手伝った後、フレンド登録申請を受理してもらう。
※彼らの中では友達＝奴隷。覚えておくこと。

フレンド登録者は以上。
今後も作戦を続行すること。

第2章　トモダチ　タクサン　デキルカナ

「新規のフレンドは四名、ですか」
ナナシのフレンドデータを見ながら、ミサネは思わず嘆息を零した。
「もう少し頑張ることができたのでは？」
「あと一歩って人も多いよ？　色んな人とお話ししてきたからね！」
「期待しています。せめて私よりフレンド数を増やしてください」
「そっか、ミサネちゃんも友達増やしてたんだね。さっすがー！　俺みたいなゴミと違ってミサネちゃんならみんなに好かれるもんね！」
　皮肉でなく、本心で言っているのが心底厄介だ。
　ミサネは隣を歩くナナシをじっと見つめた。まだまだフレンド登録者は少ないが、たとえ数名であっても自分から声をかけ、他人と友達になることができたのだ。ナナシだってやればできるはず。多分。
「なになに？」
「せっかく違う場所へ来たのです。引き続き、頑張って友達候補を探しましょう」
　今日はナナシの家があるブルーサンストリートを離れ、少し足を伸ばして別の地区を訪れていた。

ココアリーと呼ばれるこの街はカフェや雑貨屋、オシャレな服屋が立ち並ぶものの、不思議と落ち着いた雰囲気に包まれている。女性向けの作りかと思いきや、疲れたサラリーマンなどもよく足を運ぶ場所らしい。

ナナシも初めて訪れたはずなのだが、道がわかっているかのように物怖じもせず、楽しげな足取りでずいずい先へ進んでいく。ハッカーの接触に注意しようと言い含めたことは、覚えているのだろうか。

「あ！」

急停止したナナシの横で、ミサネはブレーキをかけ損ねた。二、三歩先へ進んでしまってから、立ち止まったナナシを振り返る。

「どうしましたか」

「あの人、ほら。前にミウミさんと一緒にいた人だ」

視線の先を追うと花屋の前に辿り着いた。

まばらな通行人の隙間から、帽子をかぶった小さな人影に目が届く。きょろきょろと辺りを見回す小動物のような仕草には、ミサネも見覚えがあった。

「具合が悪くなったミウミさんについていてくださった方ですね」

「疲れたサラリーマンよりは友達になりやすそう？」

「はい、可能性は高いかと」

「よーし！　行ってくる！」

ミサネが見守る中、目標に突き進んでいったナナシは勢いそのままに声をかけた。

「こんにちは！」

「わぁっ⁉」

「わああっ⁉」

「ああっ、あああごめんなさい……！　あれ？　お兄さん、前にも会いました……よね」

どうやら向こうもこちらを覚えていてくれたらしい。これで友達ハードルはぐんと下がったはずだ。行け、そこだ。言いくるめろ。ミサネは心の中で声援を送る。

「俺はナナシって言うんだ！　こっちはミサネさん！」

「えっと、僕はハルヤです！　ここでお母さんとお父さんの手伝いをしています」

小柄で華奢な身体付きと可愛らしい顔立ちのせいで実のところ性別すら曖昧だったのだが、どうやら少年で合っているらしい。

紹介されてしまったミサネはナナシの半歩後ろから、ぺこりと軽く会釈した。

「ええと、ナナシさんたちはここへ来たのは初めてですか？」

「街の名前は近所だから知ってたけど、歩くのは初めてだよ！」

「そうですか……」

ハルヤの眉が八の字に下がる。悩みごとの気配を察知。つくづく、ナナシと行動しているとトラブルに縁がある。

「何か困っていることでも？」

ミサネが口を挟むと、少年はこくりと小さく頷いた。

「この先に『ガーデン』って呼ばれてる大きな庭があるんですけど、知ってますか」

「ううん、まだ見てないなぁ」

「そこにある花壇が、最近荒らされてるらしいんです。僕もよく行く場所なので、気になってて……ナナシさんたちは何か知らないかなって」

ナナシとミサネは同時に顔を見合わせた。日常を蝕む僅かな異変——先日、二人が経験した事件もそうだった。ほんの僅かなほころびから、世間の裏で暗躍するハッカーへと辿り着いたのだ。

たかが花壇荒らしと侮ってはならない。これまで培ってきた勘を大事にして、ミサネは慎重に話を進めることにした。

「それはいつ頃（ごろ）からですか？」
「うーん……一週間前くらいかなぁ。花壇には柵（さく）があるんですけど、それを踏（ふ）み越（こ）えて毎日何本かの花が折られてるんです」
「そういう行動を取りそうな方に、心当たりなどは」
「えっ……犯人ってことですよね？　ええと……ここに住んでる人じゃないと思うんです。僕はずっとここに住んでるんですけど、ココアリーの人はいい人たちばっかりで」
　だから見知らぬ顔を疑（うたが）っていたのだろうか。ここへ来たのは初めてだという言葉を信じてくれたかどうかは不明だが、少なくともハルヤからミサネたちに対する敵意は感じられなかった。
「ハルヤ君、結構悩んでるみたいだし友達になろうって雰囲気じゃないよね？」
　黙（だま）って話を聞いていたナナシが、ちょいちょいとミサネの袖（そで）を引く。
「……どうしたんですか。空気を読むことを覚えたのですか」
「俺がいつも読めてないとでも!?」
　まさか自分では読めていると思っていたのだろうか。
　さらっと質問を流して、ミサネはハルヤに向き直る。
「その話について、詳（くわ）しい話をうかがえる人はいますか？」
「うーん……庭師のモロクさんなら何か知ってるかもです。ガーデンの手入れをしてるのもモロクさんなので」
「わかりました、ありがとうございます」
　何か言いたげな顔でこちらを見つめてくる少年に会釈して、ミサネはナナシと共に花屋の前を離れる。
「ガーデンに行ってみる？」
「はい。ハッカー集団が関わっているかもしれませんし、少し調べてみましょう」
「ハッカーじゃなくて不良とか他の人の仕業（しわざ）かもしれないよ？」

「犯人が誰であれ、事件を解決すればハルヤさんと友達になれると思いますよ」
「そっか！　頑張ろう！」
そう。重要目的はナナシの友達作りなのだ。ナナシにはとにかく一人でも多くの友達を確保してもらう必要がある。
「事件解決に向けて、人手が多い方がいいですね。ナツカゲさんたちにも連絡を取ってみましょう」
「ええっ⁉　すごい！　連絡を取ったら来てくれるなんて友達みたいだね！」
「友達でしょう、すでに。ナナシさんも、色々と慣らしていった方がいいですよ」
「慣らすって何を？」
「ガーデンはこっちですね」
「ぼかされた！　大事なところをぼかされた！」
隣で騒ぐナナシに構わず、〝ポツリ〟で新しく部屋を立てる。ナツカゲとミウミへ簡単な状況報告と手伝いの申請を送ると、二人からはものの数秒で返信が飛んできた。
『わかった。今から行く』
『しゃーくんと一緒に行きます！』
何とも付き合いがいいものだ。歩き出したので自動読み上げ機能に切り替え、音声で返信を入力する。
「ガーデンでお待ちしています。ありがとうございます」
「二人ともありがとう！　待ってるね！」
ナナシも素早くお礼を入力している。こうして見ていると、表面的な人付き合いはできるタイプなのだ。ただ、長く付き合うほど他者に恐れられ、距離を取られてしまうだけで。
叶うことならば、ナツカゲとミウミがナナシを恐れないでくれるといい。ミサネは心の片隅で、ひっそりと祈りを呟いた。

『俺はハピタン！　こっちはモロクだ！　仲良くしてやってくれよな‼』

ミサネは正面に立つ青年をじっと見上げた。正確には、青年の肩に乗ってうねうねと踊りながら絶叫するサングラスをかけたピンクのフラワーマスコットを。

「ハピタンさん」

『おうっ！！！』

馬鹿でかい返事に尻込みもせず、ナナシは目をキラキラさせて謎のビットフォンに食いついていく。こういう時は空気の読めなさも役立つものだ。

「アバターの音声変換機能ですね！　モロクさんは健康体みたいだけど……コミュニケーションを全部アバターに任せてるのかな？」

『察しがいいなぁ、兄ちゃん！　こいつァ生まれつき面倒臭がりでな！　アバターにこの機能がついてからほぼ喋らなくなっちまったのさ‼』

ガーデンを訪れたナナシとミサネが声をかけた青年は、予想通り庭師のモロクだった。花の前に座り込んで園芸道具を広げていたため、見当をつけやすかったのだ。

しかしモロクは随分と変わった性格らしい。肩に乗せた花型アバターの発言通り、自分は一切喋らず、無表情に口を引き結んで突っ立っているばかり。

短髪に帽子をかぶり、手に大きな枝切りバサミを携えた様子はごく普通の無愛想な庭師だ。肩で蠢きながら喚くアバターだけがやたらと騒々しい。

「お仕事中にすみません！　少しお話を伺ってもいいですか？」

『構わないぜ！　花を二、三本手入れすると飽きちまうからな、約十分間の休憩が必要なのさ‼今がちょうど休憩時間ってやつよ！』

「それで仕事になるんですか⁉」

『別に毎日全部の花壇の手入れをするわけじゃァねーしな。しっかし、最近花壇荒らしのおかげで仕事が増えちまって、帰りが遅くなっちまうんだよなァ』
「あっ！　その花壇荒らしについて、知ってることを教えてほしいんです」
ナナシが素早く突っ込むと、モロクの口元がへの字に歪んだ。主の感情を表現しているのか、ハピタンの方が遥かに渋い顔付きだ。
『兄ちゃんたち、花壇荒らしの犯人捜しか？』
「はい、そんな感じで」
『なるほどなァ！　こっちも花壇荒らしなんざいなくなった方がありがてぇ。ちったァ協力したいとこだが、あんまり情報がなくてよォ……有用そうな手がかりっつーと、そうさな。犯人ぽいやつは背丈が低かったってぐらいか』
「何か他の情報は」
『ない！』
「そうですか……」
『背丈が低い』だけではまず犯人像を絞り込めないだろう。だが何もないよりはマシか。
「ありがとうございました！　また何かあったら話を聞きに来てもいいですか？」
『おう、いいともよ！　犯人捜し、頑張ってくんなァ‼』
喚きまくるハピタンと無愛想なモロクに礼を言って、その場を離れる。モロクはまた、花の手入れに戻ったようだ。
「皆さん、花壇荒らしに困っているようですね」
「せっかく綺麗に咲かせた花を折るなんて酷いよね！」
「犯人の背丈が低いというと、子どもでしょうか……あ、ナツカゲさんたちから返信です」

〝ポツリ〟を確認すると、ナツカゲたちはガーデン前に着いたとのこと。ちょうどいいタイミングだ。
「ナナシさん、このままナツカゲさんたちと合流しましょう」
「はーい！」
足早にガーデンの門をくぐると、ナツカゲとミウミが仲良く並んで立っていた。本当に連絡後、すぐに出発してくれたらしい。
「ナツカゲ君！　ミウミさん！」
「よう」
「ハロハロウ！　ナナシさん、えっと……数日ぶりですの！」
「うんうん！　数日ぶりに会ったから、俺のことなんかもう忘れてるかと思ったよ！」
こういう発言をするから、だんだんと知り合いが離れていくのだ。皮肉めいた言葉を率直に受け取れば、戸惑う者が大半だろうに。
しかしミサネの焦りと裏腹に、ナツカゲとミウミは気に留める様子もなく会話を続けている。
「忘れるわけねーだろ、お前みたいなインパクト強いやつ。つーか、せっかく夏休みだってのに花壇荒らしの犯人捜しってなんだよ。暇なのか？」
「えっ、夏休み？」
「あ？　おい、まさか」
「ああー、うん！　夏休みだよね！　入る前が一番わくわくして、いざ入るとそんなにやりたいことがなくて無駄にだらだら過ごしちゃうやつだ！」
どうやらナナシは今が夏休みだということを忘れていたらしい。街を行き交う学生の多さを見れば長期休暇中だろうと判断が付くだろうに、頭からすっぽ抜けていたのか。
「お二人とも、ありがとうございます。ポツリでもご連絡しましたが、私たちは花壇荒らしにハッカーが関わっている可能性を考えていまして」

「ワオ！　またあのクレイジーなお方がバカやってるですの？」
「まだ確実にハッカー絡みだって証拠はないんだけどね」
ナナシの言うことはもっともだ。だがミサネはこの案件に、ナツカゲの事件と似たにおいを感じている。細い糸を辿っていけば、再びハッカーが現れる気がする――根拠を問われれば『勘』であるとしか言えないのだが。
「あの声のでかいハッカーを、こっちから見つけることはできねーのか？」
「そうですね……現状では手がかりがなさすぎて難しいかと思います。ですが、あの方の性格からして再度事件を起こす可能性は高いでしょう。もしユキナガさんのようにハッキングされた被害者がいる場合、その人を見つければハッカーの方から出てくるかもしれません」
「じゃあ、まずは花壇を荒らしてるのが誰か調べて……その人がハッキングされてないか確認するわけだね。頑張るぞ！」
　ナナシの数少ない長所は悲観的にならないところだ。声の明るさにつられたのか、ナツカゲとミウミも顔を見合わせて頷いている。
「現在花壇荒らしさんについてわかっている情報は、〝背丈が低い〟人物だということだけでして」
　ミサネの説明に、ナツカゲが首をひねる。
「子どもってことか？　ユキナガの時もそうだったけど、若いヤツが狙われてんのかな」
「ｏｈ！　いわゆるペド……ショタコン⁉」
「大人でも背の低いヤツはいるだろ」
「そうですね……子どもの方が操りやすいなどの理由はあるかもしれません」
「じゃ、俺とミウミはここら辺見張っておくか。お前らは情報集めに行くんだろ？」
「はい。いくらか情報が集まった時点で報告させていただきます。では、こちらはよろしくお願いします」
「はいですの！　ところでナナシさんの友達作りはいいんですの？」

すっかり油断していたのだろう。ミウミに突然話を振られ、ナナシは『えっ？　今なんて？』という顔をしてミサネたちを見回した。
「友達作りは」
「あーはい！　メインはそっちに寄りつつ事件は解決しちゃう！　みたいなノリで！」
「ワオ、戦隊モノみたいです！」
「トモダチ戦隊トモダチになりたいんジャー、出動！　街の平和は俺たちが守る！」
しゅぱっとポーズを決めたナナシは、ミウミたちに元気よく手を振って歩き出す。後に続こうとしたミサネは、袖を引かれて振り返った。
「どうしたんですか、ミウミさん」
「ナナシさんもミサネさんもマイフレンド！　私、ミサネさんを応援してます。味方です。だから頑張って！」
　こちらを見つめる綺麗な瞳には、純粋な好意だけがあった。ミサネの事情も思惑も何も知らないまま、それでも味方だと言い切ってくれる声にふと胸が締め付けられる。
　笑え。笑おう。それが果たすべきせめてもの義理だ。
「ありがとう、ございます」
　ミサネは必死に硬い口角を持ち上げた。ミウミの綺麗な微笑には全く及ぶまい。それでも、今できる最高の笑顔を向けたつもりだった。
「これまでに出てきた新しい情報は、『最近見慣れない子がこの辺りを歩いてる』って話だけだっけ」
「はい。花屋のチノさんから聞いたお話だけですね」
「うーん、手強い。もう少し歩き回らなきゃだめかな～」
　ミサネはホットココアを前に、作戦会議の進行中だ。

場所は『カフェ　ラパン』。ココアリーの入り口近くにある、シックで落ち着いたカフェである。ナツカゲたちと別れた後、通りを何度も往復したナナシが疲れ果てたタイミングで、二人はこのカフェへ足を運んだ。
夏の盛りとあって、歩いているだけでもかなり体力を使う。冷房の効いた店内で水分を摂ると、ナナシの顔色も少し落ち着いたようだった。
「あまり無理をしない方がよろしいですよ、ナナシさん」
「でもミサネちゃんは早く事件を解決したいでしょ？」
「それはまぁ。ですがナナシさんが体調を崩しては意味がありません」
「俺のことなら心配しなくてもへーきへーき！　おやつで元気になったしね！」
グラスを空っぽにしたナナシは、氷の欠片をつつき回して遊んでいる。
夏休みだと言うのに、店内にはほとんど人影がなかった。入り口では小学生ぐらいの小柄な可愛らしいウェイトレスが、トレイを手にぼんやりと外を眺めている。夏休みで駆り出された家族だろうか。
ミサネも空になった手元のカップを見下ろした。カフェの滞在時間は十五分ほど。ナツカゲたちと別れてからは一時間が経過している。そろそろ連絡を入れるべきか。
「っとと。ミカドお兄さんからだ」
不意にナナシが声を上げた。どうやら着信が入ったらしい。
「ミサネちゃん。俺、ちょっと外に出てくるね」
「私も行きます。お会計はしておきますので、先に出ていて下さい」
会計を済ませて外へ出ると、ナナシが日陰で音声通話を行っていた。出てきたミサネを見て、すぐに映像通話へ切り替えてくれる。
『やぁ、ミサネさん。カフェにいたんだって？　ごめんね』

画面に現れたミカドの首は、相変わらず赤い数字で埋め尽くされている。にこりと微笑んだその顔にやはり異質さを感じてしまい、ミサネは少し居心地の悪い思いを味わった。

「いえ、ちょうど出ようとしたところでした。何か新しい情報が入りましたか？」

『ハッカーのことで少しわかったことがあってね。僕の方で詳しく調べてみたんだけど、あの声の大きな青年は都内の工業高校に通ってる〝ヨサカ・ノミヤ〟という人物である可能性が高いみたいだよ。珍しい名前だからほぼ確定かな』

そこまでわかれば、もう身柄の確保もできるのでは。

ミサネがナナシと顔を見合わせると、その疑問に答えるかのごとくミカドが先を続けた。

『ところが彼のビットフォンからは、ハッキング事件に関する情報が一切見つからなかったんだ』

「ビットフォンって確か、持ち主の数日分の記録や行動が一時的に残ってるんだよね」

『そうだね。素人にはまず消せないはずなんだけど』

ミカドの笑みはどこか自信なさげで、つい油断してしまいそうになる。掴み所のなさではナナシの上を行くだろう。

『証拠がない限りは上も動けないと言っているんだ。困ったことに、彼を追跡しようとしても追跡機能まで妨害されてしまってね』

「言動はアレでも、予想以上に高度な技術を持つハッカーということでしょうか」

『うん。正直、あまり関わらない方がいいと思うよ』

恐らく忠告は正しいのだろう。しかし――。

「ねぇ、ミカドお兄さん。ハッカーって一人だけなのかな」

『うーん……僕は複数人いると思ってるけど』

「その人たちの目的って何なんだろう。あのノミヤさんって人は、みんなが慌てふためく様子を見て楽しみたいだけに見えたけど。他の人まで愉快犯ってわけじゃないよね」
「そうですね……愉快犯同士で手を組むとは考えにくいかと」
「あの人、あんまり頭がよくなさそうに見えたからさ。ビットフォンのデータ侵入とか乗っ取り作業は別の人がやってるんじゃないかと思ったんだよね！」
『はは。その辺りはもう少し詳しく調べてみるよ。何かわかったら、また連絡する。とりあえず、二人とも気を付けて』
　ミカドは結局強い制止を口にしなかった。柔らかい声音を残して画面が暗転する。
　同時に、ミサネのビットフォンが通話を受信した。ずいぶんと忙しいことだ。
「ミサネちゃんも電話？」
「ミウミさんからですね。……はい、もしもし」
　音声通話を開始したが、どうも様子がおかしい。途切れ途切れに聞こえるミウミの声が酷く切羽詰まっている。
「ミウミさん？　どうしましたか」
『た、大変ですの、助けて下さいですの！　しゃーくんが！　しゃーくんが！』
「落ち着いて下さい。ナツカゲさんがどうしたんですか」
『しゃーくんが喧嘩をしてますの！　止めて下さいまし！』
　漏れ聞こえた音声をナナシも拾ったのだろう。ミサネとナナシは、同時に顔を見合わせた。
「だから謝れば許すっつってんだろ」
「んだよ。そこに電柱みてーに突っ立っててっからぶつかっただけだろーが」
　ガーデンの入り口前で、緊迫した空気が炸裂する。

火元は明白だ。青い髪と赤い髪の少年が額を突き合わせ、猫の喧嘩のごとく互いを威嚇し合っている。

　ああ、何だか以前にも見たことのある光景だ。

　青い髪の方はナツカゲ。赤い髪の方は――数日前にもナツカゲと神社の前で睨み合っていた少年だ。目付きが鋭く、口元を覆った真っ黒なマスクには牙を剥きだした猛獣のプリント。どこからどう見ても不良少年という格好を忘れるはずもない。

「は？　てめーは普段電柱にぶつかってんのかよ」

　ナツカゲが鼻で笑うと、赤い髪の少年が急に自信なさげに眉を寄せた。

「あん？　あー……どうだったかな」

「クソ、鳥頭越して1ｂｉｔ脳以下だなてめーは。バカの相手ほど疲れるもんはねーよ」

「んだとぉ？　バカっつーやつがバカだろうが、クソバカ」

「バカにバカっつって何が悪いんだよ」

　通行人は皆、見ないふりをして足早に行きすぎる。何人かは面白がって足を止めたが、赤い髪の少年に睨まれて慌てて去っていった。

　これではミウミも慌ててしまって当然だ。ミサネが割って入るタイミングを見計らっていると、隣のナナシがすたすたと散歩でもするような気安さで進み出た。

「ちょっと待った！　君、前にも会ったよね？」

「ああ？　そうだっけ⁇　……？？？」

　本気で忘れているようだ。これではナツカゲに1ｂｉｔ脳以下と罵られても仕方がない気がする。

「あ、それならいいんだ！　じゃあ初めまして、俺はナナシ！　君は？」

「ふあぁ……クジョウ・アキタカ。やべ、ねみー。喧嘩すんなら別の日でいいか？」

「別に喧嘩したいわけじゃなくって！　友達になれないかなーって」

「ダチィ？　めんどくせーな……」
「それなら話だけでも！」
「あー、ならいいけど」
いいのか。ナツカゲと喧嘩をしてたんじゃないのか。
ちらりとナツカゲを見ると、呆れ果てた顔をして二人から距離を置いていた。その脇にホッとした顔のミウミがくっついて、危ないとか喧嘩は良くないとか言いながら拳を握って力説している。
（それにしても、ガーデンへ来るようなタイプには見えませんね）
不良と花壇を組み合わせれば、自ずと今起こっている事件が結びついてしまうわけで。
だが、まだ決めつけるのは早計だ。ナナシに目配せして、彼から話を聞こうと促す。
「えーと、アキタカ君……は、喧嘩が好きなのかな？」
「好きってわけじゃなくて……むかつくと殴り返したくなるけど、手はあんま使いたくないっつーか？」
「手を使いたくない？」
「んー、俺バンドやっててさ。怪我すっと演奏できなくなるから……やべ、眠ぃ」
「眠くないよ！！！！　アキタカ君は眠くない！！！！　どう⁉」
「そう言われると眠くないような……？　あ、ダメだ。やっぱねみー」
埒があかないとはこのことか。ナナシには会話をしようとする意欲があるのだが、一向に会話が進まない。
とにかく花壇荒らし――ひいてはハッカー集団と関わりがあるかどうかだけでも聞き出せればいいのだが。祈るような気持ちでミサネはナナシを見つめるも、会話は要領を得ないまま低空飛行を繰り返す。
「そう言えばアキタカ君は、どこに住んでるの？」

「んーと、ブレイクパッセージ」
「え、ここから遠くない？　どうしてそんなに遠いところから？」
「いや……ちょっと、ダチがなくしたギターのピック探しててさ。多分、この辺で落としたよーな気がするっつーから、ここんとこ毎日来てんだ」
「率直にお聞きします」
　話のまとまりのなさに、イライラしていたのかもしれない。気付いた時には会話に口を挟んでいた。
「何だよ」
「そのピックを探している時に、花壇を荒らしたりしていませんか」
「あン？　なんで俺がそんなことすンだよ」
「そういうことをしそうな風貌に見えるからです」
「花壇なんざ見向きもしてねえっつーの」
「では無意識に荒らしていた可能性もあるのでは？」
　ぐい、と腕を引かれた。はっとして気付くと、ナナシが酷く困った顔をしている。
　その衝撃で頭が冷えた。――自分は一体、何を口走っていたのか。
「……チッ。くっそ萎えた。向こうで寝る、じゃーな」
　アキタカは鋭い一瞥を投げて、どこかへ歩いていってしまう。
　その後ろ姿を見ながら、ミサネは酷い後悔に襲われた。見た目だけで相手を花壇荒らしの犯人だと決めつけるなど、どうかしている。
「もー……ミサネちゃん、ダメだよ。アキタカ君、疑られるのはあんまり良く思わないみたいだから」
「……ごめんなさい」
「あっ、責めてないよ！　大丈夫だから、そんな悲しい顔しないで」

自分の未熟を痛感する。ナナシの声があまりに優しくて、胸がどんどん痛くなる。
「ナナシさんは……昔も変わらず、お優しいのですね」
「え？」
「ダメですよ、優しすぎるのは。……私が前進できなくなりますから」
何としてもナナシを救おうと決めて、ここへ来たのだ。勇気を振り絞り、恐怖を振り切って逃げるように走ってきた。その決意を、揺さぶらないでほしい。
深呼吸を一つ。大丈夫だ。まだ崩れたりはしない。
「ご迷惑をおかけしてしまい、すみません。もう少し情報収集を……」
「おい。さっきのバカはもう帰ったのか？」
ガーデンの門からナツカゲとミウミが出てくる。いつの間にか姿を消していた二人だったが、中へ入っていたのか。
ナツカゲはまだ警戒した表情で辺りを見回している。アキタカの相手がよっぽど面倒だったのだろう。
「帰ったよ。ナツカゲ君たちはどうしてたの？」
「ガーデンの庭師さんにお話を聞いてまいりましたのん！」
なるほど、気が利く。と思った途端、ミウミが首を振ってナツカゲを見つめる。
「しゃーくんってば、バカを見たくないから帰るなどと言いまして。お付き合いすると言ったのだから、最後まで頑張らねばねばダメなのです！」
「だから付き合っただろ。……あのモロクって庭師に聞いたけど、花壇荒らしの犯人ぽいやつはミウミよりも背が小さいらしいぜ」
「はいですのん！　ですから、先程の方は犯人ではないと思うのですます！」
確かにアキタカはミウミよりも遥かに身長が高かった。まさかこれだけの体格差を見誤るはずもない。初めからモロクにきちんと話を聞いていれば、花壇荒らしと決めつけてかかることもな

かったのか――。
　隠しきれない反省が顔に出たのだろうか。ミウミが慌てて駆け寄ってくる。
「ミサネちゃん、どうしたんですの⁉」
「すみません。己の未熟を実感している最中でして」
「ミサネちゃんはとってもキュートでしっかりしてますのん！　ノープロブレム！」
　手を取られて視線を上げると、作りの美しい顔が目の前にあった。瞳に輝く星があまりに純粋で眩しくて、胸の痛みが少しだけ和らぐ。どうして彼女は、こんなふうに綺麗でいられるのだろう。
「ミウミさんより少し小さいぐらいかぁ。それぐらいの背丈で、ガーデンによく来る人はいないかな？」
「ああ、花屋のハルヤって子どもが二日に一度ぐらい来てるってさ。あと、同じぐらいの年齢と背丈なら喫茶店にいるロッカってウェイトレスもそうだって」
「ナツカゲ君たち、すごい！　たくさん情報ゲットしてきてる！」
「しゃーくんはすごいのです！　素早くて行動力もりもりなのです！」
　ナナシとミウミが盛り上がる横で、ナツカゲは居心地悪そうに前髪をいじっている。喧嘩っ早くて素直さに欠けるが、頭の回転は確かに速い。助力を求めて正解だった。
「それじゃ、ハルヤ君に話を聞いてみる？」
「そうですね。せっかくナツカゲさんたちが摑んできてくれた情報です。有効に活用しましょう」
　ナナシと顔を見合わせてミサネは頷く。先程休憩を取って回復したし、もう少し動いても大丈夫だろう。
「俺たちはもう少しここを見張ってる」
「ナツカゲさん、喧嘩はもうしないで下さいね？」

「大丈夫ですます！　私がちゃーんと！　見張っておきますゆえに！」
呆れ顔のナツカゲと笑顔のミウミに手を振って、ガーデン前を離れる。
時刻はすでに午後遅く。ハルヤはもう、花屋へ戻っているだろうか。

「あっ！　お兄さん、お姉さん。こんにちは」
花屋の前で掃き掃除をしていた可愛らしい少年が、ぴょこんとお辞儀をする。
店主のチノは中で来客の相手をしているようだ。店の奥から聞こえてくる談笑を確認して、ミサネは少年——ハルヤに向き合った。
「お聞きしたいことがあるのですが、少々お時間をよろしいですか？」
「はっ、はい！　僕でよければ何でも！」
「ハルヤさんは、ここ最近でガーデンへ行ったことはありますか」
質問を投げた途端、ハルヤの瞳が忙しく揺れ動いた。箒を握った手元までそわそわし出す。これでは何かあると言っているようなものだろう。
「えっ？　えっと……モロクさんとお話しするために行くことはありましたけど、僕はいつも配達で別の街へ行ってて……。あ、あの！　僕、喫茶店へ行く用事があるんです。あまり長くお喋りは……」
逃がしてなるものか。間髪入れず、ミサネは言葉を続けた。
「大丈夫です。あまり時間は取らせません。ここからはナナシさんの番なので」
「俺!?　じゃあ早口で頑張っちゃおうかな!?」
無茶振りをあっさりと受け入れ、ナナシはハルヤに向き直った。
「そんなわけで、えーと……ハルヤ君が最後にガーデンへ行ったのって何日前だった？」
「三日ぐらい前……だと思いますけど。ちょっとよく覚えてません」
「じゃ、ここ一週間でモロクさんと話した記憶があるのは三日前だけ？」
「は、はい。そうです」

それはおかしい。ミサネが思わず目を見開いたのと、ナナシが言葉を続けたのはほぼ同時だった。
「うーん。でも、モロクさんは『ここ一週間でもハルヤ君とは二日に一度ぐらい話をしてる』って言ってたんだ。だとすると、三日も間を置いてないってことだよね」
「えっ⁉」
ハルヤはうろたえたように視線をさまよわせる。両手がぎゅっと肩掛け鞄の紐を握り締め、細い肩には警戒心がみなぎったように見えた。
「ごっ、ごめんなさい。びっくりしちゃって。……おかしいな、配達中以外に記憶が飛んじゃうことなんてないのに」
「記憶が飛んじゃうことなんてあるの？」
「っと、そうですね。忙しい時は、どうでもいいことは忘れちゃったり……。あ、でも、落ち着いてからぽっと思い出すことが多いです」
そわそわと落ち着きのない足元。緊張した表情。――この様子を見て、何もないと判断する方が難しい。そもそも情報と話が噛み合っていないのだ。
更に詳しく話を聞きたいところだが、ハルヤは完全に及び腰だ。じり、と一歩下がるとナナシとミサネに困惑の視線を向けてくる。

「あの、僕、そろそろ行かなきゃ。おじさんに怒られてしまうので。……それじゃあ、あの、失礼します！」
転がるように走る――逃げていくという表現がぴったりの後ろ姿を見送りながら、ミサネは大きく息を吐いた。彼は一体、何を隠しているのだろう。
「怪しいですね」
「と言うか、関わっていることはほぼ確定なんじゃ……」
「『ガーデンでモロクさんと話したことを覚えていない』、そして『記憶が飛ぶことがある』。これはハッキングを受けている症状と同じ気がします」
「そうだね……やっぱりハッカー絡みかぁ。ミサネちゃんの勘は正しかったね！」
「まだ確定したとは言い切れませんが可能性は高いですね。うまくいけば、何か起きる前にハッカーを引きずり出せるかもしれません。まずはカフェへ行ってみましょう」
ハルヤはすでに、すぐ隣のカフェへ駆け込んでしまったようだ。
あとを追う形でミサネたちも店の扉をくぐる。本日二度目の来訪だ。さっき出て行ったばかりなので、ちょっとだけ気まずい気分がするのは仕方ない。
「いらっしゃいませ！　……ん？　さっきも来たお客様！　忘れ物ですか？」
元気よく飛び出してきたウェイトレスの少女を、ミサネはこっそり観察する。
年は十歳程で、背丈はミサネより少し低め。花壇荒らしの目撃情報と確かに一致するのだが、まだ情報が少なすぎて決め手に欠ける状態だ。
「あ、いえ！　忘れ物じゃないんだけど。すいません、ちょっとだけ聞きたいことがあるんだけどいいかな？」
「は!?　はひっ！　なんでしょひゅぅ!?」
マニュアル外のことにはテンパる性質なのだろうか。ナナシが話を切り出した途端、それまでしゃんとしていた少女の口調が突然暴れ出した。

「落ち着いて落ち着いて！　まずは深呼吸しよう！」
「ううう……すーはー、すーはー……よし！　なんでも聞いてくださいっ！」
店内には相変わらず人気がなかったが、一番奥の席に客がいるようだ。背を向けて座る男性が一人。向かい合う席には、先程話していた少年の姿。
「花屋のハルヤ君って子は、ここによく来たりする？」
「そうですね。今まではたまーにでしたけど、ここ最近はよく来てるかもです。今も奥でおじさんとお話してますよ。呼んできますか？」
「あ、ううん。大丈夫！　そのおじさんって人はえーと、このカフェの店長さん？」
「はい！　ハルヤ君と仲がいいんです。あと最近は、別の子も一緒に来て三人でお話してますね。私と同じぐらいの年の子です」
また犯人候補が増えてしまった。ミサネとナナシは思わず顔を見合わせた。この期に及んでまさか別の候補が出てくるとは。
だったらせめて、候補の数を減らしていこう。
「すみません。私からも一つ、お聞きしていいですか」
「はい、なんなりと！」
「ロッカさん……ですよね。最近、ガーデンへ行ったことはありますか？」
「え？　えっと、前の休日にモロクさんと遊んでもらいましたけど、あとはずーっとここでおじさんの手伝いをしてます」
「そうですか、ありがとうございます。そのおじさんからお話を伺うことはできますか」
店が暇なのをいいことに、更に押してみる。客でもないのに図々しいことこの上ないが、断わられたらそれまでだ。
ロッカはちょっと困った顔で首を傾げたが、素直に頷いてくれた。
「わかりました。おじさんを呼んでみますね」
「はい。お願いします」

店の奥へ飛んでいく可愛らしい後ろ姿に、少しだけ罪悪感を覚える。十歳でおじさんの店を手伝って、敬語を使ってお客さんの相手をできる子だなんて、百点満点のいい子ではないか。

「やっぱり子どもばっかり狙われてるってことなのかな。今のところ、大人でハッキングされてるっぽい人っていないよね」

「まだ二件目なので何とも言えませんが、その可能性も考えられますね」

入り口脇に固まって話していると、不意に頭上に影が落ちた。

はっとして見上げると、思いのほか高い位置に顔がある。ぼさぼさの黒髪に赤いフレームの眼鏡。着崩したカフェの制服と無精髭のおかげで、どこからどう見てもだらしない印象の方が強い。

「おじさん、ですか」

「はーい、そうです。何か聞きたいことがあるって？」

ミサネは一歩その場を下がった。相手の身長が高すぎて、顔を見上げるのが大変なのだ。この苦労は身長の低い者にしかわかるまい。

「ちょっとお伺いしたいのですが。ハルヤさんは最近、よくここへ来ていますよね。どんなお話をされているんですか？」

「えー、色々？」

『おじさん』の顔色は変わらない。眼鏡の奥で笑う目は、真摯さからは程遠い――大人特有の複雑な色に溢れていた。

これは手強い。ミサネは即座に直感する。

「あ、おじさんからも聞きたいことあるんだけどさ。このぐらいの背の男の子、見なかった？」

男が手で示した高さはミサネの身長よりも十センチほど低い位置。恐らくは小学校中学年程度と言ったところか。

「小学生、ですか？」

「うーん、そうではないんだけど年齢はそのくらい。時間になっても戻ってこなくてさ」

「見ていませんね。その男の子が何か？」
「あ、いや。知らないならいいんだ。それじゃ、おじさんは仕事に戻ろうかなー！」
ひらひらと手を振って去って行ってしまう男を見送る。あれは間違いなく曲者だ。花壇荒らしに関わりがあるのかないのか、それすらも予測させてくれなかった。
「どうでしたか？」
「……今、あの人の心を読んでみようとしたんだけど」
ナナシも似たような感想を抱いたようだ。珍しく神妙な顔つきで、首をひねっている。
「読めなかったんだよね。……どうしてだろう。俺が解析するのは見える数値であって、ビットフォンのデータとかじゃないのにな」
「そうですか……謎ですね」
ますます怪しさが募るばかりだが、今はまだ情報が足りない。
戻って来たロッカに礼を言い、ミサネとナナシは店を出た。
先程よりも人影が増えた気がするのは、夕暮れ時に差し掛かったせいだろう。太陽の光が少しずつ弱まる中、人々は足早に通りを行き交っている。
「今日はそろそろ引き上げましょうか」
「そうだね。ナツカゲ君たちと合流して帰ろ！」
まだまだ夏休みは続く。恐らくナツカゲとミウミは明日も付き合ってくれるだろう。そう確信が持てるほどの関係を、短期間で築いてしまった。
別に、自分の友達を作ろうと思ったわけではなかったのに。
とにかくさっさと事件を解決して、ナナシの友達作りを再開しよう。決意も新たに、ミサネは夕日の中へ踏み出した。

「ふにゃ～……にゃむにゃむ……むううう……」
「わあ。これ、寝言(ねごと)かな？」
「寝言だ。起こすか」
　翌朝。午前中から気温が一気に上昇(じょうしょう)する中、ガーデン前で花壇荒らし事件調査班は落ち合った。
　木陰(こかげ)のベンチには水のペットボトルを持ったナツカゲと、その隣でにゃむにゃむと寝息(ねいき)を立てるミウミの姿。まだ時間が早いからか、周辺の人影はまばらだ。
「ふにゃ……ん？　あららら？　ナナシさんにミサネちゃん！　おっはよーですの！」
　起こす前に話し声で気が付いたのか、ミウミが目を開けた。勢いよく起き上がる様子を見ると、今日の体調は悪くなさそうだ。ミサネはぺこりと頭を下げる。
「おはようございます。今日もよろしくお願いします」
「はいですの！　あららら、私眠っておりましたのね！　しゃーくん、一人で花壇を見張っててくれたのです？」
「ああ。昨日に引き続き、花壇荒らしてるヤツはいないぜ。蟻(あり)を潰(つぶ)してる白髪(しらが)のガキは気になったけど……今はあそこで犬をもみくちゃにしてるな」
　ナツカゲの視線を追うと、日ざらしの花壇前にしゃがみこむ少年が一人。
　更にポメラニアンが一匹(ぴき)。頭から紙袋(かみぶくろ)をかぶった、多分少女っぽい人物が一人。
　――なんだあれは。どういう組み合わせなのだ。
「おらおら～」
「やっ、やめろ！！！　わしわしするな！！！」
「なるほど、これが……わしわし!!」

どこから突っ込んでいいかわからないほど様子がおかしい。ドラマの撮影と言ってもらった方が納得できるのだが、生憎と周りにはカメラもない。いっそ夏の幻覚ということにしてしまうのはどうか。
現実逃避しかけた思考を引き戻して、ミサネは改めて奇妙な集団を観察する。
「……あの紙袋をかぶった人と、人語を喋る犬は？」
「さあ」
「ねぇ、もしかしてあの男の子って、昨日カフェのおじさんが探してた子じゃない？」
変人に分類されるだけあって、ナナシは紙袋にも犬にもさして反応していない。白髪の少年を見て得たりとばかりに頷いている。
「確かに、この辺りにはあまり子どもがいないと言っていましたね。年齢や身長も条件に合いそうですが」
「昨日はおじさんから全然話が聞けなかったからさ。あの子を連れてったら、おじさんともう少し話ができるんじゃないかな？」
あの子どもが彼の探し人かは不明だが、確かに試してみてもいいかもしれない。相手の要求を叶えることでこちらの要求を通す。交渉の基本だ。
「わかりました。では、ナツカゲさんにあの子を捕まえてもらいましょう」
「……何で俺なんだ？」
「この中で一番力がありそうなので」
「犯罪スレスレな気がすんだけど」
「ナツカゲさんならきっと穏便に事を運んでくれるはずです」
交渉の基本は、押して押して押しまくる。そしてたまに引く。口調はきつくとも案外勢いに弱いナツカゲは、ミサネに押し切られた顔で頷いた。
「わかったよ。その代わりお前らも手伝えよ」

ガーデンの中では、少年がまだ犬をもみくちゃにしていた。犬は嫌そうに叫んでいるのだが、手が緩む気配はない。紙袋の少女もまだそこにいる。
　犬と少女は非常に気に掛かるのだが、今のターゲットは少年一人だ。ミサネたちは頷きあって、ガーデンの中へと進入する。
　声をかけるのはナナシの役目だ。さりげなく四人で少年を囲み、タイミングを見計らって第一声。
「ねぇ、君。ちょっといいかな？」
「はぁ？」
　少年の手が止まる。その瞬間を狙っていたのだろう、ポメラニアンがカッとつぶらな目を見開いた。
「いっ、今だ！！！　この好機を逃すな小娘‼」
「あいあいさー！」
　ドルルルルと派手なエンジン音が鳴り響いた。
　紙袋の少女がさっと犬を抱き上げる。一瞬の急加速。踏み抜かれた地面に火花が散り、空気が渦を巻く。速い、速すぎる。まるでエンジンが付いているかのような——いや、恐らく本当に付いている。
「ジェットエンジン⁇」
「見てはいけません。ナナシさん、あちらは放っておきましょう」
「でもエンジン付いてたよね、あの子。絶対付いてたよね？　あの加速おかしいしエンジン音したもんね、すごくない⁉」
　興奮してまくしたてるナナシの脛を、白髪の少年が鋭く蹴り上げた。
「あいったあ！」

「くっそ、逃げられたじゃんか。謝れよ。土下座ね、土下座」
「えっ、ごめんね？　それじゃあ……」
「ナナシさん、本当にしようとしないで下さい」
素直に地面へひざまずこうとしたナナシを止めて、ミサネは少年を見下ろした。
身長はハルヤより少し小さいぐらい。白髪の隙間から覗く瞳は子どもにしては生気がなく、世の中を斜に構えて眺める素振りが感じられた。
「少し同行を願いたいのですが、よろしいですか？」
「はぁ？　何で」
どうやら、扱いやすいタイプではなさそうだ。
「貴方を探している人がいます」
「あー、オッサンか。チッ。まぁ、別に行ってやってもいーよ。僕様をオッサンのところまで運んでくれたらね」
どうも別の意味で扱いにくいタイプな気がするが、ここは大人しく従っておくべきだろう。ミサネはすでにイライラし始めたナツカゲに呼びかける。
「ナツカゲさん、頼みます」
「何だよ、捕まえるんじゃなくて……おんぶしてけってことか？」
「はぁ？　おんぶとかこっちも疲れんじゃん。肩車に決まってるでしょ」
「こんのクソガキ……！」
「しゃーくん、スマイルスマイル！　ラブアンドピース！　ですの！」
ミウミの懸命な取りなしが功を奏したのか、ナツカゲは苦虫を噛み潰した顔でその場にひざまずく。その肩へ当然のようによじのぼった少年が一言。
「うっわ、安定感ねーな」
全力で喚きかけるナツカゲをなだめつつ、全員揃ってカフェへと向かう。

これで少年が『おじさん』の知り合いでなかったら、とんだ肩すかしだ。進展があることを祈ろう。

「あーっ、キライ君！　も～、どこ行ってたの」

「僕様がどこ行こうが勝手だろ」

キライと呼ばれた少年が、尊大にふんぞり返る。その前で、カフェ店主の『おじさん』は朝から疲れ果てたように背を丸めた。

「いや、話し合いの時にはちゃんと言ってって……まぁいいや。君たちが連れてきてくれたんだ？　わざわざありがとう」

こちらに向ける営業スマイルを忘れないのは、さすがプロといったところか。

何はともあれ、二人が知り合いでよかった。ナツカゲが苦労した甲斐もあったというものだ。

開店したてのカフェには、まだ客の姿がなかった。店員も『おじさん』とロッカだけだ。夏休みにこれだけ暇では経営に差し障りがあるのではと心配になるが、話をするには好都合である。

「お礼と言ってはなんですが、少しだけお話を伺ってもよろしいですか？」

「えっ、僕とぉ⁉」

自分からお礼を要求する図々しさは百も承知だ。ミサネの申し出に、男はすっとんきょうな声を上げて頭を掻く。その仕草はあまりに隙だらけだ。

「うーん、わかったよ……お客さんもいないし、少しだけならね」

「ありがとうございます。では」

ナナシの背を押して、ミサネは下がる。ナツカゲとミウミも、店の入り口脇に待機中。

会話はナナシの担当だ。頑張ってもらおう。

「やっぱり俺なんだ⁉　えーっとそれじゃ……ハルヤ君とおじさんは仲がいいんですか？」

「ハ、ハルヤ君？　お隣の花屋のハルヤ君だよね。彼は自分の家の手伝いで忙しそうだから、うちの店に頻繁に来ることはあんまりないよ。ここに店を開いた時に挨拶をして……それからたま

に、お話をしたりする仲かな」
「どんな話を？」
「ガーデンの花壇が荒らされていること……とかかな。ハルヤ君、真剣に悩んでたみたいだったなぁ」
「じゃあ、花壇荒らしのことは知ってるんですね」
「まぁ、ハルヤ君から聞いた話ぐらいはね。僕自身、店にいることの方が多いから」
「そうですか。他にはどんな話を？」
「えーと……ああ、モロクさんと一昨日も話をしたって言ってたかな」
　さりげない会話の中に混ざる違和感。ミサネが思わずナナシを見ると、すでに切り込む姿勢はできていた。言葉の剣がまっすぐに突き出される。
「でも、ハルヤ君はモロクさんと話したことを一度しか覚えてなかったんです」
「え？」
「だから、ハルヤ君からその情報を得ることはできないはずなんですけど」
「……あー。ええとね……」
　困り顔でがしがしと頭を掻く男の横で、少年が呆れかえった息を吐く。
「なーにべらべら喋ってんの、オッサン。自分で言ったことすら記憶してねーの？　バカじゃん」
「でもさ、キライ君……」
「バカのくせに話に付き合うからこうなんだって。どうすんだよ、これ」
　緊迫していく空気を故意に読まなかったのか、それとも善意が過ぎるのか。ナナシはキライに向かって慌てて手を伸ばした。
「その人に近付いちゃ危ないよ！　こっちに来て！」
「あ？　バカが僕様に命令すんじゃねーよ」

バチン、と派手な静電気の起きたような音が辺りに響き渡る。
「痛っ……」
「ナナシさん！」
　目には見えなかったが、ミサネは直感的に理解する。今のはキライの仕業だ。
　子どもの見た目に騙されてはならない。恐らくは彼も――。
「今、ビットフォンに直接干渉しましたね。貴方もハッカーですか」
「僕様はナスガ・キライでーす」
「えっ、フルネームで言っちゃうのぉ!?　えーっと……ヤタノ・コトラ」
「お二人とも、あのノミヤとかいう人のお仲間と考えてよろしいですね」
「あん？　別にそんなんじゃねーよ。一緒にやれって言われたからやってるだけだし。あんなクソ頭悪いリーダーの言うこと聞いてらんないけど」
「キライ君、もう少し役割を考えて行動を……」
「バカの真似なんて僕様にさせる方がおかしいし。いーんだよ、何言ったってバレないバレない」
　年齢は親子ほどに違うが、どうやら振り回されているのはコトラの方だ。キライは機関銃のようにリーダーが如何にバカであるかを力説している。
　この状況においてどんな行動を取るのが最適解であるか、ミサネは迷った。大人を呼ぶか。しかし相手は他人のビットフォンに干渉し、思考を操ることすらできるハッカーだ。下手に被害を広げでもしたらどうする。
　焦りが視野を縮めたのか、近付く人影に対して反応が遅れた。
　コトラの隣に立った少年は、昨日からよく言葉を交わした相手だ。
「ハルヤさん……」

「待って、雰囲気が違う……多分、近付くとウィルスに感染しちゃうよ！」
「へぇ、お前は賢いね。賢いやつは嫌いだからしね」
キライの冷え冷えとした言葉と共に、『何か』は放たれた。
微かに感じる頭痛と、身体をじわじわ侵食するような嫌な気配。目に見えないそれの感触には覚えがある。――ノミヤがばらまいていたウィルスだ。
「もう操んの飽きたからさ、これでオワリにしとこーぜ。お前はさっさと花壇全部ぐちゃぐちゃにしてこいよ」
与えられた命令に頷いて、ハルヤが店の外へ走り出す。
「待て！」
「ダメです、ナツカゲさん！　今動くとウィルスに感染します！」
「クソッ！　どうしろってんだよ……！」
怯えるミウミの手を掴んだナツカゲが、苛立ちも露わに吼える。
対照的に、キライの反応は薄かった。
「これで仕事はオワリ。オッサン、運んで」
「えっ、ええ……おんぶでいいかい？」
「肩車だよ、当然だろ。よっと」
渋々しゃがんだコトラの肩によじのぼったキライは、光のない瞳でこちらを見下ろした。
玩具に飽きた子どものような目。彼はウィルスをばらまくことにも、罪悪感など覚えていないのだろう。
「そんじゃーね、バカども」
「あ、それじゃ……」
ミサネたちの脇をすり抜け、コトラとキライは外へ出て行く。店はロッカに任せるつもりか。
大人として無責任すぎないか。いや、その前に洗いざらい知っていることを吐け。

色々と言いたいことが胸の内に渦巻くが、深呼吸をして堪える。
そうだ。まずは――ハルヤを追いかけなければ。
「ナナシさん」
「うん。待っててね、今ウィルスを解除する」
そう言ったきり、ナナシは立ちすくんだまま沈黙してしまう。恐らくは駆除プログラムを展開し、凄まじい勢いでウィルスを無力化しているのだろう。
息の詰まるような緊張はほんの十数秒間。不意にナナシが身動ぎした時、周囲を取り巻く空気が一変した。
「……ナナシさん？」
「ん。大丈夫、駆除できたよ。よかったぁ……」
「ホッとしてる暇なんてねーぞ。早くあのハルヤってガキを追わねーと！」
「そう！　急がなきゃ！　なんだけど！　……ごめん、体力が……へへ」
ウィルス解除に想像以上の気力を使ったのだろう。緊張から解放されたナナシは、ふらふらとその場にしゃがみこんだ。明らかに青ざめた顔色を見て、さすがのナツカゲも眉をひそめる。
「しょうがねーな。先に行ってるぞ！」
「あれま！　私も行きますです、しゃーくん！」
「お前はナナシたちと一緒に来いって！」
「行きますですったら行きますです！」
ナツカゲとミウミは言い争いながら転がるようにして店を出て行く。開いたドアから夏の熱がぶわっと入り込み、店内の空気を乱して溶け消える。
まだ、事件は終わっていない。あと少し。あと少しなのだ。
「……立てますか、ナナシさん」
「んん」
「私が引っ張っていきます。ほら、立ってください」

腕を掴んでもナナシが立つ気配はない。ミサネは一つ息を吐くと、心を決めた。身を屈め、両手を開いて、力加減はそこそこに。
　ばちん。
「⁉」
　頬を手の平に挟まれたまま、ナナシは目を丸くする。
「？？？」
「もう一発欲しいですか？」
「下さい！」
「ならば走って下さい。目的地は花壇。目的はハルヤさんの救出です」
「はぁい！」
　今までの疲れはどこへやら、飛び上がったナナシが一目散に店を出て行く。ようやくこちらに気づいたロッカに頭を下げて、ミサネも後を追った。
　結局ハッカーは取り逃がしてしまった。こうなったら何としてもハルヤだけは助けなければならない。
――何故？　答えは決まっている。
　あの少年は、ナナシの友達候補だからだ。
　幾度も足が止まりかけるナナシを叱咤し、腕を掴んで引きずりながら、ガーデンまでの短い距離を移動する。
　ようやく現場へ辿り着いた時、そこではすでに状況が動いていた。
「うわ、軽ッ。綿菓子かよ」
　不良じみた柄の悪い第一声を聞きながら、ミサネは手早く状況を確認する。
　息も絶え絶えの状態で地面に座り込むナナシ。驚いて立ち尽くすミウミとナツカゲ。

――そして花壇の手前に倒（たお）れて目を回しているハルヤと、それを見下ろす赤い髪の少年。
「アキタカ、さん」
名を呟くと、相手は鷹（たか）のように鋭い視線をこちらへ送って来た。
事情はわからない。しかし、彼がハルヤを止めてくれたことだけは確かだった。
「えっと……ありがとうございます」
「何が？」
「ハルヤさんを止めてくださったのでは？」
「ハルヤってコイツのことか。止めるっつーか、怪しいヤツがいたらぶん投げといてくれって頼まれただけだぜ。代わりにここで昼寝（ひるね）しててもいいからって」
　思わずナツカゲへ視線を送ると、目を逸（そ）らされてしまった。やはり彼の仕業か。それにしても、よく頭の回ることだ。おかげで窮地（きゅうち）を救われてしまった。
「う、うう……あれ？　僕、なんでこんなところに？」
「ハ、ハルヤくひゅぇん……だ、大丈夫？」
「えっ、あの、ナナシさんの方が大丈夫じゃなさそうなんですけど……えーと、僕は少し目が回って、身体が痛い気がするだけです」
　強い衝撃を受けたことで、正気に戻ったのだろう。ユキナガの時と同じだ。この状態なら、ハルヤが無作為（むさくい）にウィルスをばらまくこともない。
「そっかぁ、ハルヤ君が無事でよかったよ……！　もう大丈夫。これで、花壇が荒れる心配もなくなるね！」
「えっ？　えっと……犯人、見つかったんですか？」
「あっ。え、えっと」
　こういうところがナナシは案外抜（ぬ）けている。慌てふためくナナシに代わって、ミサネは口を挟んだ。
「先程捕まり、連行されましたよ。ハルヤさんは犯人に襲われて気を失っていたんです」

「そうなんですか？　僕、ここへ来るまでの記憶も曖昧なんですけど……」
「頭部に強い衝撃を受けたようですから、記憶が一部飛んでしまったのでしょう」
「そうなんですか？」
「そ、そうなんです」
「そ、そっか……うん……ご、ご迷惑をおかけしました！」
　押し勝った。ミサネは内心で拳を握る。
　嘘を吐いたことは申し訳ないが、自分が犯人だと知ればハルヤはきっと傷付く。知らないままでいいのだ。実際、真実を知る者はハッカーと自分たちだけなのだから。
「これにて一件落着！　ですの！」
　ミウミの晴れやかな声が響き渡る。そうだ。ハッカーは逃がし、その目的もわからないままだが、とにもかくにも花壇荒らし事件は解決できた。仲間と共に、被害を最小限に防げたのだ。
　安堵と、少しばかりの誇らしさを胸に抱いてミサネは息を吐いた。
　さあ。ナナシの友達作りを再開しようではないか。

「見て見てミサネちゃん、ハルヤ君が！　フレンドリストに！」
「さっきから三回ほど見ています」
「あっ、そうだった。ついうっかり興奮しちゃって……アキタカ君に断わられちゃったのは残念だったなぁ。今度会った時は友達になれるかな？」
　揺れるバスの中で、ナナシは嬉しそうにフレンドリストを眺めている。にこにこ、にこにこ。ひたすらに笑いっぱなしだ。その様子をこっそり覗き見るのはなかなか面白かった。
　ココアリーからの帰宅手段は結局、バスを選択した。疲労がピークに達したナナシを歩かせるのは酷だと思ったのだが、どうやら正解だったようだ。座っている間にずいぶん体力が回復したらしく、青ざめていた顔色も元に戻ってはしゃぎっ放しである。

「帰ったらミカドお兄さんにも色々報告しなきゃね。ハッカーの人たちの名前もわかったし、うまく居場所を探し出せるといいんだけど」
「ノミヤという人も合わせて、わかっているだけで三人。他に何人仲間がいるかはわかりませんが、誰があのどうしようもない人たちをとりまとめているのか気になりますね」
ビットフォンの乗っ取りに危険なウィルスの作成、拡散。彼らが犯した犯罪は多大な件数に上るはずなのに、証拠がないばかりに捕獲が叶わない。
――恐らくはまた彼らと遭遇することになる。そんな予感がひしひしとしていた。
決して安全とは言えない状況の中、ハッカー集団を追いかけることは間違っていないのか。ミカドに全てを預けて引きこもっていた方が良いのではないか。そんな考えも、ちらりと頭の隅を掠めたりする。
「ねぇ、ミサネちゃん。ミサネちゃんって八年後から来たんだよね？」
「？　はい、そうですが」
「じゃあこの時代には八年前のミサネちゃん……ロリミサネちゃんがいるんだよね⁉」
考えごとが一瞬で吹っ飛んでいった。少し回復したと思ったら、この発言か。
「言っておきますが、私は幼い頃、ここからは遠い場所に住んでいたので会えませんよ」
「ああ、そうなんだぁ……」
「基本的に過去の人物や世界に干渉し、既成の事実と異なった行動へと誘導することは禁じられています。タイムマシンの開発者が、『過去を大きく変えることは許されない』と発言したのです」
「やっぱり問題があるから？」
「はい。過去の自分と対峙して干渉することは特に危険だそうです。言葉を交わすだけでも未来の自分を否定し、消滅させる可能性があるそうで」

過去の自分の行動が変われば、未来の自分がそこに存在しなくなる可能性が生まれる。地続きであったはずの未来が失われるかもしれないと、タイムマシンの開発者は説明した。

一匹の蝶の羽ばたきで、遠い異国に竜巻が生まれるように。何気ない小さな行動すらも、未来を殺す要因になり得るのだと。

「そっかぁ……じゃあ未来の俺にも会えないんだ」

「ナナシさんは今とあまり変わりませんよ」

「えっ。ミサネちゃんは未来の俺を知ってるの？　どんな感じ⁉　ワイルドマッチョな警察官になってたりする⁉」

「変わらないと言ったでしょう。良い人で、優しくて、若干気持ち悪いレベルの発言をします。見た目以外は今のナナシさんと同じです」

自身に対する評価が異様なほど低くて、自己犠牲精神が強いところも変わらない。そんなナナシの性質が、ミサネはたまらなく嫌だった。

（どうして、自分に優しくなれないの）

喉まで出かけた言葉を呑み込んで、胸の奥にしまいこむ。ナナシを責める権利など本当は持っていない。

これはただの我儘なのだ。

「とにかく明日から、また友達作りを頑張りましょう。ワイルドマッチョで友達の多い自分をイメージして頑張ってください」

「ラジャー！　でも、どうしてミサネちゃんは俺に友達を作らせようとするの？」

「……じきにわかります」

ナナシには変わってもらわなければならない。

友達をたくさん作って、多くのものを見て、様々な会話をしてもらわなければならない。

そうすればきっと必ず、望む未来に繋がるのだ。

（最悪の未来だけは回避する。……大丈夫。きっとできる）
　自分に言い聞かせながらミサネは目を伏せる。膝の上に乗せた両手はバスの振動と――拭いきれない不安のせいで、微かに震えていた。

「……で、今日の結果なんだけど」
「拠点と正体がバレた上、自ら名乗っただァ？　ヨタウスラトンカチヤローだなァ、テメーら」
　ノミヤが机を蹴りつける激しい音が響き渡る。しかしその場にいる者は誰一人、動じる様子を見せなかった。
「っつーかよォ、こんなおもしれーことできんのにやることショボすぎだろ。花壇荒らしだァ？　ふざけんなよ。最悪、人類滅亡できんだぜ？」
「そうだそうだ。ぜーんぶぶっ殺しちゃおうぜ」
　獰猛に笑うノミヤを煽るように、キライが声を揃える。
　リーダーのノミヤが過激派なおかげで、歯止め役は実質コトラが一人で担っている状態だ。キライももう一人の女も、コトラに協力してくれたことなど一度もない。
「それはダメ。あの人だって言ってたでしょ。ほら、キライ君。覚えてる？」
「勝手な行動はなるべく慎ーむ。ウィルスを無駄に拡散しなーい。人の命を奪うような行動はさせなーい」
「よくできました。ノミヤ君もキライ君も、決まりごとは守ろう？　おじさんたち、元々警察に捕まっちゃっても文句は言えない立場なんだから」
　ほとんど話を聞いていない顔で、ノミヤが口を挟んでくる。
「おい。俺、やり足りねェんだけど。次行っていいだろ？」

「それでは、私も同行しましょう」

赤い髪の女がにこりと笑って申し出る。お目付役のつもりだろうか。コトラにとってはそれでも、先行きが不安でしかない。

「拠点はこれからここになったから、あの人と直接報告ややり取りもできる。何かやらかした場合にはすぐ咎められるってこと、忘れないようにね」

「はっ、わかってるっての。テメェらはここでアイツの機嫌（きげん）でも取っておきな！」
部屋中から聞こえる機械稼働（かどう）音をかき消すように、馬鹿でかい笑い声が響く。
どうか面倒ごとが起こりませんように。無駄だと知りながらも、コトラは天に祈らずにはいられなかった。

幕間2

☆フレンド大増殖（ぞうしょく）作戦その2。
フレンドリスト登録件数の更（さら）なる増加を目指す。
フレンドの年齢（ねんれい）・性別・職業は問わず。
以下に簡易作戦記録を残す。

☆璃苑（リオン）　鹿（ロッカ）
十一歳（さい）女性。小学生。喫茶店（きっさてん）のウェイトレス。
まだ小学生だが、親戚（しんせき）のおじさんの店を手伝っているらしい。
夏休みや冬休みはいつも働いているとのこと。偉（えら）い。すごい。偉い。
上がり症（しょう）ですぐ緊張（きんちょう）し、失敗してしまう。
↓どうやら失敗する可能性を気にしすぎていたのが原因。
指摘（してき）しただけで改善が見られる。フレンド登録成功。
十一歳と思えないほどしっかりしている。偉い。すごい。偉い。見習いたい。

☆凪梳(ナスキ)　乃(チノ)

三十六歳女性。花屋店員。一児の母。
ハルヤの母。親子揃(そろ)って極度の方向音痴(おんち)。
花の配達にも支障(ししょう)があるようなので、方向音痴を治す方法をアドバイス。
実の息子(むすこ)にも「配達は止めておいた方がいい」と言われるほどの方向音痴。
配達に付き合ってみたが、既存(きそん)のアプリでは全く役に立たないレベルの方向音痴。
↓結論：改善は不可能。方向音痴に敗北。
努力を認められてフレンド登録に成功。方向音痴は強い。

☆蓮舎(ハスヤ)　麓(モロク)

二十二歳男性。庭師。無口。会話はほぼ改造アバター（名称(めいしょう)：ハピタン）頼(だよ)り。
ハピタンの音声変換(へんかん)アプリが故障したため修復を請(う)け負(お)うが、数日かかる見込(みこ)み。
その間、ハピタンの代理として会話代行を請け負う。
無事に務めを果たし、アプリの修復も成功。解決。

以下、まとまらない感想。

心が読めるのは便利だと思う。
無駄(むだ)なフィルターがかからない。相手の考えがダイレクトに伝わるから間違(まちが)いがない。
でもハルヤくんは、モロクさんのジェスチャーから思いを受け取りたいと言った。
不便なのに。読み間違えるかもしれないのに。
効率よりも大事にしたいことって何だろう。よくわからなかった。

☆楠瀬都

三十四歳女性。人形師。何か色々（伏せ字）なものが混入した人形を作成している。作成された人形は心を持っており、自律行動を行う。解析できない技術。
ミサトの口紅を探して工房の奥へ向かったところ、閉じ込められる。果てのない廊下、笑い声、血痕、手形、■■■■■（記録消去済み）。かくれんぼに満足したのか、解放される。精神状態に異常なし。安定。働きを認められ、フレンド登録成功。

追記：以前、ミサトは等身大の少女人形（ロボット？）に心を与えたらしい。
特徴はピンクの髪。足が非常に速い。どこかで聞いた覚えがあるような。

フレンド登録者は以上。
今後も作戦を続行すること。

第３章　ミライトカコト

「……空気が悪いですね」
「ミサネちゃん、しーっ！　ほら、見てる！　みんな見てるから！」
　夏休みだというのに、空は灰色でどんよりと重い。それだけでも気が滅入るのに、初めて踏み込んだこの街は天気よりも更に重苦しい雰囲気でいっぱいだ。
　薄汚れた街並み。壁いっぱいに描かれたスプレーの落書き。道の隅に固まる若者たちが時折、威嚇するように派手な笑い声を上げる。
「離れないようにね、ミサネちゃん。ブレイクパッセージは元々治安があんまり良くないけど、裏通りに行かなきゃ平気って聞いたのにな……」
「あからさまに見られていますね」
「うう。でもここにもまだ見ぬ友達候補がたくさんいるはずなんだ。頑張ろう！」
　ココアリーの花壇荒らし事件から三日。その間ナナシは一人で友達作りに奔走していたが、結果は芳しくない。フレンドリストに増えた名前は四名程度だったはずだ。
　見かねたミサネが声をかけ、また新しい場所へと足を運んでみた。ブレイクパッセージと呼ばれるこの地域は、ブルーサンストリートからそこそこ離れた距離にある若者の街だ。ライブハウ

スやゲームセンターなど若者向けの施設が立ち並び、道行く顔を見ていても圧倒的に若年層が多い。

　同年代の友人を作るにはうってつけの環境──と思いきや、一歩足を踏み入れただけでひしひしと感じる薄暗い気配。思わず早足で通り抜けたくなる雰囲気が、この街の常態なのだろうか。

「とりあえず、用心しながら行きましょう。何かあれば撤収ということで」

「そうだね。もし何かあったら俺を置いてミサネちゃんは先に逃げて！」

「しませんよ。ハッカーが出て来る可能性もありますし」

「ああ、そっか。早く捕まるといいんだけどね。ミカドお兄さんも忙しいみたいだし」

　管理プログラムへのハッキング対応で、ミカドは家へ戻らない日が続いている。青年の穏やかな笑顔を思い出し、ミサネは顔を曇らせた。

「……私の知る未来では、管理プログラムの作成者はミカドさんではないのです」

「えっ、そうなの？」

「政府との共同開発で作成されたもので、ミカドさんの名前はどこにも出て来ません」

　未来が違う。すなわち、彼が異変に関わっている確率は非常に高いと言えるのだが。

「めっちゃ怪しいじゃん！　だからミサネちゃん、ミカドお兄さんを警戒してたんだ。でも、確かにミステリアスで隠し事が多くて明らかに黒幕っぽい風貌と設定を兼ね備えてる人だけど、まだ確証はないんでしょ？　それにミカドお兄さんが怪しいなら、不確定な情報が多いミサネちゃんだって怪しまれちゃうよね」

　ミサネは思わず口をつぐむ。ナナシの言う通りだ。これだけ隠し事をしながら、自分のことを信用しろというのはあまりにも都合が良すぎる。

「大丈夫、周りの誰がミサネちゃんを疑っても俺はミサネちゃんを信じてるよ。今まで何度も助けてもらったし、心を読まなくてもミサネちゃんがいい人なのはわかるから」

にこにこと笑いつつ、ナナシは四角い箱としか言いようのない形をした黒塗りの建物の前で足を止めた。

「あ、ライブハウスってここだよね。アキタカ君いるかな？　ごめんくださーい！」

そう言えば、あの柄の悪い少年が住んでいるのはこのブレイクパッセージだったか。一直線に箱の中へ突っ込んでいったナナシの後を恐る恐る追うと、内部は思ったよりも広かった。

天井と壁は打ちっ放しの素っ気ないコンクリート。人影はステージ上にたったの二つ。ライブハウスのイメージからはずいぶん遠いようだ。

「アッキー！　おーい、アッキー！　ったく、いつまで寝てんだよ～」

「殴ったら倍返しで殴り返してくるっすからね。どうしたら起きるかな……」

一人は水色頭にヘアバンドをつけた快活そうな少年。もう一人は黄緑頭に黒いキャップをかぶった、少々気難しそうな少年だ。両者共に、ライブハウスという空間に驚くほどしっくりと馴染んでいる。

「今はここ、なんにもやってないっすよ」

「そうそう、休止中！」

「いや休止中って。ピックなくしただけじゃないっすか、早く新しいの買えばいいのに」

「アレじゃないとダメなんだって！　限定版だぞ！　アレが一番具合がいいの！」

水色頭の少年は大げさに地団駄を踏んでいる。

ピックと言えば。ミサネはふと、先日のココアリーの騒ぎを思い出す。確かアキタカも、花壇で『それ』を探していたはずだ。

「あの、もしかして皆さんアキタカさんのお友達ですか」

「おっ、アッキーの友達？　アッキーならここで寝てるけど、全然起きないんだよなぁ」

ステージへ近付いてみると、床に大の字になって寝こけている姿が目に入る。赤いツンツン頭と凶暴なプリントマスクを忘れるはずもない。安らかな寝息を立てているのはアキタカだ。

「なら俺が起こすよ～！　ちょっと待ってね、脳波に直接干渉するから」

ナナシがちょちょいと『目覚まし』を行う。何かしたようには見えなかったのだが、眠っていたアキタカは途端にものすごい勢いで跳ね起きた。

「……あれ？　クマは？」

「どんぐりを持った巨大なクマに襲われた？　よかった、それなら成功だね！」

察するところ、どうやら寝ているアキタカの脳波に干渉して違う情報を入れ込み、夢として刺激したらしい。一歩間違えればハッキングレベルの話だが、今はアキタカが起きたので良しとしておこう。

「ふあぁ……てか、なんでおまえらがここにいんだ？」

「友達を作りに来たんだ！　この人たちはアキタカ君の友達？」

「あー……めんどくせえ。お前ら、自分で自己紹介しろよ」

またごろりと横になりそうなアキタカを引っ張り上げて、緑髪の少年が会釈する。

「ども。エンリっす。ドラム叩いてるっす」

「俺、アスト！　んでな、えーっと……俺はベース担当！」

今度は水色頭の少年が挙手。バンドメンバーはこの三名だけなのだろうか。

「俺はナナシ！　こっちはミサネちゃんだよ。よろしく！」

「よろしくー！」

「ピックはまだ見つかってないんだ？　ココアリーでも探してたよね」

「あー。それな。そろそろ諦めろよ、アース」

愛称で呼ばれたアストは、思い切り頬を膨らませた。

「アレがなきゃダメなんだって。お守り的なやつだからモチベに関わるんだよー」

「でもこのまんまじゃいつまで経っても練習できないっすよ」

三人は顔を寄せ合い、ああだこうだと話し合っている。

これはチャンスだ。ミサネが目配せするより早く、ナナシはすっと会話へ踏み込んだ。

「そのピック探し、俺も手伝うよ！」

三人の視線がナナシへ集中する。よそ者の手助けにいい顔はしないか——と思いきや、アストの顔がぱあっと明るく輝いた。

「なになに、見ず知らずの俺に協力してくれんの⁉　すっげーいいやつですなー！」

「いやあ、悩みごと解決のプロがここにいるから！　ミサネちゃんって言うんですけどね！」

「……私に振るんですね。手がかりがないことにはどうしようもありません。落としたと思われる場所は大体探してきたのでしょう？　それで見つからなかったのであれば……」

「そうっすよね。犬とかいりゃ、におい辿ってもらうとかできるっすけどね……」

エンリの何気ない一言に、アキタカとアストの目が輝く。

——まずい。なんだか嫌な予感しかしない。

「それいいじゃん。犬探そうぜ、犬」

「よし！　犬探ししよ！！！」

本気か？

会話の飛躍っぷりにミサネは口を挟むタイミングを失った。訓練も受けていない犬が失せ物探しなどできるはずないとか、そんな道理は彼らに関係ないのだ。犬を探せばピックが見つかる。一足す一は二。太陽は東から昇って西へ沈む。そのぐらい当然の原理で。

「ミサネちゃん！　ミサネちゃん、落ち着いて！　理解したら負けだよ、とりあえずアスト君たちがやりたいことをやらせてあげよう」
「あ、はい……そうですね。すみません、あまりのことに混乱してしまいました」
「よし、じゃあ犬探そう！　俺、動物探すの結構得意だから!!」
「おー、よっしゃ。じゃあ俺がついていく。お前らここで練習しとけ」
アキタカが身軽に立ち上がり、ステージを飛び降りる。迷いのない足取りに、ミサネとナナシも慌てて後を追った。
「何か当てはあるのですか？」
「んー、うちのねーちゃんなら動物好きだし何か知ってンかもって」
「じゃあまずアキタカ君のお姉さんのところだね！」
留守番のエンリとアストはそれぞれ楽器を取り上げながら、こちらに手を振っている。
「アッキーのこと、よろしく頼むっす」
「悪いな、ありがと！　いってらっしゃーい！」
ではピックを探すために犬を探そう――その行動の支離滅裂さに混乱が蘇りかけて、ミサネは慌てて考えることをやめた。

「俺の足～っ！」
脛を蹴られたナナシが悶絶し、呻きながらその場にうずくまる。
これはまずい。ミサネは慌ててナナシに駆け寄った。
「ナナシさん！」
「ううっ、ミサネちゃん……俺、もうダメかも。ごめん……」
「何を言っているんですか。早く立ってください！」
周囲は薄暗く、表通りよりも更に荒廃した空気が漂っている。表通りですら治安が悪いと感じたが、ここ――バックストリートはその比ではない。間違ってもナナシやミサネのような、一見

して『一般人です』というタイプの人間が足を踏み入れてはならない場所だ。

ナナシがどうにか立ち上がると、脇で見ていたアキタカが呆れたような溜息を吐いた。

「あーあ、寝起きのリュウ兄に近付くなっつったろ。骨折れてねぇ？」

「だ、大丈夫……いひゃいけど！」

壁際では、右腕に派手な刺青を入れた半裸の男がのっそりと身を起こす。全身から滲み出る威圧感はともかく、顔立ちや雰囲気はアキタカとよく似ていた。寝ていた彼に不容易に近付いたナナシは、強烈なローキックを脛に受けたのだ。

「んだよ、うるせーな……あ？　んだ、アキか。後ろになんかいるな」

「お、俺ナナシでひゅ……アキタカ君のお兄さんでふか……」

「おう、リュウリだ。クジョウ・リュウリ」

バックストリートのヘッドを務めるという青年の眼光は異様なほどに鋭い。気後れする気持ちを奮い立たせ、ミサネは思い切って会話に踏み込む。

「リュウリさん、失礼いたします。私はミサネです。こちらで犬を見たという話を聞いたのですが、リュウリさんは見かけていませんか？」

「犬……？」

ここへ来る前、ハンバーガーショップで出会ったアキタカの姉・アズサから得た情報だ。ちなみにクジョウ家は六人兄弟で、皆揃って寝起きが悪いらしい。

「そういや、なんかいたな。若ぇ女と丸っこい犬がこの辺りうろうろしてて、危ねぇから追い返した。最近、ここらで変な遊びが流行っててな」

「変な遊び、とは……？」

「『ワンパンデッド』っつって、先に一発入れた方が勝ちってだけの馬鹿げたゲームだな。そのゲームで負けたやつは、みんな一発で意識ブッ飛ばされて病院送りになってんだ」

「一発で？　それは殴る人の強さに関係無く、ですか」
「ああ。どんなヤツが殴っても必ず意識がブッ飛ぶってのはちょっと妙だろ。どうもアプリがどうとか聞くんだが、俺だけじゃ手が回んなくてな。俺が知らない間にどうも好き放題やられてるみてぇで気に食わねぇ」
　筋力を増強するアプリは確かに作れないことはないが、確実に違法な存在だ。しかも相手を一撃で気絶させるほどの威力が出るとなると、危険性が高すぎる。
　ナナシも同様のことを考えていたのだろう。少し困った顔をしながら頷いている。
「内容的に違法なアプリかな……その辺りの取り締まりは厳しいけど、裏で出回っちゃうのもあるみたいですね」
「なんだ、そこらへん詳しいのか？」
「協力できるとは思いますよ！」
「そうか、そいつらとっ捕まえたら協力頼むわ。もしそれっぽいやつら見つけた時も、俺に連絡してくれ。そんじゃ、俺は寝る」
「えっ」
　コンクリートの床に横たわってから三秒。リュウリはすでに寝息を立て始めている。
「……結局、犬について詳しくは聞けませんでしたね」
　だが起こして聞き直すわけにもいかない。下手に起こせば、先程ナナシを仕留めた神速の蹴りが再び繰り出されるだろう。
　ミサネとナナシが肩を落としていると、近くにいた柄の悪い男たちが声をかけてきた。
「犬って、昨日だかこの辺歩いてた茶色いやつか。ポメラニアンみたいな」
「いや、違うだろ。シバじゃね？　尻尾巻いてたし」

リュウリの他にも目撃(もくげき)者はいるらしい。気を取り直して詳しい話を聞こうとした時、ミサネは背後に強い視線を感じた。
　小さな足音。荒(あら)げた鼻息。──この気配は。
「違う！　違うぞ貴様(きさま)らぁ！！！」
　振(ふ)り返(かえ)ればそこに、ふわっふわの茶色い毛玉がいた。つぶらな黒い瞳(ひとみ)。しまい忘れた舌。ピンと立った耳に、大きく巻いた尻尾。
　どこからどう見ても、ただの犬だ。
「……えっと、俺はナナシ！　君は犬かな？」
「俺はポテテ。ポメでもシバでもねぇ……両方だッ!!」
「あっ、雑種か～！」
「ミックスと言え!!」
　毛玉が飛(と)び跳(は)ねて怒鳴(どな)る。あろうことか、この犬は喋(しゃべ)るし人の言葉を完全に理解するらしい。モロクが持っていたアバターのハピタンとも違い、これは本物の生身なようだ。
「よっと」
　喋る犬を不思議とも何とも思っていない手付きで、アキタカがポテテを後ろから抱(だ)き上(あ)げる。犬は空中で短い足をばたばたと動かしたが、当然抗(あらが)えるはずもなく。
「おいコラァ！　何してんだ!!」
「捕まえたぞ」
「では、縛(しば)りましょう。そのまま押(お)さえておいてください」
　疑問は一旦(いったん)脇へ置いて、持って来た拘束(こうそく)用の縄(なわ)で犬をぐるぐる巻きにする。犬を拘束するのは初めてだが、とりあえずこれで逃げられまい。再び地面へ下ろされた犬を見て、ミサネはこれでよしと頷いた。
「んじゃ、アースんところに戻るか」

「レッツゴー！　あ、お兄さんたちありがとうございました！」
アキタカが歩き出すと、縄に繋がれた犬も引っ張られる形になる。短い足が速度に追いつかず、半ば引きずられているような格好だ。
「おい、引っ張るなっ……痛い！　痛い!!　優しく！　優しく扱って下さい!!」
ポテテの抗議が響く中、ミサネたちはバックストリートを出て表通りへ向かう。犬の散歩にしては不自然な見た目なのだが構うまい。通行人もあまり気にしていないようだ。
「この縄を解けぇ！　話し合いを要求するぅ！」
「うるせーな。口も縛るか」
「ヒッ!?」
「大人しくしていれば悪いようにはしません。……貴方と女の子が一緒にいたという話を聞きましたが、同行者の方は？」
ポテテはうろうろと視線を彷徨わせてから、わん、と下手な鳴き声を上げた。
「……迷子になった」
「なるほど……飼い主さんからはぐれてしまったのですね」
「飼い主じゃねえ、俺は野良だ！　あと迷子になったのは俺じゃなくてあいつだ!!」
勢いで拉致してきてしまったが、野良でよかった。ミサネはこっそりと内心で胸を撫で下ろす。
「実は、ポテテさんに探し物をお願いしたいと思っているのです。それでこのような手段を取らせてもらいました」
「そんなら話は早ぇ。おい、交換条件だ。俺が失せ物探しを請け負う代わりに、嬢ちゃんたちがあいつを探してくれ」
「失せ物は探せても、同行者の匂いは追えない？」

「ニオイを残さず移動するやつなんだよ。だから困ってたんだ」

　どういうことだ。瞬間移動でもするのか。

　思わずあらゆる可能性を脳内で検索したミサネの横で、足を止めずにナナシが笑う。

「探してるのって、ココアリーで一緒にいた紙袋かぶった子だよね？　ローラースケートっぽい部分についてたジェットエンジンで移動してたから、匂いが残らないのかな」

「その通りだ!!　あいつ、うっかり俺を抱え忘れて移動しやがって！」

「わかりました。では、私たちがその子の捜索を手伝います。その代わり、ポテテさんは私たちが探しているピックの捜索をお願いします」

「よっしゃ！　それでいいぜ！　だがアイツを探すのを優先してくれ、一人にすると何をするかわからねーやつだからな！」

　アキタカの引っ張りぐあいに慣れてきたのだろうか。胴体を縄でぐるぐる巻きにされたポテテは、四足歩行でうまいこと走り始めている。

　喋る点さえ除けば、やはりどこからどう見ても犬だ。

「……これ、どういう仕組みなんでしょう」

「うーん。モロクさんのアバターと同じ音声変換機能っぽいけど、犬なのに思考が人間並ってことだよね。ちゃんと人の言語を使って考えてるみたいだし。小さいけど、犬専用のビットフォンまでつけてるなんてすごいなぁ」

　話しているうちに、コンビニエンスストアの前を通りがかる。ふと時計を見れば、すでに時刻は十二時を回っていた。休憩を兼ねて昼食を摂った方がいいかもしれない。

「アキタカさん、コンビニへ寄っていっていいですか。お昼ご飯を買ってきたいのです」

「お。んじゃ俺のも頼む」

「俺のも!!」

「ポテテさんはドッグフード……でいいんですよね。わかりました。何か探してきます」

ピック探しで犬を使うと聞いた時には正気を疑ったが、事実は小説よりも奇なり。
この意思疎通のできる奇妙な犬ならば、失せ物を探し当ててくれるかもしれない。昼食も少し奮発して、高級犬用ジャーキーとか美味しいものを買ってやってもいいだろう。
短い足をきちんと揃えてお座りしたポテテを眺め、ミサネは頷いた。ここは犬相手に恩を売っておくべきだ。

「ンだテメー、その目は。気に食わねーな」
「俺はお前がそこにいるだけで気に食わねーよ」
出会って早々、一触即発の睨み合い勃発。前にも見た光景だ。どうやらアキタカとナツカゲは、ほとほと相性が悪いらしい。
「しゃーくん、めっ！」
「アキタカさん、落ち着いて下さい。ナツカゲさんは私たちの友人です」
ミウミとミサネ、ナナシは二人の険悪さに慣れているものの、初めて遭遇したハルヤはオロオロしっぱなしだ。その足下では、ポテテが暇そうに後ろ足で耳を掻いている。
　昼下がりのブレイクパッセージには人影がほとんどない。誰もが暑さに負けて屋内へ引っ込んでいるのだろう。
　そんな中、ハルヤはブレイクパッセージへ花の配達に来たらしい。治安の悪さを心配して同行していたナツカゲとミウミも含め、知り合いと偶然出会えたことは嬉しいが――ケンカになるのはいただけない。
「しゃーくん、ほら！　ハルくんも困ってます」
「……ちっ。わかったよ」
「何睨んでんだ、コラ」

「は？　睨んでねぇよ。自意識過剰か」

放っておくといつまででもぶつかり合いが続きそうだ。ミサネは思い切って強引に会話へ割り込んだ。

「あの。つかぬことをお伺いしますが、ナツカゲさんたちは紙袋をかぶった女の子を見ていませんか？」

ナツカゲが答えるより早く、ミウミとハルヤがほぼ同時に口を開く。

「おお？　見ましたん！　ピンク髪の女の子でしたね？」

「不思議な形状のローラースケートを履いていましたけど」

「そいつだ！　アイラだ!!」

ポテテがぼよんと飛び上がる。途端に、ポテテ初見の三人が目を丸くした。

「しゃべっ……」

「たな」

「なんと!!　しゃべるわんわんとは！」

「わんわんではなぁい！　ポテテだ!!」

「どうなってるんです？　犬……なんですよね」

「しゃべるわんわん、ステキですの！　もっとおしゃべりしましま？」

ハルヤとミウミの手であっという間にもみくちゃにされるポテテを横目に、ミサネはナツカゲに改めて問いかける。

「その紙袋の少女を探しているのですが、どこへ行ったかわかりますか？」

「あの変なのなら、向こうのゲーセンの方に走ってくのを見たぜ。またハッカー絡みか」

「いえ、今度は違う……と思うのですが。今回のこれは、ナナシさんの友達作り作戦の一環です」

P....ON!

その一言でナツカゲは納得したようだった。どんな奇行も『友達作り』で説明がつく。手間が省けるのはいいことだ。
「じゃあゲーセンに行ってみようか、ミサネちゃん。ハルヤ君たちはまだ配達の続き？」
「いえ、もう終わって手が空いているので……よかったら何かお手伝いしましょうか」
「いいの？　今色々あって、えーっと……このポテテさんの飼い主？　保護者？　って人を探してるんだけど」
「では、私たちも飼い主さん探しを手伝います！　ね、しゃーくん！」
「いいけど。こいつも一緒か？」
「んだよ。文句あんのか？」
ナツカゲがちらとアキタカを見ただけで、両者の間に再び火花が散った。
「ストップ、ストップ！　ケンカはいけないよ。一旦距離を保とう！　ね！」
ミウミに腕を取られてナツカゲは最後尾へ。アキタカはポテテと共に最前列へと配置される。総勢六名と一匹の大所帯、こうすればそこそこに衝突を回避できるだろう。
「それじゃ、突入～！」
すぐ傍で派手な音を鳴らしているゲームセンターへと、全員で足を踏み入れる。
ペットの連れ込みは店員から咎められるかと思いきや、何やら店内が騒がしく、こちらへ注目する者は誰もいない。
店の一角には人だかりができ、興奮した気配が満ちている。明らかに揉め事が起きている気配だ。
「……見てみますか？」
「行くしかないんじゃないかな！　でも気を付けて。危なくなったらすぐ逃げよう！」
ぞろぞろと人だかりへ近付くと、若者が作った輪の中央に人影が見えた。
「せい、やーっ！」

「ぐええっ！」
突き出された拳が柄の悪い男の顎を抉る。重量級の一撃。パンチ一発で男は吹っ飛び、床に倒れて動きを止めた。
お見事、というしかない。しかも殴った相手は小柄な少女だ。
「こいつ、よくも！」
「絡んできたのはそちらです！　アイラは何もしておりません！」
奇妙な形のローラースケート。青いチェックのシャツとスカート。そして頭から被った紙袋。目立つ相手でよかった、彼女がポテテの探し人に間違いあるまい。
「うるせえ、こいつ！　でやあああっ！」
「はっ！　ほっ！」
「クソッ、ちょこまかと！」
戦闘不能、一名。少女は残り二名を相手に孤軍奮闘中である。
「見つけたぞ！　おい、アイラァ!!」
ポテテの大声は喧噪にかき消されてしまう。今にも飛び出していきそうな犬の首根っこを、アキタカが摑んで引き留めた。
「終わるまで待っとけよ。どうせすぐに片付くだろ」
いかにも不良といった風貌の若者たちが繰り出す渾身のパンチは、少女に一発たりとも当たらない。ローラースケートの足取りは変幻自在、紙袋で視界が悪いはずなのに背後までも見えているかのごとく攻撃を華麗にかわしまくる。少女が拳を避けるたびに、ギャラリーから大きな歓声が上がった。
「クソッ……！　なんで当たらねぇんだ!?　一体どんな動体視力してんだよ！」
「しかたねえ、撤退だ！　覚えてろよてめえ!!」

やられ役の代名詞的な台詞を残し、不利を悟った男たちは仲間を担いで逃げていく。勝者となった少女には、観客の惜しみない拍手が降り注いだ。
小柄な少女が複数名の不良を手玉に取る様は、確かに爽快だった。しかしあんな細腕の少女が、パンチだけで大の男を気絶させてしまうとは凄まじい。少女の動きに型はなく、武道を嗜んでいるようにも見えなかったが。
「……今のが、アキタカさんのお兄さんが仰ってたワンパンデッド、というものでしょうか」
「一発で相手の意識を飛ばしてたし、そうかもしれないね。アプリのこと、聞いてみる？」
「はい。リュウリさんに言われていますし。……それにもしかすると、またハッカー絡みかもしれません」
アプリで筋力を増強するとなれば、ビットフォンに介入して脳波をいじっている以外の方法を考えつかない。本来ビットフォンは管理プログラムの制御下にあり、介入不可能とされているが例外はある。これまでに二度も、ハッカーの関与を確認したではないか。
「とりあえず、アプリを使ってるかどうかだけでも確認しておこうか」
「そうですね。話の通じる相手であればよいのですが」
「大丈夫大丈夫！　えーっと、アイラさん？」
ぱたぱたと手を払っていた少女は、ナナシの呼びかけに応じて素早くターンした。
「はい！　アイラに何かご用。ですか？」
「ちょっと聞きたいことがあるんだけど。どうしてさっきの人たちに絡まれてたのかな」
「ええっと。俗に言う、喧嘩を売られたので買った。というやつですね」
「あれ、見てたら男の人を一発でノックアウトしてたよね。すごいなぁと思って」
「簡単ですよ？　顎の辺りを、こう！　そうすれば、意識はぶっ飛びます。ぶっ飛ぶんですよ！」

アイラは拳を握って力説しているが、同じことをミサネがやろうとしても決して再現できないだろう。
ちらと辺りを見回すと、ポテテはアキタカにお座りとお手を強要されている。ナツカゲたちもこちらを気にしつつ、雑談に興じているようだ。
もし万一アイラが暴れ出したら——そこまで考えて、ミサネは首を振った。まずはナナシを信じてことの成り行きを見守るべきだ。
「今出回ってる違法アプリを使うと、か弱い女の子でも男の人をぶっ飛ばすことができるんだって。知ってる？」
「はい。先程の方々が申されてた。アプリのことですね。えっと……ワンパンデッド！」
「アイラさんもそのアプリを使ったのかな」
「いいえ！　アイラは、アプリを使用してません。お相手方が、使っていました。規則的でない。プログラムでした。ビットフォン？　に悪影響を与えるものだと思います」
「そっか、ありがとう。あと、ポテテさんがアイラさんを探してたんだ。見つかってもらっていいかな？」
「おお！　はい。もちろん！　私も探しておりました！」
アキタカに弄ばれていたポテテの存在に、アイラはようやく気付いたらしい。ローラースケートで軽やかに近付き、腹を見せていたポテテを抱え上げる。
「ポテテさん！」
「アイラァー!!　お前！　俺を置いていくんじゃねーよ!!」
感動の再会。というにはあまり涙ぐましい光景ではないものの、アイラはポテテを抱き締めてその場でぐるぐると回っている。彼女から敵意は感じられないが、アプリを使用していないという言葉を信じるか否か。

「ビットフォンに影響を与えるっていうと、管理プログラムが不完全って証明になっちゃうんだけどな……」
困り顔で頬を掻くナナシは、やはり人がいい。彼はいつだって、誰かを疑うことに慣れていないのだ。
「ハッカーが存在している時点で、証明は完了しているでしょう。……プログラム管理者が干渉をしていれば、その限りではありませんが」
「やっぱりミカドお兄さんのことを疑ってるんだね、ミサネちゃん」
ミサネが小さく、しかしはっきりと頷くとナナシの困り顔に微笑が浮かぶ。きっちり批判してくれてもいいのに、ただ曖昧に笑うだけ。こちらの意思が固いことはわかりきっているのだろう
「一度話を聞けるか、連絡しておくよ。このアプリのことも話しておいた方がいいだろうし」
「はい、ありがとうございます。アプリに関しては、ピック探しと並行で調査を進めましょうか」
ピック探しの鍵となるポテテを見ると、まだアイラに力いっぱい抱き締められていた。どうやら迷子にならないための対応らしく、ポテテは抜け出そうと暴れ回っているのだががっちりとホールドされた腕は全く緩まない。
「痛い、痛い痛い！　もう少し力を抜けぇ！」
「おっと！　このままでは内臓破裂。危険！」
大騒ぎするポテテを眺めて、アキタカが空気を読まずに口を挟む。
「おい。その女見つけたンだから、ピック探してくれ」
「あ、ああ。そうだったな……しかし実は……」

ポテテはもったいぶった視線をちらりと周囲に巡らせる。それだけで何が言いたいか、ミサネはなんとなくわかってしまった。
「実は？」
「……ニオイを忘れた！」
やっぱりか。
舌を出して可愛い顔をしたところで誤魔化せない。誤魔化せないが可愛い。思わずモフモフしたくなる気持ちを何とか堪える。
「バカか。なんで忘れんだよ」
「犬頭舐めんなぁ！」
「な、なら僕たちがその……匂いを嗅ぐ必要のあるところまで、ポテテさんを連れていきましょうか」
ハルヤがそっと申し出ると、ミウミも隣で元気よく頷いた。
「私も同行いたしますです！　ミサネさんたちはアプリの調査、進めてくださいですの」
「……んじゃ、俺もこっちだな」
ナツカゲは頼まれる前からミウミたちについていくつもりのようだ。この面子を二つに分けるなら、少なくともナツカゲとアキタカを同じ班には配置できない。本来ならピック探しはアキタカの役目だろうが、こちらに付いてきてもらった方が良さそうだ。
「では、お言葉に甘えて二手に分かれましょう。ナツカゲさん、ミウミさん、ハルヤさんはポテテさんと一緒に、ライブハウスにいらっしゃるアストさんという方のところへ行ってください。その方がどこかでなくしたピックを見つけたいのです」
「こいつに匂いを嗅がせりゃ、ピックの場所がわかるのか？」
「と、本人……本犬は言っていますが」
「マジかよ……」

「疑っているな⁉　阿呆ッ！　犬の嗅覚を舐めるなよ！」
　ついさっき、匂いを忘れたと公言していたのは気のせいか。
　ポテテの能力は未知数だが、とりあえずピック探しを試してみてもいいだろう。ふんぞり返ったポメ柴犬を注視していると、毛玉を抱えた紙袋少女が小首を傾げた。
「アイラも同行。して構わないです？」
　その申し出に、ミサネは束の間迷った。絡んできた不良を一撃で伸してしまうような力を持つ上、その正体はまだ謎だ。ナツカゲたちに同行して、何をするかわからないという不安が少々あるのだが――。
「うん、もちろん！　協力してくれるなら嬉しいよ！」
　迷っている間にナナシが先に返事をしてしまった。全く、彼は本当に人を疑うことを知らない。
　とは言え、彼女はポテテの相棒（？）だ。せっかく見つけた相手から引き剝がすわけにもいくまい。安全性と今後の予測を目まぐるしく脳内で計算し、ミサネはようやく頷いた。
「それでは皆さん、よろしくお願いします。何かあれば連絡して下さい」
「ハルヤ君たちのおかげで助かっちゃったね。じゃ、俺たちはアプリの調査かな」
「ん？　俺もこっち？」
「うん。アキタカ君は俺たちについてきてほしいな！」
　あまり話を聞いていなかった顔で、アキタカは頷く。こういうところは妙に素直だ。
「ま、いいけど。その調べるアプリっての、ワンパンデッドか？」
「そうだよ！」
「リュウ兄も言ってたけど、やっぱやベーアプリなのかよ」
　果たしてアキタカのアプリ知識はどの程度のものなのか。ミサネはためらいながらも口を開く。

「危険性は高いですね。恐らく、アプリを使用することで脳へ命令が送られて制御リミッターが外され、自分のポテンシャル以上の力が引き出されるのかと思います。ただ身体を限界以上に酷使することになりますから、脳にも身体にも相当な負担が掛かるかと」

「身体の方がそのでっけー力に追いつかなくて、壊れちまうこともあるってわけか？」

「そういうことですね」

「なるほどな……んじゃ、そのアプリってやつを消すアプリを作れば？」

「それができれば苦労はしませんが……」

「アズ姉の友達に、ウィルスボコすの大好きみたいなヤツいんだよな。そいつに頼んでみたらどーよ」

　ミサネはまじまじとアキタカを見つめた。どう見ても柄の悪い不良タイプなのだが、思った以上に人脈があるらしい。兄弟が多いことに加え、案外人付き合いがいいことに由来するのだろうか。

　少なくともナナシよりは圧倒的に友達が多いはずだ。ナナシも感心した顔で頷いている。

「アキタカ君、顔が広いよね！　どうやったらそんなに友達が作れるの？」

「どうって、姉ちゃんや兄ちゃんの友達とか。友達の友達とか、適当に」

「友達の友達は他人じゃないの？」

「話して気が合えば友達だろ。ダチのダチなら話も合うヤツ多いし」

「ふーん……そういうものなのかぁ」

　頷いてはいるものの、ナナシはアキタカの内面に全く理解が至らないはずだ。現に、話しているアキタカの目が奇妙なものを見る眼差しへと変化する。

「やっぱお前、変だと思うわ」

　その言葉に頷かなくとも、ナツカゲやハルヤまでもが同じ表情を浮かべている。

　ナナシと外界を隔てる圧倒的な壁。それはこういった些細な会話の中にすら浮かび上がる。ぎこちなさやズレに気付かずに笑っているのはナナシだけだ。それを見るたび、ミサネの胸は軋みを

上げる。

──ああ、これではまだダメなのだ。

「……では、ナツカゲさんたちはライブハウスですね。私たちはアキタカさんのお知り合いの、ウィルス対抗ができる方のところへ行ってみましょう」

ミサネの声に応えて、全員がぞろぞろと動き出す。その輪の中からナナシが僅かにはみ出しているように見えるのは気のせいか。

ミサネは小さく息を吐いて、列の最後尾についた。

「いただいたバスターアプリ、『ワンパンデッド』にも効果があるとよいですね」

「そうだね！　あの短時間でウィルスを解析して削除するアプリを作っちゃうなんて、アキタカ君の友達にはスゴイ人がいるなぁ」

夕刻のブルーサンストリートは随分と混雑していた。夏の長い昼間を誰もが楽しげに行き交う中、ナナシとミサネはゆっくりとした足取りで自宅へ向かう。

アキタカに連れられてゲームセンター隣の倉庫へ向かい、ヒユと名乗るプログラマーと話した後。もう時刻も遅いということで今日は一旦解散となった。

ナツカゲたちはライブハウスへ戻ってから、空腹を訴えたポテテに食事を与えてタイムオーバーになったらしい。ハッカーとピック探しはまた明日、と先程別れたばかりである。

「ヒユさんのアプリがきちんと動作すれば、『ワンパンデッド』による被害者も減らせるかと思うのですが」

「リュウさんたちにもあげるといいかも。でも配布されてる『ワンパンデッド』に効いたとしても、あのハッカーの人たちの撒くウィルスには通用しないかな……」

「ナナシさんの読心すら弾く、相当高度な妨害プログラムを組んでいるようですからね」

「うん。正直、管理プログラムに匹敵しそうなガード性能だよね」

バスターアプリを作ってくれたヒユも、プログラマーとしては相当な腕前の持ち主だった。しかしハッカーたちの使う妨害プログラムは彼女の上を行くだろう。国家プロジェクトとして稼働する管理プログラムレベルのプログラムを作れるハッカーなど、日本中探してもそうそういまい。

しかも彼らは恐らく、ほんの少数の集団だ。目的すらも不明で、わざわざ顔をさらして人々を混乱に陥れるような真似ばかり。行動の雑さを見る限りすぐにでも捕まえられるかと思いきや、なぜかハッキングの証拠が一切見つからないというから不思議だ。

そう、何もかもがあまりにちぐはぐすぎる。

「管理プログラムに匹敵するほどのプログラム……それを個人が開発できたなら、世界を手中にするだとか、神になるだとかの野望を抱いてもおかしくはない気がします」

「うーん……そこは何だか引っかかるんだよなぁ。プログラムを開発した人……多分ハッカー集団のトップは、平和主義のような気がする」

「……どういった根拠で？」

「ノミヤって人が暴れて『あの人』に怒られてるって、カフェのおじさんが言ってたし。人を困らせることは望んでないんじゃないかな」

「悪事を働く方向性の違いで怒られた、という可能性もありますが」

ここでもナナシの善人さが際立っていると思うべきなのだろうか。だが、その意見は本質に近いような気がする。

まだ見ぬハッカー集団のリーダー。高度なプログラムを開発しながらも、部下を野放しにしている『彼』からは──明確な悪意を感じ取れないのだ。

考えこみながら歩いていると、いつの間にか隣からナナシの姿が消えていた。ハッとして振り返るとだいぶ遅れた場所にいる。ミサネは来た道を戻ると、ナナシの手を取った。

「ナナシさん。お疲れですか」

今日も朝から一日中歩き回ってしまった。動いている最中は何も言わなかったものの、自宅に辿り着く前にエネルギーが切れたのだろう。
「あはは……はい、お疲れです！」
「今日はあまり休憩を入れずに歩き回ってしまいましたからね。自宅へ戻ったら早めに休みましょう」
ライブハウスからバックストリート、そしてゲームセンターと倉庫。一応途中で昼食タイムはあったが、それ以外はほぼ動きっぱなしだった。
もう少し早く解散してもよかったかもしれない。夏の夕暮れは遅く、どうしても日があるうちは動こうとしてしまう。ミサネはナナシの手を引いて、緩いペースで歩き出した。
「明日もみんなで朝から集合だもんね。ミサネちゃんは疲れてない？」
「そこそこに。まだナナシさんよりは体力が残っていると思います」
疲れ果てたナナシを引きずるようにして、何とか自宅へ辿り着く。
「電気がついてる。ミカドお兄さん、帰ってきてるんだ」
ナナシが少し嬉しそうに笑って、玄関のドアを開ける。二人揃ってリビングを目指せば、そこにはパソコンに向き合うミカドの姿があった。
「やあ。おかえり、二人とも」
「ただいま、ミカドお兄さん！　忙しいところごめんね。ちょっと見てもらいたいアプリがあるんだけど、いいかな」
「へぇ。どれどれ……ああ、ハッカーのウィルス対策用か。なかなかいい作りだね。ウィルスの情報がちょっと古いから、少し手を加えさせてもらうよ」
ナナシが送ったアプリを一目見た瞬間、ミカドは構成から用途までを全て見切ったようだ。さすが管理プログラムを作った天才と言うべきか。

「このアプリを作った人、すごいね。ほぼ正確に的確な処理が組まれているよ。あと六歩くらい頑張れば、完全にウィルスを駆除できるものが作れそうだ。検知レベルを上げたから、ほぼ自動で弾いてくれると思う。これでナナシがウィルス駆除の処理をしなくてよくなるはずだよ」
　簡単にいじったアプリをナナシへ再送したミカドが、ふとこちらへ視線を移す。
「どうしたの、ミサネさん」
「……少しお話を伺ってもよろしいですか」
「どうぞ？」
「ミカドさん、は。ハッカーとの関わりを持っていませんか？」
　回りくどい言い方をしたところで意味はない。ミサネが正面から投げた球を、ミカドは動揺もせず易々と受け止める。
「どうしてそう思ったのかな？」
「先日ナナシさんがハッカーから情報を読み取ろうとした際に、何か特殊なプログラムを利用しているのか、侵入を弾かれて情報を得ることができませんでした。それだけのプログラムを組み上げるには、管理プログラムを理解していなければなりません。しかし現状、管理プログラムを理解できるのはミカドさん一人……と、以前に伺いました。それに最近、自宅にいる頻度が下がっています。これらの状況から推理すると……私はミカドさんを疑わなくてはなりません」
「回りくどい言い方をしなくていいよ。ミサネさんにとって必要なことなら、何でも聞いて。僕は正直に答えるから」
「わかりました。ナナシさん」
　急に話を振ると、それまで見守る立場にあったナナシが驚いたように肩を揺らした。
「えっ、俺？」
「お願いします」

追い詰める役を任せるのは、卑怯以外の何でもない。だが、ナナシ自身に答えを引き出してほしかった。傍観者ではなく、当事者として。これはナナシの問題だからだ。
「んー、わかった。……ええとそれじゃ、ミカドお兄さん。ハッカーの存在に気付いたのっていつ？」
　質問役が代わっても、ミカドは全く気にする様子はない。その笑顔も相変わらずだ。
「そうだな……初めにナナシたちが報告に来てくれた少し前かな。管理プログラムの方で少し違和感のある処理に気付いて、誰かが干渉してる事実を突き止めたんだ」
「ナツカゲ君の時のだね。それ以前にはなかったってこと？」
「未遂は何度かあるよ。実際に入り込まれたことはないけど」
「そのハッキングしようとした人の名前とか情報は知ってるの？」
「うん。記録を辿るのも僕がやってるよ。管理プログラムに関してはあまり他人を信用していないから、僕しか操作できないようにしているんだ」
「何か嫌なことがあったんだっけ」
「プログラムを組み上げる際に一部の人たちが手を出したせいで、トラブルが起きて大勢の人に迷惑をかけそうになったんだ。それからは誰にも干渉させていないね」
　ナナシの顔が微妙に曇る。そうだ。ナナシならば必ず自力で気付くはず。
「管理プログラムって、ミカドお兄さんが全部一人で組み上げたんだよね」
「そうだよ」
「誰にも触らせずに作ったし、今もそうしてる？」
「そういうことだね」
「えっと……普通におかしいよね？　それだと、今稼働してる管理プログラムができる前に、また別の管理プログラムがあったって話になっちゃうんだけど」

それまでナナシを見つめていたミカドが、ミサネに視線を移して微笑みかけた。どこまでも優しい表情が、なぜか空虚に感じられてならない。

「ミサネさんならわかるよね」

「……今、話をしているのはナナシさんです」

「でもミサネちゃん」

「話を続けてください」

強く言い切ると、ナナシは困った顔で頷いた。ミカドは相変わらず微笑んだままだ。こちらがどれだけ暴言を吐こうが無礼を働こうが、怒ることなど一切ない。――そこに感じる微かな既視感。

「管理プログラムは一人で作ったから、他の誰にも操作はできない。でも今、ハッキング事件が起きている。ハッカー集団は確かにいるけど」

「彼らじゃ管理プログラムを触れないよ。そこは自信がある。僕が作ったんだからね」

「……じゃあやっぱり、ミカドお兄さん本人が怪しいって結論になっちゃうんだけど」

ナナシの問いに、ミカドはあっさりと頷く。

「ふふ、そうだね」

「そして、管理プログラムの作成に二回も携わった。……今、俺がいる時代には一つだけしかない。プロトタイプがあったって話も聞いたことない」

「うん。結論はもう出ているね？　僕もミサネさんと同じ、未来から来た人間だよ」

あまりにあっさりと認めたことにミサネは少なからず驚いた。隠す様子など微塵もない。真相に辿り着いて問いかければ、どんなタイミングであろうと彼は真実を話すつもりだったのか。

「ミサネさんは初めからわかっていたよね。今度は僕から質問したいんだけど。一体どんな目的で、こんなことをしているのかな？」

「それは……言えません」

「そうか、残念。でも君が決めたことだ、しっかり自信を持って最後までやり遂げるといいよ。ほら、前を向いて。美人が台無しだ」

伸びてきた手が、ミサネの頭を優しく撫でていく。その手触り、仕草、言葉。全てに覚えがあった。ミサネは悲しい思いで唇を引き結ぶ。

「……貴方は……」

「僕はもう行かなくちゃ。じゃあね」

リビングを出て行くミカドを、ミサネもナナシも止めなかった。彼の口から真実が零れたことは確実なのに、止める手段を持たずに見送るだけだ。

──彼がもし、『彼』なら。思い通りにさせるわけにはいかない。

何故自分が過去へ来たのか、ミサネは改めて思い出す。

自分の望みを叶えるためなら、どんな禁忌でも犯してみせる。誰であろうと邪魔はさせない。憎まれ、恨まれることを覚悟で旅立ったのだ。

これは一度きりの勝負。ここで過去を変えられなければ、願いは決して叶わない。

「……追いかけなくて、いいの？」

ナナシが気遣いの目を向ける。責めるでもなく、咎めるでもなく。彼から寄せられる信頼に、胸が痛くて泣きたくなる。

「貴方はまだ、私のことを信じているのですか？」

「うん。俺はいつだってミサネちゃんの味方だよ」

その一言で、ミサネはとうとう返す言葉を失った。

──もし真実を知ったとしても、同じ言葉を吐けるのか。

飛び出しかけた言葉をかろうじて呑み込む。けれど顔には出たのだろう。ナナシが困ったように笑って、手を差し出してくる。

「ご飯にしよう。疲れたもんね。いっぱい食べて寝て、また明日頑張ろう」

ああ。彼はいつだって、自分が傷付くことを恐れず人に優しくできるのだ。

今日も夏空に入道雲が湧く。照りつける太陽光線に気力と体力をじわじわ奪われつつ、ミサネとナナシは時間通りにブレイクパッセージのライブハウス前へ到着した。

「お。来たのか」

ライブハウスの扉前。ひさしの作る日陰に座り込んでいたアキタカが、ミサネたちを見て立ち上がる。どうやらナツカゲたちはまだ来ていないらしい。

「おはよう、アキタカ君！　他のみんなはまだかな？」

「来たぜ。ずいぶん集合が早くてさ、もうピックも見つけてくれたわ」

「ええ!?　すごいね！」

「な。やっぱ犬ってのはすげーな。ちょっと見直したぜ」

アキタカは珍しく上機嫌で笑っている。これでバンドの練習が再開できるとあって、やはり嬉しいのだろう。

「でもみんな、いないみたいだけど。ライブハウスの中かな？」

「いや、なんか青いのがモメてさ。変な連中に連れてかれたけど」

「ナ、ナツカゲ君が？　その変な連中っていうのは……」

「よく知らねーヤツらだったな。なんか様子が変だし、ワンパン……とか何とか言ってヤベー気もしたけど面倒だし……一応リュウ兄にポツっといたから、まー大丈夫じゃね？」

アキタカだけがついていかなかったということか。早く探しに行かねばと思う反面、ミサネはアキタカの後ろにいるもう一人の人物が気になって仕方がない。

この暑い中、身に着けた衣装は袖の長い黒のゴシック調ドレス。その上、手には湯気の立つティーカップを持っている。とても正気とは思えない赤毛の美女をミサネはしげしげと観察す

る。
「アキタカさん。そちらの方は」
「ああ。ハッカーってヤツ見つけたんだ」
「ハッカー」
「あら失礼。ご挨拶がまだでしたわね。私、トバリと申します。以後、お見知りおきを」
カップを持ったまま、トバリは優雅に一礼する。一言で言えば、怪しいにも程がある。
「初めまして、俺……僕はナナシって言います。お姉さんはハッカーらしいですが。管理プログラムにハッキングしてるハッカー、ってことですか？」
「ええ、そうですわ。今回はノミヤ君やキライ君、コトラさんたちとご一緒させていただいております」
全部で四名。いや、そんなはずはない。ミサネは思わずナナシの横で口を挟む。
「貴方たち四人の上にいらっしゃるのは、どなたですか？」
「もうそこまで掴んでらっしゃるのですか。でも、少し聞き方が悪いかと。それでは『私たちの上に誰がいるのかわからない』と言っているも同然です」
どうやら答える気はないらしい。無論、ミサネも聞いただけで答えてくれるとは思っていない。少しでも情報を引き出せれば御の字だ。
「貴方たちの目的はなんですか」
「そうですね。あの方が仰っていたのは、『世界平和のため』と……まぁ、なんともくだらない、お子様のような野望をお持ちでしたわね」
「……つまり、上の方と貴方たちの目的は一致していない。ハッキングによる傷害事件を引き起こしているのは、貴方たちの独断であると判断してよろしいですか」
「ええ、そう考えていただいて構いませんわ。……さて、ずいぶんヒントも与えさせてもらいましたし。代価をいただきましょう」

思わず身構えたのはミサネ一人だ。アキタカはよくわからない顔で首を傾げており、ナナシもいつものふんわりした表情で困ったように頬を掻いている。

「あの、俺たち学生だからあんまりお金持ってないんですけど」

「あら、お子様に金銭を要求したりしませんわ。……そうね。でもアナタたち、少し厄介だから……回線一本。それで充分でしょう」

　バチン、と鋭い音が鳴る。

　ミサネは思わず身を竦めた。実際には音など鳴っておらず、目に見えるものも何も変わらない。だが確かに今――何らかの攻撃を受けた感触があった。

「……今、何を」

「うふふ。回線一本と言ったでしょう。大したことはしていません。ビットフォンを利用した回線が途絶え、相互の連絡が取れない程度ですわ。赤外線は使えますので、友達作りはできますけど」

「そんなことが……」

「回線の切断が私の役目なのです。それと注意をひとつ。その状態だと管理プログラムの保護処理が受けられなくなりますので、ウィルスの感染速度が非常に速くなりますわ」

　にこりと穏やかな笑みを浮かべつつ、トバリが再び動く。指一本動かさないまま、電脳空間から生成した『何か』を現実へ送り出したのだ。

「長々と失礼いたしました。それでは、この辺りで」

　ドレスの裾をひるがえし、優美な姿が遠ざかる。思わず手を伸ばしたミサネは、指先を弾くような強い痛みを感じて息を呑んだ。

「っ……！」

「いって、ンだコレ」

「ウィルスだ……！　ミサネちゃん、アキタカ君！　俺が駆除するから、このアプリをダウンロードして！　二人は近付かないでね！」
ミサネとアキタカは赤外線で送信されたアプリを受け取り、起動する。ヒユの作ったアプリがきちんと動けば、万一ビットフォンにウィルスが感染しても無力化できるはずだ。
その間にナナシは、周囲を取り巻くウィルスの駆除を始めた。
ミサネはただ、息を詰めてナナシの動向を見守るしかない。肌のひりつく感触。短い時間がひどく長く感じられる。早く。どうか無事に終われ――。
「……っと！　駆除できたよ、もう動いて大丈夫だからね」
辺りを覆っていた重圧がふっと消え去り、ナナシの言葉が正しいことを知る。相変わらず見事な手際だ。だが今回は、少々勝手が違う。
「回線は切られてしまったままですね……」
ビットフォンは沈黙し、通話やメール、〝ポツリ〟までも接続不可能だ。誰かと連絡が取れない状況がこれほど不安だとは思ってもみなかった。
「ン？　あ、俺のは切れてないぜ。なんか知らねーけど、お前ら二人だけじゃね？」
「本当？　じゃあ、ナツカゲ君たちと連絡取れるかな」
「あの青髪野郎と？　ぜってーヤだ。気に食わねェもん、アイツ」
「うーん……じゃあ、ミウミさんなら？」
「おう、いいぜ」
あっさり請け負ったアキタカは、連絡先をもらってミウミに通話を送っている。
トバリ絡みの混乱ですっかり忘れていたが、そういえばナツカゲたちがどこかへ連れていかれたのだった。ミサネは改めて状況が切迫していたことを思い出す。
「もしもし。あー俺。俺だって。……違う、アキタカ。そう。どこにいるか聞きたいって。いや、詐欺じゃねーから。うん。あーそう。じゃあそっち行くわ、んじゃな」

どうやら知らない番号からの連絡に加え、口調のせいでオレオレ詐欺かと思われたようだ。いざとなれば代わろうかと思ったが、アキタカはさっさと通話を切ってしまった。
「んと、ゲームセンターに連れてかれてンだって」
「場所がわかってよかった。じゃあ行こう！」
ナナシは元気よく夏の日差しの中へ駆け出していく。
ウィルス解除の疲労は溜まっていないのだろうか。少々気になりつつ、ミサネも後を追いかけた。
「コイツっすよ！　例の紙袋女！」
「やっと昨日の礼ができるってわけだな。ワンパンデッドでブッ倒してやるぜ！」
ガラの悪い不良たちに囲まれた紙袋頭の少女は、表情が見えないものの全く怯える気配がない。ぐるりと敵を一瞥し、拳を握って高々と言い放つ。
「いいえ！　それは間違いですね。アナタがたがアイラに勝てる確率。ズバリ。０から小数点以下！　です！」
揉め事の気配から誰もが逃げてしまった後なのだろうか。ゲームセンターの一角には、アイラとそれを囲む不良たち。そしてそれを見守るナツカゲ、ミウミ、ハルヤ。更に周りをうろうろしているポテテの姿しかない。
確かナツカゲが連れていかれたと聞いたはずなのだが。これはどうしたことか。
「えっと……解説をお願いしてもいいかな？」
ナナシが声をかけると、日陰に突っ立っていたナツカゲが肩を竦めた。
「ゲーセンでブッ飛ばされた連中の仲間らしくてよ。あいつに仕返ししたいんだと」
「えーと。ケンカする気満々みたいだけど、止めなくて大丈夫なのかな」
ナナシたちの話し声を聞きながら、ミサネは辺りを見回す。あわよくば、と思ったがやはりここにトバリの姿はない。こちらはあまり大ごとになっていないようだし、自分だけでも探しに行

くべきか。
「……ちゃん。ミサネちゃん？」
「えっ。あ、はい。すみません……少し考えごとをしていました。どうぞこちらは気にせず」
「ふむふむ、お悩みごとでしょうか。本当に大丈夫ですのん？」
「はい。すみません」
重ねて謝ると、ミウミは何か言いたげな顔のまま黙ってしまった。ナツカゲとハルヤも気遣いの視線を送ってくるが、空気を読んでくれたのか追求はしてこない。
「じゃあ、ミサネちゃんの代わりに俺がやるべきことをやるよ！　まずはアイラさんを止めないと！」
「もう殴ってるけど」
「ほ、本当だ……！　えーっと次、次は……話を聞いてみよう！」
ミサネは一歩離れた場所から、ナツカゲたちと話し合うナナシを眺めた。ミサネが背を押さずとも、年の近い友人たちときちんとコミュニケーションを取れているように見える。
笑って、困って、慌てて、意気込んで。ナツカゲたちの助言やツッコミを受けながら必死に会話し、輪の中に姿。自宅に引きこもっていた頃とは全く違う横顔を、じっと眺める。
――私の望みは、叶うだろうか。
いいや、叶えるのだ。ミカドの思う通りにはさせない。
ミサネは胸の前できつく両手を握り締める。
「おい。もう少し下がれ、巻き込まれるぞ」
ゆらゆらと危うい足取りで近付いてきた不良を、ナツカゲが右ストレートで沈める。
仲間が倒されても他の不良たちは怯えて逃げ出す素振りもない。意思を感じさせない動き、虚ろな目――これまでも見て来た、ウィルスに乗っ取られている状態だ。
「ミサネちゃん、こっちですの！」

ミウミに引っ張られて更に下がる。続々と増加する敵に対し、こちらで対応するのはナツカゲとアキタカの二人だけ。しかし心配をするより早く、彼らは水を得た魚のように動きの鈍い不良たちを殴り倒していく。

　ちらと向こうを見れば、ナナシは身振り手振りを交えてアイラと会話中だ。自分が助け船を出さずとも、あんなに誰かと話せるようになっている。友達作りだって自発的にできるのに。

　どうして胸の中から不安が消えないのだろう。

「空気があまりよくない場所ですわね。ふむ、なかなか煙草臭い。服に臭いが付いてしまいますわ」

　かつん、とヒールの音を立ててミサネの隣に人影が立つ。

　反射的に見上げると、そこには先程逃げ出したはずの黒ドレスの姿があった。

「どうして貴方がここに……」

「あら、目的なんてわかっているでしょう。そもそもこれだけ操られている方が多いのは、一体誰の仕業だと？」

　優雅に微笑むトバリの後ろで、奇怪な笑い声が上がる。

「ッハッハハ！　ばらまいてやったァ！　ｂｉｔ脳のヤツらは操りやすくていーや!!」

「えっ、えっ？　な、なんですかこれ……!?」

　ナツカゲとアキタカが倒した不良たちだけではない。今やゲームセンター内にいた全ての客が、虚ろな目をしてミサネたちに視線を注いでいる。

　異様な空気に気付いたハルヤが怯えて身を竦め、ナツカゲたちも身構える。出口はハッカーたちの背後にひとつ。非常口も操られた客が封じている。

「おい、こいつらまだ操られてねーぞ」

「そちらの方々はウィルス対策をされているようで。まあ、無理に操らずともこの程度で充分でしょう。混乱は引き起こせます」

トバリの後ろで、イライラと足を踏み鳴らす青年。彼の姿にも無論見覚えがある。
「ノミヤさん……とトバリさん。貴方がたの目的は？」
「ノミヤさんは混乱を呼びたいだけ。私はただの付き添いです。回線切断は私の役目ですからね」
「チッ、こいつらに用はねぇ。先行くぜ」
　ノミヤは肩をいからせてゲームセンターから出て行く。続いて身をひるがえしたトバリの手首に、ミサネは銀色の輪を引っかけた。電子錠のついた手錠の一方を自分、もう一方を相手へ。ガチャリと音がして、互いの手首が繋がる。
「待って下さい」
「あら。ずいぶんと手錠さばきが上手いのですね」
「話をしていただけるまで外しません」
「ふふ、いいでしょう。では外へ」
「ミサネちゃん！」
　ナナシの呼びかけにも振り返らず、ミサネはトバリと共に出口へ向かう。
　背後の道は、すぐに操られた客たちで埋まったようだ。友人たちを置いていく罪悪感はあったが、それよりも目の前のハッカーを逃がすまいとする思いが勝った。
「呼んでいますよ。いいのですか」
「貴方と話をした後に戻ります」
「そうですか。ふふ。アナタはずいぶんと私たち寄りの思考をしているよう。自分の望みを最優先とし、そのためならば手段を選ばない。それで誰が不幸になっても構いはしない。そういう部分がありませんか？」
　ゲームセンターを一歩出ると、真夏の暑苦しい空気がぶわりと押し寄せた。煙草臭いがクーラーの効いた店内はまだ過ごしやすかったようだ。

ノミヤはさっさと歩き去ってしまったのか、もうどこにも姿がない。目的地があるのかトバリが足を進めるので、ミサネもその隣を行く羽目となる。
「黒幕の正体を教えてください」
「黒幕、とは」
「貴方がたハッカーをまとめる人物です。その方の目的を知りたいのです」
トバリはくすくすと笑って、穏やかな眼差しを注いでくる。
「恐らく、アナタの予想は当たっていますわ」
「確証をいただけませんか」
「本人に確認してみてはいかが。それが正しい行為かどうかは別として、アナタは満足できるでしょう。……ああ、本当に私たちの同類のよう」
建造物の作る日陰でトバリが立ち止まる。
「よろしければ、このまま私と同行しますか？　あの方は喜ぶと思いますわ」
「遠慮します」
「そうですか。残念」
ピピ、と小さな音が鳴った。思わず視線を向ければ、外れた手錠が地面に落ちていく。
「……どうやって」
「回線の切断は得意なのです。電子錠ではお話になりませんわ」
自由になった手でミサネの頬に触れると、トバリはそっと微笑んだ。
「気が向いたらいつでもおいでなさい。では」
ヒールの音も軽やかに、黒ドレスの姿が去って行く。追いすがろうにも気力が萎えて、ミサネはその場に立ち尽くしたままだった。
覚悟を決めて此処へ来たのに、小さな棘に刺された程度でうろたえてしまう。
――もうあまり時間がないというのに。

「ミサネちゃん！　大丈夫⁉」
　ナナシの声を聞いても、振り返ることができなかった。一度は見捨てた――そう、自分の願望を優先したのだ。危険の中に置き去りにした彼に、どんな言葉をかければいい。
「一人でハッカーと一緒に行くなんて危なすぎるよ。無事でよかったぁ」

「……怒っていないんですか？」
「ミサネちゃんは考えなしに動く人じゃないよ。何か行動する理由があって、やりたいことをやっただけでしょ？　でもあんまり危ない真似は心配になるけど」
「相変わらず、お優しいですね。眩しいくらい変わらない……」
そのままでは、ダメなのに。
ひとつ、息を吸って。思うままに言葉を述べる。
振り返れば、そこにはやはり困ったように笑うナナシがいた。
「私の行動理由を、簡潔にお伝えしていいですか」
「え。うん、はい」
「ナナシさん。貴方が好きだからです」
ナナシの目が限界近くまで見開かれる。その驚愕の表情から目を逸らし、ミサネはうつむいた。
「……少し、頭を冷やしてきます。気持ちの整理をさせてください」
現実から逃げるように目を背け、歩き出す。行く当てなどない。だが、早くこの場から立ち去りたかった。
こんなに醜い自分を、これ以上晒していられるものか。
背を丸め、涙を堪えて歩を進める。追ってくる足音も声もない。そのことが少しだけ救いだった。

「……ああ、おかえり」
「聞いてたらず〜いぶんベラベラ喋ってたみたいだけど。いーのかなー」
コトラとキライの出迎えを受けて、トバリはにこりと微笑む。

「私はあの方に言われたとおりに申し上げただけですわ。返答も想定内でしたし」
「ったく、つまんねー展開だな。何がしてェんだ、アイツは？」
イライラと机を蹴ったノミヤに、コトラが疲れた溜息(ためいき)を吐(は)き出(だ)す。
「目的は最初に言われたでしょ。君たちが全く協力的じゃないだけで」
「コトラさんの言うとおりだね」
闇(やみ)の中から柔(やわ)らかな声が響く。
「ただ、僕の意思に反していても止めたりはしないよ。それは君たちの考えだからね」
ハッカーたちの『秘密基地』へ現れたミカドは、四人に向かって笑いかける。その笑みは、ナナシやミサネに向けるものと完全に同じだ。
「わっけわかんねー。気持ち悪」
「キライ君！」
「あはは、よく言われるから大丈夫ですよ。それじゃ今後もよろしくお願いします」
戻ってきたトバリたちと入(い)れ替(か)わるようにして、ミカドは部屋を出て行く。
「……頭おかしいよな、アイツ。このままプログラム持ち去って独立しても文句言わねーんじゃねェ？」
「あー、そっちの方が面白(おもしろ)そうじゃん」
「それも良いのではないでしょうか」
ノミヤとキライ、トバリが頷き合う様を見て、コトラはとうとう頭を抱えた。
「三人揃って何てこと相談してるの……どうなっても知らないからね」
「どうとでもなるさ。そうでなきゃ面白くねェ！」
そうとも。どれだけ天才で、素晴(すば)らしいプログラムを組めたとしても。
あんな頭のおかしい人間になるのはこりごりだ。

幕間3

☆フレンド大増殖作戦その3。
フレンドリスト登録件数の更なる増加を目指す。
フレンドの年齢・性別・職業は問わず。

☆ミコトミサネ捜索作戦。
フレンド大増殖作戦と同時進行。
所在不明の少女・ミコトミサネの捜索。
この作戦の優先順位はフレンド大増殖作戦より上とする。
以下に簡易作戦記録を残す。

☆神代　焉（クマシロ　エンリ）
十五歳男性。学生。バンドマン。
アキタカ、アストとバンドを組んでいる。性質：ドライ。
大の犬嫌い。幼少期に犬に追いかけられた経験あり。
↓厳選わんわん動画を一緒に見る。

結果、ポテテを撫(な)でることに成功。フレンド登録にも成功。
ミコトミサネの行方(ゆくえ)は知らないとのこと。

☆愛染(アイゼン)　歩(アスト)
十五歳男性。学生。バンドマン。
アキタカ、エンリとバンドを組んでいる。　性質：ホット。
ラリックマグッズをこよなく愛す。
ゲームセンターでラリックマグッズの限定景品ゲットに挑戦(ちょうせん)中。
↓資金を貸してゲットに協力。フレンド登録に成功。
ミコトミサネの行方は知らないとのこと。

☆九條(クジョウ)　龍(リュウリ)
二十三歳男性。バックストリートのボス。

☆赤和(アカナギ)　晶(キララ)
二十一歳女性。リュウリの恋人(こいびと)。
ミコトミサネの行方を尋(たず)ねる。
近辺で見かけてはいないが、見かけたら連絡(れんらく)をくれるとのこと。
発言メモ：
・リュウリ「女は追いかけると逃(に)げる」
・キララ「追いかけてほしいのが女」

わかるようでわからない。どうすればいいかという質問に対し、アドバイスはなし。自分で考えろという示唆か。

最後にフレンド登録をしてくれた。なぜか胸が痛くなる。

フレンド登録者は以上。

今後も作戦を継続しつつ、ミコトミサネの捜索に全力を尽くす。

第4章　ココロヲモッタオトコノコ

ナナシと別れてから、二日目の夕暮れが訪れようとしている。

夕日坂の頂上に辿り着いたミサネは、西の空に浮かぶ太陽をぼんやりと眺めた。午後五時を回ったが、まだまだ涼しくなる気配はない。蒸し暑い大気のせいで、立っているだけでも汗が滲んでくる。

(ナナシさんは元気にしているだろうか……)

この暑さでは、気を付けていなければ健康体でもすぐに熱中症を引き起こす。いつもは自分が同行していたおかげで、不調の片鱗を見つけた際に声をかけられたが――。

(倒れていないといいのだけど)

浮かんだ思考に苦笑する。これだけナナシを心配するなら、衝動に任せて飛び出してこなければよかったのだ。

冷静に考え、事態を予測し、必要な手を打つ。それが目的だったはずなのに。

何故、『好きだ』などと口走ってしまったのだろう。

「……ミサネちゃん？　ミサネちゃんですよね。どうしたのですか、こんなところに一人で」

はっとして顔を向けると、神社の境内に佇む人影を見つけた。

この神社に務めるハクヒだ。見目麗しい女性なのだが、猛暑の中でも巫女装束を着こなし、涼しい顔をしているとはただ者ではない。特殊な修行でも積んでいるのだろうか。
ぼんやりと眺める間に、意外と素早い足取りでハクヒはすぐそばまでやってくる。
「顔が真っ赤ですが大丈夫ですか？　中で休んでいきませんか」
「いえ、大丈夫です。どうぞお気遣いなく」
「そうですか……大丈夫ならいいのですが。もう帰るところでしたか？」
問われて、思わず口を噤む。
昨日ナナシと別れた後は、結局ミウミの家に泊めてもらった。だが連日世話になるわけにもいかず、ミウミの誘いを辞退して当てもなく街を歩いていたのだが。
——今夜はどこへ行けばいいだろう。
途方に暮れる思いを読み取ったのか、ハクヒが眉をひそめる。すぐにふわりと伸びてきた腕が、ごく自然に背を抱いた。
「心配しなくても大丈夫ですよ。みんなついていますからね」
とんとん、と優しく背を叩かれて、疲れた心が思わず崩れそうになってしまう。
だが説明するわけにもいかない。必然的に、黙りこんだまま好意に甘える形となる。
誰かに抱きしめてもらえるのが、こんなに心地よかったなんて。
「どうした？」
予期せぬ声が背後からかかり、ミサネは驚いた猫のように飛び上がりかけた。
「たっちゃん。巡回中ですか」
「ああ。その子は……先日会った子だな。何か困ったことでも？」
ハクヒに抱きしめられたまま首をひねって声の主を見上げる。

そこには怪訝な表情の警察官が立っていた。見覚えのあるその顔は、夕日坂の交番に務めるタカミヤだ。そうだ、今会いたくない職業ナンバーワンの存在だ。この二人とは、先日、夕日坂で知り合った。ナナシとフレンド探しをしている最中、声をかけてもらって親しくなったのだ。
「いえ、大丈夫です。これから帰るところだったので」
ミサネは思わず背筋を伸ばして、大きく首を振った。
「今からか。もう時間も遅いが保護者の迎えは？」
「ありませんが……」
「では家まで送っていくか」
「いえ！　いえ、大丈夫ですから」
数歩下がって腕の中から抜け出すと、ハクヒが悲しげな顔をした。
「何かあるなら、何でも話してください。解決のお手伝いができるかはわかりませんが、お話を聞くことはできますから」
「ありがとうございます。……すみません」
頭を下げて逃げるようにその場から離れる。
「おい、一人では……」
「たっちゃん。今はそっとしておいてあげてください。話したくなったら、きっとミサネちゃんから話してくれます」
ちらと振り返れば、タカミヤとハクヒが並んでこちらを見ていた。タカミヤはいつもの仏頂面で。ハクヒは笑みを浮かべて、手を振ってくれる。
強引に近付くでもなく、黙って見守ってくれる姿勢がありがたかった。同時に、温かな好意に背を向けることが心苦しかった。
小さな会釈だけを返すと、ミサネは夕日坂から足早に逃亡する。

「お花、どうぞ？」
うつむいた視界の中に、明るい黄色のヒマワリが入り込む。
思わず顔を上げれば、花を手にした妙齢の女性がふんわりと柔らかく笑っていた。
「ミサネちゃん。今日は一人ですか？」
ここは花屋の店先なのだと、ミサネは遅れて気付いた。ココアリーを訪れたものの目的地は決めておらず、ふらふらと彷徨ってここまで来てしまったらしい。
鼻先では相変わらず、黄色いヒマワリが揺れている。その花が似合うのは自分ではなく、目の前にいる花屋のチノだろう。
先日ココアリーで起こった騒動の際、世話になった相手にミサネは目礼する。
「……少し、散歩を」
「そうですか。もう時間も遅くなってきましたが、お夕食は家に帰ってから？」
「……」
素直に頷けばいいものを、またしてもミサネは言いよどんでしまった。
「あら。それじゃあうちで食べていきませんか」
「えっ」
会話を聞きつけたのか、店の奥からハルヤがひょっこりと顔を出す。
「母さん、そんなに簡単に声かけちゃミサネさんも困ってるよ」
「そうかしら。ごめんなさい、嫌だったら断わってくれるかなって思ったのだけど」
「いえ、嫌ではないです……。が、急にでは申し訳ないので。……ありがとうございます」
頭を下げようとしたミサネの手に、黄色いヒマワリが握らされる。
「あの」
「お花を見ていると元気が出ません？　うちのお花はね、恋の悩みによく効くんですよ」

「「「えっ」」」

ハルヤの声に、別の声が二つ重なる。ヒマワリを手にしたまま顔を向ければ、そこには立ち尽くすロッカとモロクの姿があった。

「こっ、こ、恋ですか？　ミサネさんが？」

『こいつは大変だ！　しかし他人が口出す問題でもねぇしな、どうすりゃいいんだ⁉』

「二人とも、落ち着いてください！　ええと、ええと、母さんが言ってるだけなので！　信じないでください！」

　おろおろする二人の客をなだめようとするハルヤに対し、チノはにこにこおっとり笑うばかりだ。

「あらあら。どうなのかしら、ミサネちゃん」

　問われて、呆けた頭で考える。ヒマワリの微かな青臭さが鼻をくすぐる。

　恋。恋とは。確かに――ナナシのことを――好きだと言ったが――。

「……ノーコメントです」

　否定でなければ肯定しているようなものだとわかっていながら、ミサネは結局そう呟いた。もらったヒマワリが、心の中で絡まった糸を僅かにほぐしてくれた気がしたのだ。

　確かにナナシのことは好きだが、状況はそこまで簡単ではない。好きと伝えて終わるなら、どれだけよかったか。

「そうですか。妙なことを言ったのならごめんなさい。お詫びにヒマワリは持っていってくださいね」

　近付いて来たチノが、腕を広げてぎゅっとミサネを抱きしめる。

　柔らかく温かな気配。今日、誰かに抱きしめられるのは二度目だ。ささくれ立った胸が、人の体温で静かに溶かされていく。

「……すみません」

「謝らなくていいですよ。でも、危ないことだけはしないでくださいね。困ったことがあったらいつでも来てください。私もハルヤも、ミサネちゃんを待っていますから」
「えっ。あ、はい！　いつでも来てください！」
　腕から解放されたミサネは、四人分の眼差しを眺めてぺこりと頭を下げた。
　今はこの優しい人たちに頼れない。夕暮れに染まり始めた街の中へ、振り返らずに歩き出す。

「お嬢ちゃん、一人～？　そろそろ遅いけど送ってこうか？」
　道を塞いだ二人の青年は、どこからどう見てもチンピラの風体だった。
　ミサネは思わず溜息を呑み込む。この手のタイプは相手をしないに限るのだ。黙って迂回しようとすると、二人組はわざわざ目の前に回り込んでくる。
「え～、無視？　傷付くな～。俺たち別に悪いことしようってんじゃないからさ！」
　まったく。心を読まなくとも百パーセント嘘だとわかる嘘を吐くとは、頭がよろしくないに違いない。
　夕暮れのブレイクパッセージは、昼間よりも更に雰囲気が悪かった。通りのそこかしこに群れる不良たちは、だるそうに座り込んだままちらちらとこちらを眺め、面白いことが起きるのではないかと期待している気配だ。
　こんなことならやはり、通りへ入った段階ですぐにUターンをすべきだった。空気の悪さを感じながらも、さっさと通りを抜ければいいと思ってしまったのだ。
　判断の甘さを悔やみながら、ミサネはこの場を切り抜ける方法を模索する。
　走って逃げるか。会話で誤魔化すか。それとも──。
「ちょっとぉ、この子あーしの連れなんですけど」

背後から肩を抱かれて、ミサネはその場で硬直した。少々きつめの香水の匂いと、整えられた派手な爪。顔を見ずとも相手が誰かはすぐにわかった。
「キララさん」
「ね。ってわけでー連れてくけどいいっしょ？　そんじゃね」
肩を押されるまま歩き出せば、不良たちが追ってくる気配はなかった。何かブツブツ言っている声は聞こえたが、どうやら手を出せないらしい。
「……ありがとうございます」
「いーのいーの。でも女子一人とか激ヤバだからね？　さっきも向こうであの子助けたばっかだしさー、気を付けなよ」
角を曲がって細い路地へ入ると、所在なさげに佇んでいた少女がハッとしたように顔を上げた。
柔らかく波打つ銀髪。長くて重い睫毛と、美しく整った顔立ち。一度目にすれば忘れられない美少女が、ミサネを見てぐしゃりと顔を歪める。
「ミサネちゃん！」
抱きつかれたミサネは、目を見開いてようやく相手の名前を呼ぶ。
「ミウミさん……」
「とってもとっても心配したんですの！　ナナシさんも探してましましたし、どこへ行ったかわからないって、みんな大慌てのドンドコショで、月の裏側までひとっとび⁉」
「アハハ、何それちょーウケる。アズサ、だいじょぶだった？」
「ふぁい」
ミウミの奥に立っていた赤い髪の少女はハンバーガーを食べるのに忙しいようだ。大量のハンバーガーが詰め込まれた紙袋を抱えた姿にも、やはり見覚えがある。
「アズサさん」

「んぐ」
「ミウミちゃんってば、ミサネちゃん探すって言って聞かなくてねー。でもヘロヘロだったし？
アズサに任せて、ちょっとあーしが見回ってたワケ」
「そうですか……皆さんが……。あの、ミウミさん。そろそろ」
「ダメですっ。もう離しませんのっ！　ミサネちゃん、マイプレシャス！」
ぎゅうぎゅうに抱きしめてくる腕が温かくて、ミサネは途方に暮れる。一体どうしたら離してくれるのだろう。
「言うこと聞いたげればー？　ミウミちゃん、ホント困ってたかんね。ナナシちゃんも探し回ってたけど、ケンカでもした？」
「私は……」
ようやく離れたミウミが、赤い目で見上げてくる。
アズサとキララもだ。責めるでもなく、ただこちらの話を聞こうとする落ち着いた姿勢。
「……私は……ナナシさんを、助けたくて」
唇から言葉が零れると、止めようがなかった。
「助けたいけれど。でも、うまくできるかわからなくて。これでいいのかどうかも。やり直しはできないのに、このままでいいかどうか、とても不安なんです。怖くて、本当に怖くて。もしナナシさんを助けられなかったらどうしようと、そればかりで……」
堪えに堪えていた思いが、堰を切ったように転がり落ちてくる。
聞いている側にとっては意味不明の内容だろう。きちんと全てを説明できず、曖昧な単語ばかりを並べてしまうことにもひどい罪悪感を覚える。
彼女らは皆、こんなに優しいのに。
「……ごめんなさい。わけのわからないことばかり」

「いいですとも。ミサネちゃんが話したいことだけ聞かせてほしいのです。苦しかったら、ぜひとも頼ってくださいましまし」
微笑むミウミの表情はどこまでも柔らかい。
「んー。あーしも難しいことはわかんないけどぉ、ミサネちゃんってナナシちゃんのこと好きなんでしょ？」
「……はい。一応」
「アハハ。だったらオロオロすんのもしょーがない。だったらさ、あーしからアドバイス。『こうなったらどうしよう？』って考えるのやめて、やりたいことだけやるのがいーよ。恋なんてそんなもんだし？」
朗らかに笑うキララの横で、ようやくハンバーガーを食べ終えたアズサが小首を傾げる。
「ミサネ……恋してる？」
「えっ……と……」
「好きと恋は違うのです？」
「恋のが頭おかしいカンジするよねー。イライラしてムカムカして、ふざけんな！　って怒っちゃったり。でもどんだけ距離取っても、好きな気持ち変わんないから困るってーか。んで、ミウミちゃんは誰が好きなんだっけ？」
「ひえええええっ！　私のことなどどどどうぞお構いなく！」
「んふふ～、好きな子いるんだ？　だよねー。んじゃどんどん押してこ。恋した女子は戦車より強いんだし、押した者勝ちだかんね！」
「ほ、ほうほうほほう……なるほど……参考になりますです！」
夏の夕暮れが迫る路地裏で、女子だらけのトーク会。しかも年齢にずいぶんと差はあるのだが、不思議と居心地の悪さは感じなかった。

それどころか、心がずいぶんと軽くなったように感じる。不安を訴(うった)えれば『何故？』と聞かれるのが当然だと思っていたが、ミウミたちはしなかった。ただこうして談笑(だんしょう)しながら傍(はた)に居るだけだ。

――無理に話さずともいいのだ。

ただそれだけのことが、こんなにもありがたい。

「あー、やっぱ女子トークたのしー。今日、みんなウチ来ない？」

「ひえっ。ありがたいですが、私は戻(もど)らねばですので！　ミサネちゃんを連れて!!」

「そっかー。んじゃまた今度遊ぼ。今度はミウミちゃんの彼氏(かれし)、連れてきてよ」

「カレシ！！？　ではないのでして、どうぞご勘弁(かんべん)を!!」

ミウミがぴょんと飛び上がってお辞儀(じぎ)をし、細い腕を搦(から)めてくる。

「では行きます、ミサネちゃん！　キララさん、アズサさん、ありがとうございましまし！」

「はーい、またねー。ここまっすぐ行けば明るいとこ出られるからね、気を付けて！」

「またね」

ミサネも慌(あわ)てて振り返り、手を振っている二人を注視する。

(私は未来から来た人間で)

あなたたちとは文字通り、住む世界が違って。

(用事が終われば帰らなければならなくて)

そうすればもう、二度と会うことはないだろう。

それでも、ここへ来てからの短い時間の中で出会い、言葉を交(か)わした。

彼女らはもう、友人だ。

「……ありがとうございます！」

精一杯(せいいっぱい)の気持ちを込めて声を張れば、思いは届いたようだった。キララとアズサが暗がりで笑う顔が目に入る。

「頑張れ～！」
届いた声援を、大事に大事に胸へしまいこむ。

「今夜もお泊まりしてくださいましまし、ミサネちゃん。ミサネちゃんは私の大切なフレンドなのです」

　腕にしがみつくミウミに向かって、ミサネは小さく頷いた。

　もう逃げるのは止めよう。支えてくれる友人たちがいるのだ。自分はきっと強くなれる。

　夏の朝日が、今日も眩しい。

　ミウミ宅を出たミサネはミウミと共に、スウィートビーチまで足を運んでいた。ここはその名の通り、浜辺を有する若者向けの観光地だ。

　オシャレな雑貨屋やペットカフェ、アクセサリーショップなどが立ち並ぶ様は華やかで、道行く若者たちは誰もが愉しげだ。その空気に馴染みきれないまま、ミサネとミウミは並んで通りを歩く。

　昨晩は結局ミウミと散々他愛もない会話をし、喋り疲れて眠りこけてしまった。トーク内容も好きな食べ物や色、趣味などに終始して有用な会話はしていない。だがそれでよかったと思う。何でもないことを気軽に話し合える友人の存在はとてもいいものだ。

「今日も今日とて太陽さんが頑張っておりますのです……」

　汗を拭うミウミの顔色はあまり良くない。昨日も暑い中、ミサネを探し回っていたのだから一日程度は休息が必要なはずだ。

「ミウミさん。しばらく休まれては」

「いえ！　せっかくミサネちゃんがナナシさんと会おうと思ったのです。責任持ってナナシさんのところまで送り届けねばねばねば！」

どうやらすっかり保護者のような気分らしい。嬉しいのと恥ずかしいのと心苦しい気持ちを胸の中に押し込みながら、ミサネは一つ頷く。我儘を通していたのはこちらも同じなのだ。あまり無理をさせないよう、早めに用事を済ませてしまいたいのだが。
　せめて日陰をと周囲を探した時、不意に奇妙な衝撃が頭を襲った。電流が走るような、冷たい嫌な感触だ。
「痛っ……」
　隣でミウミも小さな悲鳴を上げている。自分たちだけでなく、周囲の人々も同様らしい。
　軽い混乱が漂う中、黙って様子を窺っていると先と同じ痺れがもう一度頭を襲った。再び小さなざわめきが起きる。
（今のは一体……？）
「おい。大丈夫か」
　街路樹の作る日陰の下で、青髪の少年が手招きをしている。ミサネが答えるより早く、ミウミがぴょんと飛びはねてそちらへ駆け寄っていった。
「しゃーくん！　どうしたのです？」
「探してた」
　てっきりミウミを探しているかと思ったが、ナツカゲはこちらを見つめている。
「私を、ですか」
　遅れて木陰に入ると、ふっと暑さが和らいだ。太陽光線が遮断されただけで、一息吐ける心地になる。
「あいつに手伝ってくれって泣きつかれて」
「そう……ですか」
　やはりナツカゲは人がいいのだろう。いくら暇でもこの暑い中、わざわざ電車を使ってこんなところまで来るのだから。

「ナナシさんには、落ち合う場所を伝えておいたはずなのですが」
「お前が迷子になると困るからここで見ててくれって」
「は」
「砂浜で待ち合わせなんだろ。ここが入り口だから、通り過ぎないか見ててくれって」
そんな頼みをする方もする方だが、聞き入れるのもどうなのだ。ナツカゲの律儀さに笑ってはいけないと思いつつも、ついつい口元がほころんでしまう。
「ありがとうございました。ミウミさんを連れ回してしまってすみません」
「ノン！　私が同行したいとワガママ申し上げたのですから、ミサネちゃんは悪くアリマセン！」
「連絡なしで突然いなくなるのは悪いだろ。あんまり心配かけんな」
怒っているわけではない。だがナツカゲも心を砕いてくれたことが、眼差しから伝わってくる。
ミウミとナツカゲ。それに夕日坂やブレイクパッセージで出逢った多くの人々が、自分を心配し、気遣ってくれた。今や見知らぬ他人ではないのだ。ナナシに『友達を作れ』とけしかけていながら、わかっていなかったのは自分の方で。
——いつの間にか、友達が増えたのだ。
「……ご迷惑をおかけして本当にすみませんでした。ありがとうございます」
ミサネが深々と頭を下げると、ナツカゲが少し驚いたように目を見開いた。
「謝んなくていいから、早く行ってやれよ。待ってんぞ、あいつ」
「はい。ミウミさんもありがとうございました」
「ノープロブレム！　いってらっしゃいミサネちゃん！」
優しい友人たちに手を振って、ミサネは砂浜へ続く階段を下りていく。

もう迷ったり逃げ出したりはしない。ひとりで全てを背負う必要もない。詳しいことは話せなくとも、支えてくれる友達がこれだけたくさんいるのだ。
(ひとりじゃ、ないから)
靴裏が砂を踏む。
白い浜辺に、人影はまばらだった。海水浴場として開かれていないからか、それともまだ時間が早いのか。
肝心の姿は――なぜかどこにもない。
このままここに居続けてよいものだろうか。しばし悩んだ後、一度ミウミたちの元へ戻るかと歩き出そうとした時、砂浜を懸命に走る足音が聞こえた。
「ヒエッ、あわっ、ミ、ミサネちゃん！　お待たせ‼」
「ナナシさん」
息を切らしているナナシと向き合う。顔を見るのは二日ぶりか。過去へ来てから、こんなに離れていたのは初めてだ。
「ご、ごめん。ちょっと絡まれちゃって、置いてくるのが大変で……」
「絡まれた……？」
「ああ、もう大丈夫。話をつけて来たから。ミサネちゃんの方が大事だしね！」
きっぱりと言い切ったナナシが、ぎゅっと手を握ってくる。その予想外の力強さに、ミサネは思わず目を瞬いた。
「ナナシさん？」
「…………あのさ。ミサネちゃん、ごめんね？」
「何故ナナシさんが謝るのですか」
「俺のせいだろうと思って」

「いえ……私は私自身のことで悩んでいるので。ナナシさんが気に病む必要はありません。私の方こそご心配をおかけしてすみませんでした」
〝ポツリ〟への呼びかけを無視し、連絡すら遮断した相手をどんな思いで探し続けたのだろう。少し日に焼けた顔を見ながら、ミサネは改めて罪悪感に襲われる。
「あっ、謝らなくていいんだよ。俺が勝手に探し回ってただけだから。でもミサネちゃん、この時代に帰る家ってないでしょ？　昨日ミウミさんから連絡が来た時は、ホントにホッとしたよ」
「昨日も一昨日も、ミウミさんの家に泊めてもらいました」
「うん、聞いたよ。俺に会いたくないとか、俺が嫌いになったとかならそう言ってくれれば探したりしないし、連絡も取ろうとしないから。今度からそうしてね！」
　そんな言い方は卑怯だ。だがミサネは一旦感情を押し込んで、緩く首を振った。
「……もう、勝手にいなくなったりはしません。今度からちゃんと、一人になりたい時は行き先を伝えていきます」
「よろしくね。じゃあ、仲直りできるかな？」
「仲違いをしたつもりはありませんでしたが」
「よかった！」
　ようやく手が離れ、ナナシは海へ視線を向ける。その横顔が、心なしか少し大人びたような気がする。
「俺さ。ミサネちゃんがいない間、あちこち歩き回ったんだ。ミサネちゃんを探しながら、友達作りをしたりね。その時あのハッカーの人たちにも会って、色々話を聞いたんだよね。黒幕？の目的が全人類をハッキングすることだとか、ハッカー？　はそれを望んでないとか。でもとにかくミサネちゃんに会いたくてさ。まずは探そうって思って」
「……あの、今さらっと重大なことを言いませんでしたか」
「え、どれだろ。ハッカーの人たちに会ったとこ？」

「いえ、黒幕の目的が全人類のハッキングという……。そういえば先程、頭に電流が走るような衝撃がありましたが」
「ああ、それはね。ハッカーの人たちが黒幕の人を裏切って、個人で全人類のハッキングを行おうとしたみたい。でも黒幕の人が怒って、途中で止めたのかも」
　自分がナナシの傍を離れている間に、状況がずいぶんと進んでいたらしい。もう少し詳しく話を聞こうと口を開きかけた時、ミサネはこちらへ近付く気配に気付いた。
「だからさー、人探しよりこっちの話の方が重要じゃんって散々言ったのに？　聞いてないのそっちだし」
　現れた人影は三つ。思わず身構えたが、どれも見覚えのある顔だ。
　不登校児童、キライ。カフェ店長のコトラと、黒ゴシックドレスを着たトバリ。こうして並ぶと圧巻の曲者揃いだが、ハッカーたちの様子が先日とは違う。どうも覇気というか、目的意識が感じられない。
「上で待っててって言ったよね、俺!?」
「ウルセー、待ちくたびれたから来たんだよ。待たせるなら喫茶店代ぐらいよこせー」
「ごめんね、キライ君が暑くて待つの嫌になっちゃったらしくて……涼しいところ入ってお話する？」
「そんなに長く話し合うことなどないと思いますが。伝えることだけ伝えて退散すればよろしいでしょう？」
　キライとトバリはナナシに負けず劣らずのマイペースぶりである。コトラはどうにか場を纏めようとするのだが、空気のような扱いぶりがまた涙を誘う。
「黒幕を裏切ったというのは……？」
「そりゃつまんないからだし。アイツの考えてることも喋ってることも意味わかんない。人類の意思の統一がどうとか言っててさ」

「それは貴方がたの目的とは違うのですか」
「違ーう。似たようなモンだけど、根本的なアレから全ッ然違うよ。だからこっちで好き放題やらせてもらおうと思って………」
　急に言葉が途切れた。あまりの不自然さに、ミサネは思わずキライの顔を覗き込む。
　それまで生意気そのものといった顔と口調で喋っていた少年は、なぜか完全に動きを止めている。
「あれ、キライ君？　おーい。……おかしいな。これ、ノミヤ君も同じ状態になったよね？」
　コトラがおろおろしながらキライの肩を叩いてみるが、やはり反応は薄い。見ているだけのトバリは相変わらず落ち着いた様子のまま、目を細めて笑う。
「そうですわね。恐らく、あの方が口封じをされているのでしょう。幾ら寛容であっても、やはりあのプログラムを好きに使われては困るようで」
「あの方とは誰のことですか」
「まぁ、直球ですのね。前に質問された時、お答えできないと申したはずですが……。ウフフ、いいでしょう。私たちに指示を下していたのはミカドさんですわ」
　ナナシが息を呑む音が聞こえた。
　予想していた答えとは言え、ミサネ自身も直接耳にしてしまうと心臓が大きく跳ねた。
　間違いであれと思っていたわけではない。ただ、確定した現実を前にするとやはり心が痛かった。
　黒幕。ラスボス。——彼は『敵』なのだ。
「貴方たちとの目的の違いとは、何だったのですか？」
「そうですね……強いて一つ挙げるとすれば、彼が人に対して優しすぎたことですわね。他人に迷惑を掛けることを何より嫌っている上、自分の存在すらが他人の迷惑と考えているようで……

うふふ、なかなか読めないお方でした」
ミカドを裏切ると決めたから、これだけすらすらと情報を吐き出すのだろうか。トバリの変わり身の早さにミサネは思わず嫌悪感を覚えた。
元々彼女らはミカドに忠誠を誓っていたわけではないだろう。ただ利害の一致する面があって手を組んでいただけのはず。仲間と呼べる間柄ではないとわかってはいるが。
「貴方たちが裏切ったということは、あの人はまた一人なんですね」
「そういうことになります。あの方と長く付き合いを保つのは、どんな人間でも不可能ではないかと。あの方には人として最も大事なものが欠落していますわ」
思わず咎める眼差しを送ってしまったが、トバリはさらりと受け流して笑うだけだ。
「……なぜ、わざわざこちらに接触してきたのですか」
「私たちはあの方を裏切った身の上。あの方が望む世界を私たちは望んでいない。ゆえに、アナタがたが虎穴に飛び込むつもりならこちらとしてもありがたいのです。私たちではとても、あの方に太刀打ちする気力はありません。どうぞ頑張って下さいませ」
優雅に一礼すると、これで話は終わりだとばかりにトバリは一人で歩き出す。
「あっ、ちょっ、もー！　キライ君、歩ける？　しょうがないな、おんぶしていくしかないか……お騒がせしてごめんね。おじさんとしてはさ、あの人に近付かない方がいいよって思うんだけど。あの人ほど何をするかわからない人間はいないって言うか……全てが読めないから」
「よく存じてます」
「そっか。それでも行くなら……頑張ってね。ごめんね、ダメな大人で」
コトラはキライを苦労して背負うと、すでに姿の見えなくなったトバリを追って砂浜を去って行く。それにしても、彼はハッカーというイメージから程遠い人物だ。
その背を眺めていたナナシが、思い出したように呟く。

「コトラさんは管理プログラムをハッキングしようとしたことがあるんだって。でも侵入がバレて捕まるかと思ってたら、ミカドお兄さんが来て勧誘されたって」

「他の方たちも同じような状況なのでしょうか」

「うん、そうらしいね。手先が欲しかったってことなのかな……」

ナナシの口調も表情も冷静そのものだ。漂う雰囲気はいつも通りふんわりとして掴み所がない。

「……一度帰りましょうか、ナナシさん。ミカドさんに話を聞かなければ」

「うん！　ミサネちゃんと一緒に帰れるなら嬉しいよ」

満面の笑みが夏の日差しに映える。

ナナシの考えていることが、ミサネにはわからない。

わからないけれど――信じると、もう決めたのだ。

「ミカドお兄さん、今日は帰ってくるかな」

からん、と氷の崩れる音が響く。

二つのグラスにサイダーを注ぐナナシは、相変わらずのほほんと笑っていて緊張感の欠片もない。

「帰ってこないはずはないと思うのですが。ミカドさんもこちらの状況は把握しているでしょうし、私たちが会いたがっていることもわかっているかと」

駄菓子を盛りつけた皿を手に、ミサネはキッチンを出てリビングのソファへ向かう。

昨日、昼過ぎに自宅へ戻った時にはミカドの姿は消えていた。二人でゆっくり過ごしながら一晩が経ち、朝になってもまだ帰ってこない。

状況を考えればすぐにでもミカドと接触したいところだったが、疲れ果てたナナシを引き連れて外を探し回るわけにもいかず、向こうから連絡が来るわけでもなく。
（最終決戦を前にして、束の間の休暇を取っている気分……）
それほどにのんびりとした空気が流れている。今も昼食前におやつを食べようとナナシに誘われ、思わず頷いてしまったところだ。
「こんなにゆっくりしていていいのでしょうか」
「大丈夫じゃないかな。ミカドお兄さんならきっと戻ってきてくれるはずだし。はい、ミサネちゃんもどうぞ」
渡されたサイダーのグラスはよく冷えていて気持ちがいい。ここしばらくは忙しく炎天下を走り回っていたので、ここまでだらだら過ごす時間は久しぶりだ。
「ナナシさんは体力が戻りましたか」
「うん、かなり！　昨日早めに戻ってゆっくりしてたおかげだね」
「頭も働いているようですし、問題はなさそうですね。もしミカドさんが昼になっても戻ってこなかったら、探しに行きますか」
「うーん。探し回っても、ミカドお兄さんが会いたくない時は会えない気がするんだよね。だから待ってても大丈夫だと思うよ」
「では、ミカドさんと会う前に情報の整理をしましょうか」
これまでに起こった出来事の数々と、現状。お互いに認識をすり合わせておくべきだ。
「じゃあ、そうだな……ハッカーの人たちとミカドさんの目的は一致してないって言ってたよね」
「はい。ハッキングを行うという点で一致しても、それ以外の目的部分で食い違いが起きていたようですね。ミカドさんの目指すところは……」
「全人類の意思の統一。これにどんな意図があるかはわからないけれど。……ミサネちゃん、聞いてもいい？」

「なんでしょう」

「ミサネちゃんは、未来からミカドお兄さんを追いかけてきたの？」

そう。黒幕がミカドとわかった今でも、ミサネはまだナナシに隠(かく)していることがある。ナナシの問いかけは当然だ。

口を付けたサイダーがしゅわしゅわと喉(のど)を灼(や)く。刺激(しげき)で潰(つぶ)れていきそうな言葉をどうにか拾い上げ、思い切って口から吐き出す。

「そういうことになります」

「ミカドお兄さんとは知り合いだったんだよね」

「はい……」

「だったら、ミカドお兄さんの目的がわかったりしないかな？」

「……私にも、あの人のことはよくわからないんです。どんなに頑張っても、あの人を理解できることは……ないかと」

光の中へ消えて行った背を思う。

ただ、引き留めたい一心で追いかけてきた。彼が望んでいなくとも、自分がそう望んだから。

「私のやっていることは本当に正しいのでしょうか……」

「ミサネちゃんが正しいと思ったのなら、それは正しいんだと思うよ。俺はね！」

いつの間にかうつむいていたミサネは、再び顔を上げてナナシを正視する。

「ナナシさんは、真実を知る覚悟(かくご)はありますか」

「真実……？」

「ミカドさんが何故このようなことをしているか、全てを知っても後悔(こうかい)しないと言えますか」

からん、と砕(くだ)けた氷が鳴る。短い沈黙(ちんもく)を置いて、ナナシは笑みを深めた。

「俺はミカドお兄さんのことが好きなんだ。ミサネちゃんと同じぐらい大切だし、もしミカドお兄さんが誰かを困らせるようなことをしようとしているなら、どうしてか話を聞いてみたい。怖がらなくても大丈夫だよ、ミサネちゃん」

そうか、自分は怖がっていたのか。
ナナシに言われて、ミサネは手の震えを自覚する。
恐怖を隠すようにぎゅっと握って力を込めた時、玄関の戸の開く音がした。
躊躇いなく近付くいつもの足音。やがてリビングのドアから、見覚えのある姿がひょっこりと顔を出す。
「やあ、こんにちは。二人とも元気かい？」
いつもと全く同じ笑みを浮かべて、ミカドはリビングへ入ってくる。その動作に合わせて、ナナシとミサネは思わず腰を上げた。
「ミカドお兄さん！　聞きたいことがあるんだけど、ミカドお兄さんって黒幕⁉」
空気を読まないとはこのことか。顔を合わせて三秒で直球を投げつけたナナシに対し、ミカドは相変わらず穏やかな笑みを浮かべて頷く。
「そうだね。どの辺りまでわかっているか、聞いても？」
「ハッカーの人たちと方向性の違いで解散して、お兄さんが世界統一しようとしてるところまでは知ってる！」
「なるほど……。じゃあ、まだ解消できていない謎があるはずだよね？」
黒幕であることを指摘されても、ミカドが動揺する気配は一切ない。いつも以上に落ち着き払った態度は不気味とすら言える。
だがナナシも落ち着いたものだ。ミカドを前にして冷静さを保っている。
「……そうだ。ハッカーの心が読めなかったんだ。俺が心を読むために遣うのは、俺に見える数値。つまり、管理プログラムとは全くの別物なんだけど」
「うん、そうだ。じゃあ、そろそろ答え合わせをしようか」
「……ミカドさん」
思わず声をあげたミサネを見て、ミカドは目を細めて笑う。

「ミサネちゃんは嘘が嫌いだろう。大丈夫だよ。……ハッカーが特別な干渉を受けない仕様になっていたのはね、色々手伝ってもらう時に不都合かと思ったからさ。それでも完璧なガードは施してなかったけど」
「管理プログラムによる防壁ではなかったってこと？」
「そもそも管理プログラム自身も俺にしかわからないように組み立ててあるしね。あれは俺が普段見ている世界を、そのままプログラムに落とし込んだものなんだ。これで謎は解けたかな？」
「うん！　ミカドお兄さんにも俺と同じものが見えるんだね」
「そうだよ。それにしても、見た目と名前、それに市民籍のデータまで全部変えたのに、なんでバレちゃったのかな。やっぱり俺の気持ち悪さは隠せないってことかな？」
ミカドの笑みを見ながら、ミサネはとうとう堪えきれずに声を上げる。
「何故……！」
「それじゃ、自己紹介をし直そうか。折角だから昔みたいにね」
　不意に奇妙な光がミカドを包み込む。目を焼くほど眩しくはないのだが、一瞬目を瞑った隙にその姿は変貌を遂げていた。
　片目を隠す白い髪。白いコートに覆われた肉付きの悪い細身の身体。耳に装着された、ウサ耳に似た尖った黒い改造ビットフォン。
　その顔は、目の前にいるナナシとあまりによく似ている。
「俺はナナセ・ヨシ。みんなにはゴミ、クズ、ウジ虫、モヤシ、ホコリ、プランクトン、カス、その他諸々と呼ばれていたから、キミも好きな名称で呼んでくれよ」
　ミカド――ナナセは、目を細めて笑ってみせる。
「……えっ。えっ⁉　俺⁉」

ナナシの驚きも無理はない。従兄弟(いとこ)だと思っていた相手が、成長した自分そっくりの姿で目の前に現れたのだから。

——しかし、過去の自分に会うことは本来厳重に禁じられている。その禁を易々と踏み越えたナナセに、ミサネは強い怒りを覚えた。

「ここまでする人ではないと思っていました。……何故、正体を明かしたのです」

「過去の僕にこの事実を伝えたらこれからキミたちはどう動くのか、僕自身が気になったからさ。そうだ、過去の僕にも伝えておこう。未来の人物が過去の自分に干渉すると、未来の物事を大きく変えてしまう可能性が高い。これを未来の改変と呼ぶんだけど、ある方法を使うと未来の消去さえ行える」

視線を向けられたナナシは、まだ動揺を残しながらもしっかりとナナセを見返した。

「未来の消去……？」

「僕の存在がなかったことになる……要するにキミの未来がなくなるかもしれないということだね。どの程度なかったことにできるかは、僕自身が試したわけではないから不確定だけど。僕がこの時代へ来て行ったことに関しては、多分全部なかったことにできる。世界は僕がここに来る前の状態へ戻るんだ」

「その方法って」

「文字通り、僕を消すことだよ。世界は整合性を保つように作られているからね。僕が作った穴なんてなかったように、すぐに埋まって痕跡を消してしまうのさ。どちらにせよ、僕の存在なんていうのはあってもなくてもいい。むしろない方がよかったってことは、この状態を見れば見当がつくんじゃないかな」

さしものナナシも言葉を失って黙り込む。情報が多すぎて整理しきれないのだろう。

ナナセの真意は不明だ。語られた内容を額面通りに受け止めれば、『自分を止めるためには自分を殺せ』と刃を突きつけているに等しい。

全人類の意思の統一——その真意をまだ語っていないのに。

「さて……僕は３０７タワーの頂上で待っていようかな。頂上の管理室へはキーがないと上れないから、キミたちに一つ渡しておくね」

細い指に差し出されたキーを、ナナシが慌てて受け止める。やはりその真意は窺い知れない。
「……ナナセさんはどうしてわざわざ、追うための道まで提示してくれるのですか」
「ミサネちゃんほど長い期間、僕を構ってくれた人は初めてだったからね。他にいいお礼の仕方を思いつかなかったんだ」
「お礼、ですか。これが」
「気に入らなかったらごめん。それじゃ、先に行くね。もし追ってこなければ、僕は管理プログラムを使って全人類の意思の統一を実現させる。ナナシ、キミがどうするのかをタワーの頂上で聞かせてくれ。僕はどんな結末も受け入れよう」
白コートの裾を翻し、ナナセはリビングを軽やかな足取りで出て行く。
玄関の戸が閉まる音を最後に、重い沈黙が訪れた。ナナシはすでにいつもの微笑を浮かべ、困ったような眼差しを投げてくる。
「ミサネちゃんが俺に隠してた理由って、これなのかな」
「……はい」
「確かに隠したくもなるよね……本当は会っちゃいけない相手なんだし。ええと、それでこれからどうしよっか」
ミサネは大きく一つ深呼吸をした。ついにここまで来てしまった。もうあまり時間はないけれど、諦めるにはまだ早いのだ。
最後まで足掻かないなら、何のために自分はこの時代へ来たのだろう。
「ナナシさん、友達はどのぐらい増えましたか」
「えっ？　ええと、何人だったかな。数えてないけどかなり増えたよ。ねえ、ミサネちゃんはどうして友達を増やそうって言ってたの？」
何度も尋ねられた問いだ。もう答えを濁す理由もないだろう。
「……私の知ってるナナシさん。未来のナナシさんがあんな風になってしまったのは……あるものが欠落しているからなんです」

「あるものって？」

「言葉では表しにくい、大切なものです。それを手に入れるために友達を増やしてほしくて。今まで説明せず、すみませんでした」

「謝らなくていいよ。俺も友達が増えて楽しかった！　でも、その『大切なもの』？　が手に入ったかどうかわからないけど。とにかく行こうか」

　ナナシの差し出した手を、ミサネはじっと見つめる。

　この手を取って３０７タワーへ向かえば、全ては終わる。果たして望みは叶うのか。やり残したことはないのか。不安と焦燥感がじわじわと胸を圧迫し、その場に立ち尽くしてしまう。

「大丈夫だよ、ミサネちゃん」

　手に重ねられる、温かな手。

「俺を信じてくれる？」

　迷った後、ミサネは頷いた。

――ナナシと共に、ナナセを追いかけよう。

　外出準備をして自宅を出たナナシとミサネは、すぐさま異変に気付いた。

　街が、あまりに静かだ。

　ブルーサンストリートには人が溢れているのに、誰一人として会話をしていない。ただぼんやりと誰もが道に立ち尽くしている様は、異様を通り越して恐怖を覚えるほどだった。

「これは……」

　道へ踏み出してすぐ、見覚えのある姿が目に入る。長い睫毛、天使のような白磁の肌。どこにいても目を引きつける美少女が、日の当たる道路際に佇んでいる。

「！　ミウミさん！」

　慌てて駆け寄ったが、何の反応も示さない。うつろな目はミサネを捉えず、ただぼんやりと虚空を眺めるばかりだ。

「これは管理プログラムを使って意識を完全に乗っ取った状態、なのかな」

「かと思います。急いで３０７タワーへ向かいましょう。早く……未来のナナシさんのところへ行かなければ」

「うん！　ミウミさんを日光に当てたままは危ないから、とりあえずマンションの影へ移動させて……よし。行こう！」

　二人分の足音が、凍り付いた街中に響く。車も人も、完全に動きを停止していた。信号機や電子広告がひっきりなしに明滅を繰り返すだけの光景はあまりに異質だ。

　誰も笑わない。喋らない。動かない。意思を奪われて立ち尽くす人々が、幸せそうに見えるはずなどない。

　──こんな世界が、ナナセの望むものなのか。

　胸の痛みを堪えながら、ミサネはナナシと共に３０７タワーへ入り込む。

そこにも不気味な沈黙が広がっていた。大勢の観光客やビジネスマンが人形のような無表情を顔に張り付け、そこかしこに林立している。館内に流れ続ける明るい曲が場違いな雰囲気だ。

　エレベーターホールにも、開いたエレベーターの中にも人は多い。乗っていた人々の手を引いて全員を外へ出し、ナナシとミサネは二人きりで乗り込む。

「最上階、だったね」

　階数ボタンの下に開いた鍵穴へナナシが鍵を差し込み、現れたタッチパネルを操作すると、すぐに小さな振動が響いてエレベーターの上昇が始まった。

　短い沈黙。あの虚ろな眼差しの人々が目に入らないだけで、少し肩の力が抜ける。

「大丈夫？　ミサネちゃん」

「はい。……すみません、少し動揺しました」

「仕方ないよ。でもまだニュースにはなってなかったみたいだし、異変が起きてるのはこの辺りだけじゃないかな。タワーにも一番近いしね」

だとすれば、意識を奪われる人々は時間経過と共に増えていくはずだ。──急がなければ。
　上昇が止まり、ドアが開く。外は一面の黒。壁面に取り付けられたディスプレイが僅かな光源となって、天井からぶら下がるコードや鉄柵を映し出している。
ただのまっすぐな通路だ。奥に何があるかわからないが、ここまで来て帰る意味はない。ミサネとナナシは頷き合うと、同時に一歩を踏み出した。
「この奥にナナセさんがいるのでしょうか」
「待っててくれるといいんだけど。……って、ミサネちゃん！　ストップ！」
「え？」
　ナナシに肩を掴まれた途端、指先にばちんと強い衝撃が走った。
「ウィルス……！」
「うん。今解除するから下がってて」
　それは通行を阻害するためにばらまかれたものではなく、単にナナシの力を測るために置いておかれたオブジェなのだろう。現にナナシはほんの僅かな時間でウィルスを解読し、無力化に成功してしまう。
「これまでとは少しパターンの違うウィルスだけど、大丈夫そうだ。行こう」
　差し出された手を握る。始めは自分が掴んで引っ張るばかりだったのに、いつから逆になったのだったか。まっすぐに前を見据える背中が、不思議なほど大きく見える。
　暗い通路を進むたび、ウィルスが道を阻む。それらを丁寧に処理しながら進み続け、ようやく行き止まりが見えて来た。
　あの扉の奥にナナセが待っている。たった独りで、そこにいるのだ。
「……この先が、管理室ですね」
　ミサネが足を止めると、ナナシも不思議そうな顔をして立ち止まる。
「どうしたの、ミサネちゃん」

「謝りたいことがあるのですが、聞いていただけますか」
「うん。でもミサネちゃんが俺に謝ることなんてないと思うけどな！」
「いえ。私は多くの隠し事をしていました。嫌われても信用されなくなってもいい。貴方が世界から消えるのが何よりも恐ろしくて。……本当にすみません」
「やっぱり謝ることじゃないと思うけど。ミサネちゃんは、どうして俺のためにそこまでしてくれるの？」
「それは先日言った通りです。……口に出すの、結構恥ずかしいんですよ」
——貴方のことが好きだから。
「だから……怖いんです。この先へ行くのが」
「どうして？」
　ナナシの穏やかな声を聞いても、顔を上げられない。深くうつむいて、胸の中に渦巻く不安をようやく口にする。
「ナナシさんはきっと、人類を救うためなら自分の命すら投げ出してしまう。存在が消えることすら恐れないでしょう。私はそれがどうしても、嫌で」
　このまま進めば、結果が出る。
　これで正しかったのか。間違っていないのか。あと僅かで現実が明らかになると思うと、あまりの恐怖に足が竦む。
「ナナセさんを止められるのは、きっとナナシさんだけです。でも……」
　言いよどんだミサネの目の前に、発光するディスプレイが差し出される。そこに表示されているものがナナシのフレンドリストだと気付くまで、少し時間がかかった。
　先日までと比べものにならない数の名前。数度のスクロールでは追いつかないほどだ。人数にして四十人は超えているだろう。
「こんなに……」
「ミサネちゃんを探している間、すごくたくさんの人が協力してくれたんだ。俺が頼んでないのに友達になってくれたりね。そんなのって初めてで、俺みたいなのにそこまでしなくてもって思

ったけど、みんなミサネちゃんのためにフレンド登録してくれたんだよね。だから、ありがとう！」
「いいえ。いいえ、違います。これは貴方の」
「ミサネちゃんがいなかったら俺は今だって引きこもりのままだったよ。俺みたいなゴミクズは存在する価値もない、いつ消えてもいい。名前も中身も存在しない、文字通り名無しのままでいいってずっと思ってたのに。ミサネちゃんを探してる時はそんな気持ちも忘れて、とにかくもう一度逢いたいって必死だった」
繋いでいた手に、もう片方の手が重なる。機械や無機物ではなく、血の通う人の手の温かさ。
「泣いて笑って走って、こんなの生まれて初めてだった。息が切れて心臓が痛くて、叫び出したい気持ちで。無我夢中で何もわからなかったけど、今ならわかるよ。俺は友達になってくれた人や、大好きなミサネちゃんから心を教えてもらったんだ」
不意に視界が歪む。瞬きをした拍子に頬を伝った感触で、自分が泣いていることにようやくミサネは気付いた。
「わっ、わっ？　ご、ごめん。変なこと言っちゃった？　大丈夫？」
「……謝らないで、ください。……すみません。私、貴方のことを考えるとこうなってしまうんです。気にしてしまうし構ってしまう。勝手に認識して、関わろうとしてしまう。貴方が好きだから、不幸も幸福もみんなみんな分けてほしい」
「……俺が一番困ることだ」
「知ってます」
「でも今は嬉しいよ」
ふわ、と身体が柔らかい感触に包まれる。
「ありがとう、ミサネちゃん」
——この人なら、きっと世界に残ることを選んでくれる。
堪えきれない涙をこぼしながら、ミサネはナナシを抱きしめる。

間違いであってもいい。未来に続いてくれるなら構わない。ナナシがこの世から消えなければ、それでいいのだ。
待って。消えないで。ここにいて。
伝えられなかった思いが、今ならきっと伝わる。
「……ありがとうございます、ナナシさん」
抱きしめられたまま、ミサネは子どものように泣き続けた。
泣いて泣いて泣き続けること数分。ようやく離れた時には目も頬も熱くて痛い。
こんなに泣いたのはいつぶりだろう。きまりが悪すぎてナナシの顔を見られない。
「……すみません。お恥ずかしいところをお見せしました」
「いいよ。俺も色々喋って、ちょっと恥ずかしいし……」
ちらりと視線を合わせると、照れ笑いが返ってきた。
「じゃあ、行こっか」
差し出された手を、ごく自然に取る。これまでまとわり続けてきた恐怖は、いつの間にやら霧散していた。
「行きましょう」
数分先の未来を目指して、二人は足を踏み出す。

扉の先は重苦しい闇色に染まっていた。
壁面を埋め尽くすモニター群。何本ものコードが蜘蛛の糸のように壁を這い回り、強い圧迫感を与えてくる。
佇む人影はたった一つ。白いコートの後ろ姿がふわりと振り返って微笑んだ。
「やあ、過去の僕とミサネちゃん。来てくれたんだね」
ミサネはぎゅっとナナシの手を握る。
もう迷いは捨てた。あとは辿り着いた現実と向き合うのみだ。

「……さて、そうだな。じゃあ、少し過去の話に付き合ってもらおうかな」
こちらの内面を全て見透かすような目をして、ナナセはいつもと同じ調子で話を始める。
「過去と言っても、ナナシ、キミにとっては未来の話になるね。過去の僕が未来に希望を持ってるとも思えないけど、聞きたくなければ耳を塞いでくれ」
「聞くよ。えーと、ミカドお兄さんって呼ばない方がいいのかな？」
ナナシの言葉に、ナナセが少し意外そうな顔をする。
「呼びやすいように呼んでくれていいよ。僕はキミをナナシと呼ぶし」
「じゃあミサネちゃんみたいに、ナナセさんって言おうかな！」
「いいよ。……まず管理プログラムについてだけど。僕は大きくなってからプログラマーとして働いていて、偉い人の依頼で管理プログラムを作ったんだ。最初はそこまで大それたことにプログラムを使うとは思っていなかった。でも偉い人たちはそれを使って、人々を縛り上げるような社会形態を作ってしまった。もちろん、僕に無断でね」
ナナセが目を瞑る。悔いているような仕草にも見えたが、ミサネは知っている。彼は、ミサネの知る未来のナナシは、その場に見合う感情を真似るのが上手いだけなのだ。
「僕は何てものを作ってしまったんだろうと思ったんだ。多くの人々はプログラムに縛られることなんて望んでなかっただろうし、そのせいで悲しむ人もそれなりに多くなったから。だから僕は、管理プログラムを作る前へ戻ろうと考えてね。どうしたと思う？」
「タイムマシンを作ったんでしょ？　でも、そんな簡単に作れるものなのかな」
「……実際にナナセさんは作ったんです。作れないものなど、ないのかもしれません」
未来で天才の名をほしいままにした青年。彼の生み出すプログラムや機械は常人には決して考えつかない代物で、世界の在り方を一様に変えてきた。
だが、ナナセ本人だけは。どれだけ素晴らしいものを発明しようとも、何一つ変わることがなかったのだ。

「作れないものもあると思うよ。僕だって完璧じゃない。タイムマシンに関しても、あまり時間はなかったし丁寧に作ることもできなかった。実際、管理プログラムを作る前に戻ろうとしたら、到着地点がここ……八年も前の時代になってしまったからね」
「でもナナセさんは、この時代に来ても管理プログラムを作ったんだよね？」
　過去の自分の問いかけを聞いて、ナナセは嬉しげに頷いた。
「そう。この時代へ来て気付いたんだ。管理プログラムを使って、もっと良い方向に未来を変えることができるんじゃないかってね。これは昔から僕が抱いていた、世界平和の夢を実現する機会なんだ。みんなが幸せになる方法なんて、実はとっても簡単なんだよ」
「それが……」
「〝全人類の意思の統一〟。これが成れば人と人の間で衝突なんて起きない。争いや揉め事、気持ちのすれ違いもなくなる。みんなで手を取り合って笑い合える世界が来るんだ」
　その世界こそが平和で美しいのだと彼は語る。全ての人類の幸福のためだと信じきっている。
　ナナセ以外の者が口にしたなら、馬鹿げた妄想だと笑い飛ばしただろう。だが彼ならば実現できる。実際——外ではすでに、地獄が始まっていたではないか。
「……」
「まだ悩んでるのかい、ナナシ。そうやっている間にも処理は進んでいるよ。全人類の調整を終えるにはまだかかるけど、残された時間は多くない。キミはどうする？」
「……」
　ぎゅっと手を握り締める感触に驚いて、ミサネは思わずナナシを見た。その口元にはまだ笑みがある。けれどこれだけ迷うナナシを見るのは始めてかもしれない。
「……そうだな。なら、もう少し教えてあげよう。僕がこの時代へ来て、過去の僕に干渉した時点で。この時代になかった管理プログラムを作った時点で。今の僕という未来は、もう存在しないことになる」
「未来が変わってしまうから……？」

「うん。キミに未来はあるけれど、到達する未来は僕じゃない。どのタイミングかはわからないけど、この僕は確実に消えてなくなるよ。その後も管理プログラムは全人類の意思を統一して稼働を続ける。ただし今ここで僕を消せば、世界は全て元通りになる。違いとしては僅かだけど、キミにとっては大きいだろう？」

口を挟めないまま、ミサネはナナシの手を強く握り返す。今度はナナシの方が驚いた顔をしてこちらを見てから、大丈夫だとでも言うように笑いかけてくれた。

その仕草を眺めていたナナセが、少しだけ顔を曇らせる。

「僕のことだから、僕自身は一番不必要だと思っているだろうけど。唯一、ミサネちゃんが気に病んでしまいそうなのが心苦しくはあるかな。せっかくここまで追ってきてくれたのに、期待に添えなくてごめんね」

そうだ。どうしても叶えたい望みがあって、ナナセを追ってきた。自分の存在が消える危険まで冒して時間を越えた。

全ては、今この時のために。

「さて。そろそろ答えを聞かせてもらえるかな。過去の僕。キミは未来をどうする？」

未来へ踏み出すために。

心臓が痛くなるほどの緊張感の中、ナナシが息を吸う音が聞こえる。

「俺は……」

一呼吸の後、決意が零れる。

「何もしない」

一瞬の静寂。

ナナセの目に本物の驚きが浮かぶ様を、ミサネは見逃さなかった。

「驚いたな……僕が一番、予測していなかった返答だ」

「でも、その意思の統一？　っていうのは止めてもらいたいんだ」

「それはどうして？」

「人はみんな違う心を持っているから争ったりすれ違ったり傷付け合う。心なんてとてもちっぽけなものだと思うけど、俺はミサネちゃんと一緒にこの街の人と触れ合って少しだけわかったんだ。みんな違うから、こんなにも世界は面白いんだって」

「面白い……と思えるほど外の世界を見たのかい」

「うん。外に出て見てきたよ。完璧な人間なんかいない。誰でもどこかが必ず欠けてる。その欠けた部分も、人それぞれで、だからこそ他の人と欠けた部分を補い合える」

「そうやって集合した結果、合わない相手と争いが起こったとしてもよしとするのか」

「そうしたらまた別の誰かが止めに入ってくれるんじゃないかな」

心底驚いたように息を吐いて、ナナセは更に質問を重ねた。

「過去の僕が、そこまで心変わりした理由は？」

「ナナセさん。俺は多分、俺に足りなかったものを少しだけ理解することができたんだ」

二人のナナシがまっすぐに見つめ合う。片や過去、片や未来。経験も知識も未来の方が遥かに上であるはずなのに、なぜか相対する姿は未来——ナナセの方が、少しだけ小さく見えた。

「そうか。わからないけど……わかったよ」

微笑んだナナセが、キーボード脇へ設置されたボタンに触れる。途端に壁面のモニターが、一斉に高速で文字列を吐き出し始めた。

「これは？」

「ハッキング用のデータ及び管理プログラムの処理。その他あれこれを全て削除しているんだ」

「じゃあ！」

「過去の僕がそう決めたなら、それが僕の未来だからね」

重なって響き合う電子音が酷くものの悲しい。ここまでのものを準備するため、ナナセが払った労力は並ではないはずだ。
　それをこうも容易く捨てるとは、やはりナナセらしい態度と言えるが。
「……いいんですか？」
　ミサネの問いかけに、ナナセが苦笑を零す。
「僕だってナナシだ。詳しく話を聞かなくたって、一瞬で全てを理解することができる。僕自身のことは一番理解ができないけれど、過去の僕は予想外の変化を遂げた。その事実を確認した上で、今の判断を下したんだ」
　削除命令を出してしまえば、あとはやることがないのだろう。ナナセはデスクを離れて真っ暗な壁面へと歩いていく。
「プログラムが完全に削除されるまで、少し時間がかかるよ。折角だし景色でも見ていくかい？」
　ガコン、と鈍い音が響く。壁面だとばかり思っていた壁が割れ、目映い光が溢れ出す。
　まず目に入るのは抜けるような夏の青空。林立するビル、様々な色の屋根、まっすぐに続く道路。高層タワーの最上階から見下ろすと人も車もあまりに小さい。
　ナナセはいつも、こんなに遠い場所にいたのか。この孤独な世界で暮らした時間の長さを思うと、ミサネの胸は微かに痛む。
「……たった八年でも、未来の風景と変わるものですね」
「人の向上心はすごいものだよね」
「八年後ってそんなに違うんだ？　気になるなぁ」
　窓ガラスの向こうを熱心に覗き込むナナシを見て、ナナセは目を細めた。
「時間なんてあっという間さ。待っていればすぐにわかる。……ねぇ、ナナシ」
「なに？　ナナセさん」

「僕は、僕以外の世界に存在する全てのものが好きだけど。今のナナセ・ヨシはどう思っているのかな」
「俺？　うーん……」
　ナナシの視線はまず眼下の街へ。それからミサネ、そしてナナセへと動く。
「……俺も世界に存在する全てのものが好きだよ。この街も、街の人も、友達も、ミサネちゃんも」
　最後に、少年はどこか照れ臭そうに笑ってこう言った。
「それにね。俺は、俺自身のこともちょっとだけ好きだよ」

エピローグ

「本当に帰っちゃうんだ……」
その声があまりに小さく萎れて悲しげだったので、ミサネは思わず掃除の手を止める。
「私は未来の人間なので。この世界にずっと居座るわけにはいかないんです」
「わかってるけど、寂しいな。この世界のミサネちゃんは、まだ俺のことを知らないんだよね」
「それは私の口から伝えられません」
過去へ飛んだ挙句ここまで多くの人に干渉しておいて、今更何をと思う気持ちはある。
だが、ミサネの願いは叶ったのだ。これ以上過去に留まらず、未来へ戻って本当の結末を見届ける義務がある。
「ナナシさんには友達がたくさん増えたでしょう。だからもう、大丈夫です」
「うん……でもミサネちゃんの代わりはいないよ」
「元から私はいませんでしたよ」
僅か三週間程度の滞在。痕跡を残さないよう部屋を隅々まで掃除して、持ち物も全て鞄へ収容済みだ。
ベッドに腰掛けたナナシは、しょぼくれた顔を隠さない。両足をぶらぶらと揺らす仕草は拗ねた小学生を思わせる。こんな一面があるとは意外だった。これまでワガママを言うようなこと

は、一度もなかったのに。
　３０７タワーでの一件から五日。全人類へ及ぼうとしていたハッキングプログラムは完全に削除され、街には日常が戻っていた。
ハッカー集団が罪に問われることもなく、人々が意識を失っていた数十分間がニュースになることもなく。――ただし管理プログラムはまだそのまま存在している。
「ミサネちゃん。準備できたかい」
ドアのノック音から一拍置いて、ミカドがひょいと顔を出す。
「あ、はい。そろそろ」
「こっちも準備できたからいつでも行けるよ。向こうで待ってるね」
　成長したナナシの姿を止め、元の姿に戻ったミカドが室内を眺めてちらりと笑う。
ミカドは片道切符だったタイムマシンを改造し、たった五日で未来へ戻る仕様を付け加えてしまった。ミサネもミカドと共にタイムマシンへ乗り込み、八年後の世界へ戻る手筈だ。
　それが今日。ここで別れれば、もうこの世界へ戻ることは二度とないだろう。
「ゆっくりでいいよ。それじゃあね」
　気を利かせたのか、ミカドはそれだけ告げて扉を閉めてしまう。
　室内には再び二人きり。もうすっかり綺麗になってしまった部屋を見回して、ミサネは身支度を調える。
「今後の夏休みの予定はどうなっているのですか」
「ええと、ナツカゲ君とミウミさんにキャンプに誘われて……アキタカ君も一緒に行くことになったよ。もしかしたらハルヤ君も来られるかも」
「それはなかなか楽しそうですね」
「うん。ミサネちゃんが来ないのをみんな残念がってた」

三週間だけこの街へ遊びに来ていたが、急きょ実家へ戻らなければならなくなった。とナツカゲたちにはナナシから説明してもらうことにしてある。直接会って別れを告げれば、連絡先や実家の場所など嘘を積み上げることになるだろう。それがどうしても辛かった。

「手間をお掛けしてすみません」

「いいよ。俺の方が本当にたくさん助けてもらったんだから」

何度目かの沈黙が落ちる。今日に限って、なかなか会話の糸口を見つけられない。

少し躊躇った後、ミサネは一通の手紙をナナシへ差し出した。

「……これ？」

ぴょんと立ち上がったナナシが恐る恐る手紙を受け取る。裏、表とひっくり返し、表に書かれた自分の名を見て目を丸くする。

「私がタイムマシンに乗った後、読んでください」

「うん、わかった。……女の子から手紙をもらうなんて始めてかも！」

ようやく素直な笑みが浮かぶ。ミサネが大好きで、大切で、誰よりも傍にいたいと願って追いかけてきた人の笑顔だ。

ミサネは腕を伸ばすと、ナナシの細い身体を抱きしめた。

「また必ず会えます。覚えていてください」

「……うん。俺の方こそ。また会ったら、すぐにミサネちゃんだってわかるかな」

「わかりますよ。もしナナシさんがわからなくても、私が見つけるので大丈夫です」

ミサネにとっては一瞬。ナナシにとっては八年。決して短くない時間でも、待っていてほしいと願ってしまう。

「待っててね、ミサネちゃん。すぐに行くから」

ミサネがいなくなっても、もうナナシは独りではない。大勢の友人たちと共に、この街できっと過ごしていけるはずだ。

さようならは口にすまいと決めていた。また会えるのだから。

「……待ってます。また会いましょう」

見つめ合った二人の顔に、笑みの花が咲く。

タイムマシンの中はずいぶんと窮屈だった。本来は一人乗りの機体に無理矢理座席を一つ追加したような形だ。窓はなく、壁一面に大量のランプと計器。それらがどういう意味合いを持つものなのか、全く見当がつかない。

シートへ収まると、ミサネは大きく息を吸った。

今度は過去でなく未来へ向かう旅だ。ナナシには言わなかったが、確実に辿り着ける保証はない。過去へ来た時と同様、時空の渦に呑み込まれれば最悪の場合存在が消えてしまう可能性もあり得る。

「準備はいいかい、ミサネちゃん」

「はい、いつでも」

「それじゃあ行こうか」

隣の座席で計器をいじっていたミカドが、古風なキーを回転させる。すぐに機体が振動を始め、轟音が身体を包み込んだ。

帰るのだ、未来へ。来た時は一方通行だと覚悟を決めてきたから、いざここへ座るとひどく不思議な気分だ。

「しっかり掴まっててね」

不意に訪れる浮遊感。連続する急加速と急落下に襲われ、意識が真っ白に染まる。

「ありがとう」

最後に小さな小さな呟きを聞いた気がした。

幻、だったのだろうか。

ふと気付くと、機体の振動が止まっていた。

隣を見る。操縦席は――空っぽだ。

タイムマシンから転がり落ちるように飛び降れば、ミサネはそこがビルの屋上だとわかった。

青い空。視界に広がる無数の建築物。階段を探し当てて駆け下り、目の前に現れたエレベーターに飛び乗ってようやく地上へ辿り着く。

そこはミサネがナナシと共に歩いたブルーサンストリート。しかし立ち並ぶ店も行き交う人々も、何もかもが趣を変えている。

戻ってきたのだ。未来へ。

気付いた途端、人混みをかき分けて走り始めていた。彼は必ずどこかにいるはずなのだ。そうでなければ何故、自分は過去へ行ったのだ。

走って、走って、走って。呼吸が上がって、息が苦しくて、目尻に涙が滲む。

――あの人がいなければ、今の私はいない。

この思いをもう一度伝えたい。喜び、嬉しさ、恥ずかしさや、胸の痛くなる寂しさを。

一緒にいて何を感じたか。共に暮らし、世界を見て、どんな思いを抱いたのか。もう一度きちんと伝えたいのだ。

きっとどこかにいる。また会うと約束したのだから。

必死に辺りを見回していると、行き交う人々の合間にちらりと特徴的なビットフォンが覗いた。

黒くとがったウサギの耳に似た形。白いコートに白い髪。その人物は、今にも人混みへ消える寸前だ。

「……待って！」

呼びかけが届いたのだろうか。去っていこうとする背が止まる。

「………ナナセさん！」

息を切らして名を呼ぶと、彼はこちらを振り返った。

大人びた青年が、嬉しげに笑って目を細める。

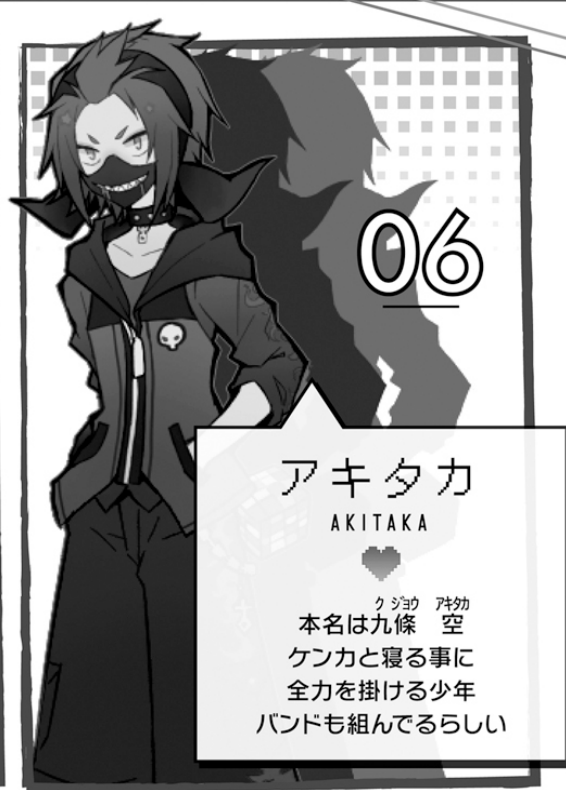
「ミサネちゃん。おかえり」

迎え入れるように広げられた腕の中へ、ミサネは全力で飛び込んだ。

1bit Heart　friends list_01
ミサネ
MISANE
本名は深琴（ミコト）　心（ミサネ）
ナナシの前に現れた
謎の少女
落ち着いてはいるが
わりとドジをふむ
ある目的のために
未来からやってきた
01

1bit Heart　friends list_02
ナナシ
NANASHI
本名は七々四
引きこもり少年
利他主義で積極思考
世界を数値に変換できる
特技も持つ
02

03
ミカド
MIKADO
本名は逢坂(アイサカ)　門(ミカド)
ナナシの従兄の青年
体中にメモをする癖がある
現在の管理プログラムを
組んだ人
しかしその正体は……

1bit Heart friends list_04-05
ナツカゲ
NATSUKAGE
本名は蘇芳(スオウ)　夏(ナツカゲ)
いつも機嫌が悪そうな少年
服は常にびしょぬれている
04
05
ミウミ
MIUMI
本名は美月(ミヅキ)・ミクルアーノ・海(ミウミ)
明るく元気なアルビノの少女
日本語には
まだあまり慣れてない

08
アイラ
AIRA
本名(?)は橘　藍
心を持ったアンドロイド
製造者の影響からか、
少々テンション高め

06
アキタカ
AKITAKA
本名は九條　空
ケンカと寝る事に
全力を掛ける少年
バンドも組んでるらしい

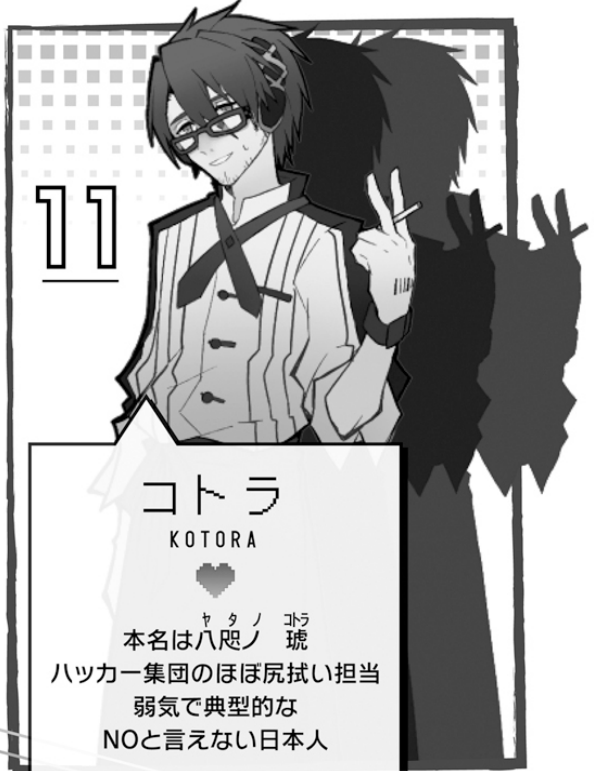
09
ポテテ
POTETE
ポメラニアンと柴犬の
ミックス犬
ビットフォンの音声変換機能で
会話をする

07
ハルヤ
HARUYA
本名は凪梳　陽
実家の花屋の手伝いをする少年
人に対して丁寧な態度で、
笑顔を忘れない

1bit Heart　friends list_10-13

1bit Heart　friends list_14-17

16

ハクヒ

HAKUHI

本名は五百扇（イオギ）　拍（ハクヒ）
巫女のお姉さん
おっとりしている
信心深く、騙されやすい

14

ユキナガ

YUKINAGA

本名は亜沙木（アサギ）　遊（ユキナガ）
ナツカゲと同じ
スカイ・シー・ラン教室に
通う活発なスポーツ少年
楽観的でお調子者

17

タカミヤ

TAKAMIYA

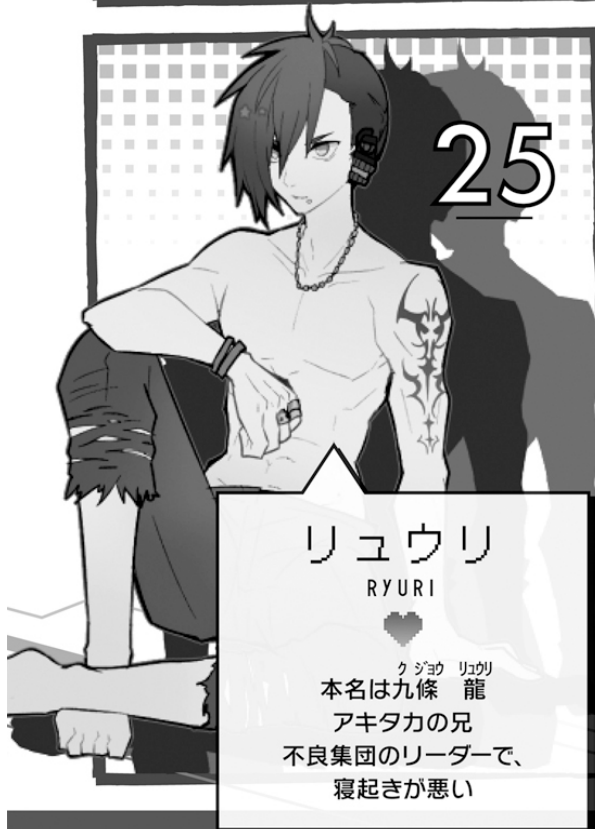
本名は卿狸（キョウリ）　宮（タカミヤ）
警察の男性　マジメな性格
住人達が起こす問題に
常に胃痛気味

15

ヤスネ

YASUNE

本名は 練餅（ネモチ）　子（ヤスネ）
夕日坂で長年続く
駄菓子屋のおばあちゃん
膝の上にのってるのはハナコ

1bit Heart friends list_18-21
20
チノ
TINO
本名は凪梳(ナズキ) 乃(チノ)
花屋を営んでいる女性で、
ハルヤの母親
ぼんやり、ほんわかとしている
18
アクタ
AKUTA
本名は鴎七(カモメ) 芥(アクタ)
「芥森鴎内(アクタモリオウナイ)」というペンネームで
作家をしている青年
常に憂鬱そうで
大体死にたがっている
21
モロク
MOROKU
本名は蓮舎(ハスヤ) 麓(モロク)
庭師をしている青年
自分自身は喋らず、
花型のアバターを通して会話する
19
ロッカ
ROCCA
本名は璃苑(リオン) 鹿(ロッカ)
カフェで手伝いをする少女
元気いっぱいだが
よく失敗をしては慌てる

24
アズサ
AZUSA
本名は九條（クジョウ）　杏（アズサ）
キタカの姉
よく食べるが
最近体重が気になる

22
エンリ
ENLI
本名は神代（クマシロ）　焉（エンリ）
アキタカの友人の少年
ドラム担当で
いつも気だるげ

25
リュウリ
RYURI
本名は九條（クジョウ）　龍（リュウリ）
アキタカの兄
不良集団のリーダーで、
寝起きが悪い

23
アスト
ASUTO
本名は愛染（アイゼン）　歩（アスト）
アキタカの友人の少年
ベース担当で
ラリックマが大好き

あとがき

こんにちは△○□×（みわいば）です。
1bitHeart小説版、発売です。
ミサネ視点での物語でしたが、
いかがでしたでしょうか。
ゲーム本編にはなかったシーンも
追加いただいてわしはハッピーです。
今回本文をお任せしましたが忠実に
1bitの世界を再現
して頂きました。
ネタバレはしません。
よかったらゲームも
プレイして下さい！

ありがとう
ございました！

みわいば

あとがき

ポップで不思議な街で出会う、カラフルで不思議な住人たち。

『1bit Heart』を初めてプレイした時、パチパチ弾けるキャンディーの入った綿菓子みたいだと思ったことを覚えています。綺麗で可愛くてふわふわしていて、ちょっぴり刺激的。優しくて楽しい住人たちとの交流を繰り返すうちに浮かび上がってくる、人との繋がりを求めて彷徨う子どもたちの姿がとても印象的でした。

皆さんはゲームがお好きでしょうか。私は大好きなのですが、これを一人で作るとなると大好きとか言っていられません。途中でしんどさに頭を抱えるのが目に見えています。しかし初めてこのゲームに触れた時、膨大なキャラクターのイラストとテキストを原作者の△○□×さんが全て一人で手がけていると知って、ゲーム内に溢れる愛情の正体に思い当たりました。ここには愛しかありません、愛です。

友達を集めるため、何度も行き来した街中（私は特に夕日坂がお気に入りです）。新しく住人を見つけるたび、友達候補が増えたとワクワクしながら話しかけに行く楽しさ。ふとフレンドリストを眺めた時、並んだ名前の多さに冒険の痕跡を思い出した記憶があります。

ゲームでの主人公はナナシでした。けれどゲームをそのままノベライズ化するのでは、ゲーム本編の面白さを再現できないだろうとの思いから、ノベライズの主役はミサネにさせていただきました。

　あの短い夏休みの中で、ナナシとずっと一緒にいたミサネが何を考え、何を思っていたのか。クールで大人びて秘密を抱えた彼女も、本当は恋をするごく普通の女の子ではないだろうか。

　そんな目線でノベライズを楽しんでいただいた後、再度原作ゲームをプレイしてもらえればまた違った発見があるかもしれません。『1bit Heart』はそういった魅力のあるゲームです。さあ、ブルーサンストリートへ出発しましょう！

　最後になりますが、ノベライズ化に当たって原作者の△○□×様には大変お世話になりました。こちらが膨らませた設定に快く了承をいただき、本当にありがとうございます。

　この作品の出版に関わっていただいた皆様、そして本をお手にとっていただいた読者の方々へ心からの感謝を。

高良　万由